

令和4年度 青少年教育論 テキスト

若者文化研究所
西村美東士

個人の生き方にとってもっとも大事なことは、その時期・時代を充実して生きることとつながっている。そのためには青少年に適切な支援・教育を実践する必要がある。そこで、本書では前半では「青少年教育とは何か、その課題と現状」について紹介し、後半は「自分と社会」「集団・組織のなかで生きる」の観点から次の3点を中心に検討を深めていく。

- ① 自己内対話による自己の生き方・考え方への気づき
- ② 個人・世間から社会への視野の拡大と、社会における自己の位置づけ
- ③ 個人完結型から社会開放型への価値観の転換

青少年教育論

令和4年度
青少年教育論
テキスト

青少年教育論

● ねらい、到達目標

個人の生き方にとってもっとも大事なことは、その時期・時代を充実して生きることとつながっている。そのためには青少年に適切な支援・教育を実践する必要がある。そこで、本書では前半では「青少年教育とは何か、その課題と現状」について紹介し、後半は「自分と社会」「集団・組織のなかで生きる」の観点から次の3点を中心に検討を深めていく。

- ① 自己内対話による自己の生き方・考え方への気づき
- ② 個人・世間から社会への視野の拡大と、社会における自己の位置づけ
- ③ 個人完結型から社会開放型への価値観の転換

以上を通して青少年の社会化支援のあり方について、学生が自らの言葉で説明できることをめざしている。

● 科目概要

青少年教育の概要・課題と現状/青少年団体の魅力復活/青少年教育施設論/青少年教育の今日の展開/まだ遠い「青少年教育論」/トランジション/個人化社会に生きる/自己決定の人生/貧困・格差・差別/日本の衰退/ワーク・ライフ・ソーシャル/支持的風土の仲間関係/自己決定と相互理解の方法/起業とソーシャルビジネス/「この授業で得たこと」(視野・能力・考え方・生き方・青少年教育論)。

なお、教材はすべてホームページ(<http://mito3.jp>)で公開する。

目次

1 導入（第1回）

1①本書の意義と内容＝自立と自己決定の人生は若者の願い/アクティブラーニングは自己内対話から/社会教育的な方法論－双方向システムと主体性の支援

2 基本的事項（第2回～第6回）

2①青少年教育の概要・課題と現状＝少年期・青年期の自立/学校外教育：地域で行われる支援の特性

3②青少年団体の魅力復活～団体・集団の楽しさと苦しさ～＝青年団の衰退と青年学級の振興/【討論】高校の代わりに「楽しい勤労青年教育」の復活を

4③青少年教育施設論～宿泊型青少年教育施設における教育機能を考える～＝団体宿泊訓練の抑圧と解放/【討論】青少年教育の場に、自治と参画の支持的風土の宿泊型青少年教育を

5④まだ遠い「青少年教育論」＝「衣服ロス」から考える大量消費社会どういう若者・大人になりたいか/ヤンキー/ひきこもり/同調圧力/みんなぼっち/2012年青少年研調査 拙著「若者の意識、生活、考え方はどう変化したか」解説

3 自分と社会（第7回～第12回）

6①トランジション・キャリア教育＝群れ(school)から離れて一人で社会に飛び出す/『つまづかない大学選びのルール』より/若手社員育成の課題と方法－『組織の中で個性を発揮する人材』に育てるには/「生きる意味」を問う

7②個人化社会に生きる前編＝社会の中での自己決定
再帰性(結局「自分が悪かったんでしょ」と言われる)(古市憲寿『僕たちの前途』)/古市「そこに猛烈に立ち向かわないことによって、若者は絶望からくぐり抜けている」/自己決定論批判と反批判

8③個人化社会に生きる後編～自分の人生を自己決定で生きる方法
解説/個人化社会に生きる若者たちの動向(2012年青少年研調査結果から)/西村美東士「青年教育研究30年から見えてくるもの－個人化を育む社会化支援教育の今日的課題」/個人化・社会化のスパイラル/自分の人生は自己決定で生きる：日次計画表をつくろう

9④貧困・格差・差別～今日の貧困、とりわけ関係性の貧困について考える～＝報われない差別観(学生の記述より)/拙評『高校生ワーキングプアー』『女子高生の裏社会』解説/青少年教育が目指す恋愛関係

10⑤日本の衰退＝拙評佐藤学『第四次産業革命と教育の未来－ポストコロナ時代の

ICT 教育』

1 1 ⑥ワーク・ライフ・ソーシャル～社会化と個人化の連続体としての若者のQOL
＝川島高之『いつまでも会社があると思うなよ』/価値観ゲーム(職業)

4 集団・組織のなかで生きる (第13回～第14回)

1 2 ①一人で生きる、価値観の異なる仲間と生きる、その支援

拙評篠田桃紅『一〇三歳になってわかったこと～人生は一人でも面白い』/拙著「若者の居場所に求められる第3の支援」/自己肯定感を育てる

1 3 ②ビジネスと社会貢献＝駒崎弘樹『社会を変えたい人のためのソーシャルビジネス入門』/ウェブサイト/助成金/起業の鉄則は、最初は小さく、どんどん大きく育てていく。/ビジネスの側から社会に向けたメッセージ (ユーチューブを使った企業広告)

5 まとめ「青少年教育論から得たこと」(第14回～第15回)

1 4 ①青少年教育論の今後の展開～「豊かな人間性」という「常套句」によって失われたもの～

＝竹村詠美『新・エリート教育 混沌を生き抜くためにつかみたい力とは』/廣瀬裕一「『教員の資質向上』でいいのか」/工藤勇一「麴町中学校の型破り校長 非常識な教え」/工藤勇一、鴻上尚史『学校ってなんだー日本の教育はなぜ息苦しいのか』/両角達平『若者からはじまる民主主義ースウェーデンの若者政策』

1 5 ②「青少年教育論で得たこと」(視野・能力・考え方・生き方・青少年教育論)
～上下同質競争から水平異質共生への転換/生涯学習で出会うべき真実とは/自己決定、自己責任のための能力を育てる/水平異質共生における出会いを促すワークショップの方法 (自分と他者の「いま」に関心をもつ、実感を話す、理由を話す、内面を感じ取る、幸せの枠組みを広げる)

青少年教育論
テキスト
チャート

個人の生き方にとってもっとも大事なことは、その時期・時代を充実して生きることとつながっている。そのためには青少年に適切な支援・教育を実践する必要がある。そこで、本書では前半では「青少年教育とは何か、その課題と現状」について紹介し、後半は「自分と社会」「集団・組織のなかで生きる」の観点から次の3点を中心に検討を深めていく。

- ① 自己内対話による自己の生き方・考え方への気づき
- ② 個人・世間から社会への視野の拡大と、社会における自己の位置づけ
- ③ 個人完結型から社会開放型への価値観の転換

1 導入 ①本書の意義と内容＝自己決定の人生は若者の頼り/アクティブラーニングは自己内対話から/社会教育的な方法論＝双方向システムと主体性の支援

2 基本的事項

- ①青少年教育の概要・課題と現状＝少年期・青年期の自立/学校外教育/地域や社会で行われる支援の特性/拙著「若者に関する新たな議論から」解説
- ②青少年団体の魅力復活＝戦後社会教育における団体主義/青年団の衰退と青年学級の振興/青少年団体の革新プラン/まちづくりにおける若者の役割
- ③青少年教育施設論＝団体宿泊訓練の抑圧と解放/ルールの検討/合宿の魅力/団体宿泊施設における個人尊重主義/私が東京都青年の家で考えたこと・チャレンジしたこと/ワーク「2泊3日合宿プログラム」
- ④青少年教育の今日の展開＝青少年教育施策の混迷/青少年学社融合と学校教育の役割/地域の人々の子ども支援/青少年のまちづくりへの夢画
- ⑤まだ遠い「青少年教育論」＝どういふ若者・大人になりたいか/ヤンキー/ひきこもり/同調圧力/みんなぼっち/価値観ゲーム「愛・健康・自己実現…」/2012年青少年研調査拙著「若者の意識、生活、考え方はどう変化したか」解説

3 自分と社会

- ①トランジション＝群れ(school)から離れて一人で社会に飛び出す/学校教育の価値観からの脱皮(工藤勇一「麹町中学校の型破り校長-非常識な教え」)/しかし、学校の役割はそれだけではない→「私はどう生きるか」
- ②個人化社会に生きる前編＝再帰性(結局「自分が悪かったんでしょ」と言われる)(古市憲寿「僕たちの前途」)/古市「そこに猛烈に立ち向かわないことによって、若者は絶壁からくぐり抜けている」/自己決定論批判と反批判
- ③個人化社会に生きる後編＝自分の人生は自己決定で生きる?/日次計画表をつくらう/拙著「若者との協働による価値創造の新しい方向」・「個人化を育む社会化支援教育の今日的課題」/「個人化に対応する青年団体育成の方法を考える」解説/個人化社会に生きる若者たちの動向(2012年青少年研調査結果から)
- ④貧困・格差・差別＝報われない差別観(学生の記述より)/拙著「高校生ワーキングプア」/「女子高生の裏社会」解説/大学生の保守化とZ世代の可能性
- ⑤日本の衰退＝拙著佐藤学「第四次産業革命と教育の未来-ポストコロナ時代のICT教育」/ワークショップ「日本の衰退に教育はどう立ち向かうか」
- ⑥ワーク・ライフ・ソーシャル＝川島高之「いつまでも会社があると思うなよ」/生涯学習時代における学校教育の役割/価値観ゲーム(職業)

4 集団・組織のなかで生きる

- ①支持的風土の仲間関係＝みんなぼっちからの脱却/拙著藤田桃紅「一〇三歳になってわかったこと～人生は一人で面白い」/拙著「若者の居場所に求められる第3の支援」解説/第一印象ゲーム「違いを楽しむコツ」
- ②起業とソーシャルビジネス＝駒崎弘樹「社会を変えたい人のためのソーシャルビジネス入門」/ウェブサイト/助成金/起業の鉄則は、最初は小さく、どんどん大きく育てていく。/ワーク「ソーシャルビジネス企画」

5 まとめ「青少年教育論から得たこと」 視野・能力・考え方・生き方・青少年教育論

1 導入

第1回

① 本書の意義と内容

本書は日本大学文理学部教育学科「青少年教育論」のためのテキストである。

個人の生き方にとってもっとも大事なことは、その時期・時代を充実して生きることとつながっている。そのためには青少年に適切な支援・教育を実践する必要がある。そこで、本書では前半では「青少年教育とは何か、その課題と現状」について紹介し、後半は「自分と社会」「集団・組織のなかで生きる」の観点から次の3点を中心に検討を深めていく。

- ① 自己内対話による自己の生き方・考え方への気づき
- ② 個人・世間から社会への視野の拡大と、社会における自己の位置づけ
- ③ 個人完結型から社会開放型への価値観の転換

以上を通して青少年の社会化支援のあり方について、学生が自らの言葉で説明できることをめざしている。

自立と自己決定の人生は若者の願い

自立には、「身体的自立」「精神的自立」「経済的自立」「社会的自立」の4種類がある。これらの自立は、多くの青少年自身にとっても願いと言えよう。だが、社会は、青少年の願いとしての自立を理解しているようには思えない。それでも、「自立した青少年の育成」は、青少年政策の重要な課題であり続けてきた。そこには、政治案件としての青少年政策と、青少年自身の願いとの食い違いが見られる。

また、青少年自身も、最初の身体的自立としての「出生」を経て、「快感原則」を

満たすために、我慢・延期・迂回（「現実原則」）などして、自ら働きかけなければならぬ「楽園追放」を受け入れる必要が生じる。こうして、青年は社会的にも大人になっていくのである。

このように、自立し、自己決定の人生を歩むことには、高いハードルがある。社会的にコントロールされたことでも、失敗すれば、個人化社会では、結局、「自分が悪かったんでしょ」と言われてしまう。古市は次のように言う。「自由格差社会」という言葉を提起する。ビザなしでも多くの国に自由に行ける、でも、帰ってこれなくなっても「それも自由だ」と揶揄する。評者のまわりにも「めんどうだから海外旅行はしたくない」という若者が増えているのも頷ける。今や、自由は、手放しで喜べることではない。これに対して古市は、そこに猛烈に立ち向かわないことによって、若者は絶望からくぐり抜けていると言う（[西村書評](#) 古市憲寿『僕たちの前途』、原書房、2012/09）。

さて、教育はどうすればよいのか。私は、フリースクールの若者から自己決定への強い願望を感じ取ってきた。一方で、「自分の責任にされる」個人化の進展は、時代の必然である。だとしたら、そのための自立と自己決定能力の獲得を支援すべきだと考えている。

アクティブラーニングは自己内対話から

私はワークショップ型授業を積極的に開発してきた（[生涯教育文化学科ワーク・ゲーム集](#)）。そこで、私の行うワークショップ型授業のどの要素が、どのように学生の自己決定能力を高めるのかを検討したことがある（[西村美東士「ワークショップ型授業の構成要素とその効果－学生の自己決定能力を高める授業方法」](#)、『大学教育学会

誌』22巻2号、pp.194-202、2000/11)。そこでは、課題提示(問いかけ)、紹介(読み上げ)、回答(レスポンス)、指示(ワークの進め方)の指導行為によって、役割提供機能(ワーク)、表現支援機能(文章、話し合い、発表)、受容機能(学生の表現への評価)、課題解決機能(気づきの促進)、揺さぶり機能(固定概念の打破)などの自己決定能力支援機能を発揮したことを明らかにした。だが、「今、何か考えがまとまりそうと思っているときに(ワークの仲間から)別のことを言われてわからなくなったりした」という学生の記述から、次のように結論付けた。

ワークショップでの対他者の体験だけで自己を質的に高めることはできない。他者との相互関与とともに自己内対話の充実こそが、現在、若者が顕在的に求めている「癒し」「居場所」の中でのように「あるがままの自分」でいられることにつながり、さらには自己対社会・自己対歴史の学問の広がりにも通ずるのである。自己決定能力はこのようにして育まれると考える。

最近、アクティブラーニングという言葉がもてはやされ、一人歩きしたのち、新しい学習指導要領ではその文言が消え、「主体的・対話的な深い学び」という表現に変えられた。ここで「主体」と「対話」がキーワードになっていることに注目しておきたい。

「主体」とは「認知、行為、評価するわれ」であり、そのための能力としての「主体性」は、自己内対話を含めた「対話」によって形成されるのである。その能力は「自己決定能力」に他ならない。

私の実施するカード式発想法やクドバス(CUDBAS=CUrriculum Development Method Based on Ability Structure)によるワークショップ型授業では、対他者対話による課題設定と自己内対話によるカード書き込みが行われる([西村美東士「クドバスを活用](#)

[した子育て学習の内容編成－高校生の子をもつ親のために](#)、『聖徳大学生涯学習研究所紀要』3号、pp. 41-54、2005年3月）。このカード書き込みの時間が自己内対話の時間を保証している（[西村美東士「女子学生の社会開放型の子育て観を育む技法－出産・子育ての自己決定能力のための学習を通して」](#)、私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究平成17～21年度研究集録』、pp. 119-132、2010年3月）。

社会教育的な方法論－双方向システムと主体性の支援

私が大学の教員になって最初に試みたのが、「授業出席者は何を書いても良い」という出席ペーパーである。正直に言えば、1時間半を半期で15回分もしゃべり通す知識など持っていないという不安から考え出したものである。このことについて自著『生涯学習か・く・ろ・ん』では次のように書いている（[西村美東士『生涯学習か・く・ろ・ん－主体・情報・迷路を遊ぶ』](#)、学文社、1991年4月）。

初めて演壇に立ち、「学生の注視を一身に受ける立場」になった時、そのプレッシャーから逃れ、どれだけしてしまうか心配でたまらない失敗を最小限に抑えるための方法として考えたのが、学生から私への率直な意見の表明というフィードバックである。

しかし、多人数の学生の前で仲間意識（ピア・コンセプト）が働く中、それを抑圧なく口頭で表明することのできる者はそういない。そこで思いついたのが「出席ペーパー」である。若い世代、とくに女性は、仲間との「交換ノート」などをよく書いている。社会教育施設でも、自由記述のノートを部屋に置くなどしておくと、いきいきと意見や情報などを交換している。そういう軽い感覚なら、彼らも書きや

すいのではないか。

その結果は、予想以上のものだった。初期に「黒板の下のほうに書かれた字は見えにくい」「(大教室のため)字を大きく」などの指摘をさかんに受け、そのような簡単な改善は最初の数回で完了してしまった(と思う)。それ以上に、さまざまな学生のペーパーを読むことによって、まったく自分の話が通じていないということはなく、そればかりかいろいろ思わぬ所で理解や考察を深めてもらえているということがわかったので、大いに安心し勇気づけられた。

学生のほうも、自分の身近な問題や関心事まで書いてよいということに最初は驚き戸惑ったようだが、「授業は我慢して聴くもの」というよけいな思い込みを少なくして、「自らの意思で」座席に座りなおすためには、「出席ペーパー」はかなり役立ったようである。

このように「出席ペーパー」は、とくに初期の頃には、「反応・発展の個別化の促進」の下部構造としての「教授者の不安の解決」や「学習者の主体性の確保」にも大いに貢献するものとなった。

今思えば、双方向といっても、1(教師)対N(学生)の意図的な働きかけだけでなく、N対Nの偶発的交流が生まれる点が、出席ペーパーの想定外の面白さであった。

2 基本的事項

第2回

① 青少年教育の概要・課題と現状

少年期・青年期の自立

青少年の自立は、青少年自身の願いであると同時に、社会の要請でもある。だが、前回見てきたように、その障壁も高い。子どもを愛するがあまり、過保護・過干渉になって、子どもを支配し、私物化し、いつまでも自分のもとに置いておこうとする。

それによって、子どもの自立は妨げられる。また、思春期の子

どもたちの側にも「ほっといてほしい、でもかまってほしい」

という矛盾した気持ちがあるのではないのでしょうか。



周りから見れば、過保護・過干渉の親は、愛情にあふれた親

だとみられ、親の愛情に恵まれなかった若者からはうらやまれるのかもしれませんが。

しかし、過保護・過干渉のもとで生育歴を過ごしてきた人にとっては、自分の人生を自分が歩いていないような気になったり、あるいは逆に中高年になっても、親に依存するような生活（8050問題）を送ったりという問題が生じがちです。

「80代の親が、自宅にひきこもる50代の子どもの生活を支え、経済的にも精神的にも行き詰まってしまう状態」ということを警告する見解が多く見られますが、それと同時に、QOL(Quality of Life)の観点からいえば、親子の依存関係が快適ではないことが問題で、教育の観点からいえば、親子が依存関係を脱するための自立の支援が重要になります。

私は、社会人が個人かを超えて、充実して生きるプロセスをたどるための「第3の支援」がベテラン支援者のあいだに「暗黙知」として存在することに気づきました

([西村美東土「個人化する若者に対する社会化支援における暗黙知の解明」](#) 平成 28 年度～30 年度科研費 (C) 研究報告)。将来に向けた成長の支援とともに、「今ここで」の充実のための支援が、自立支援において重要だと考えました。

学校外教育/地域で行われる支援の効果

ここでは、「塾・教室」や「習い事」とは別の、地域で行われる社会教育＝青少年教育としての「学校外教育」の効果について考えてみます。

私は地域で行われる少年団体活動の指導者向けに次のような提案をしたことがあります ([西村美東土「子どもたちの団体活動」](#)、中央青少年団体連絡協議会『なかまたち』30号、pp.3-6)。

子どもの教育とは、子どもたちにおしなべて「こうさせよう」とする「対策」ではなく (そうは言っても、時として「安全対策」などが必要になることはもちろんだが)、本来的には、子ども自らが気づき多様な「個のふかみ」をもつための、側面からの「援助」なのであるということは、認識しなければならない。未知数のものを外から援助するということに教育の難しさがあり、本当の面白さもある。

つけ加えれば、子どもの「個のふかみ」とつき合える少年団体の指導者は幸せである。なぜならば、近代合理主義社会の中で凝り固まった自分の「準拠枠」が、子どもたちの「個のふかみ」に接することによって快く揺さぶられ、子どもたちとともに育つことを体験できるからである。

少年団体活動については、学校外での体験活動の意義と必要性、そこで身に付く力についての調査に基づく指摘があります ([西村書評](#) 明石要一『ガリ勉じゃなかった人はなぜ高学歴・高収入で異性にモテるのか』、講談社、2013年3月)。明石氏は、

「成功の秘訣はナナメの関係」と言います。文科省によれば、これにより、学校が地域社会と協同し、学校内外で子どもが多くの人と接する機会を増やすことを目指しています。親や教師、子ども同士は含まれません。そこでの「余裕のあるナナメの関係」が効果的だと言うのです。

さらに、学校の図書室などに居場所カフェを開設する試みでは、生徒が親と先生以外の多様なロールモデルに学校の中で出会い、驚くほど心を許し語り合っていると言います（[西村書評](#) 居場所カフェ立ち上げプロジェクト『学校に居場所カフェをつくらう！-生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援』、明石書店、2019年8月）。カフェにはキラキラとした大人だけではなく、生徒からも突っ込まれるような「変な大人」がいたほうが、場としての魅力が増すと言うのです。雑多な多様性が生む価値観の摩擦こそが生徒を成長させるということでしょう。予測不能な未知のロールモデルに出会い、「それヤバくない？」とか「それはさすがにダメでしょう！」と、ゲラゲラ笑いながら大人たちに突っ込みを入れる生徒たちは本当に楽しそうだとはいいます。そして、「そんなのありなんだ」と常識のパラダイムが覆され、生きるストライクゾーンが少し広がり、今まで手を出さなかった悪球にバットを出してみようと考えられるかもしれないわけです。それが生きやすさにつながるというのです。このような地域の人たちとの他愛ない交流が、「今ここで」の第3の支援として、自立支援効果を発揮すると考えられます。

第3回

② 青少年団体の魅力復活

～団体・集団の楽しさと苦しさ～

子どもの頃に集団活動がいやだった理由をS大学の女子学生に思い出して書いてもらったところ、10分程度の時間で、次のような大量のリストができました。

・なんかイラつく。・みんなと同じ行動をするのが嫌だ。・動きが遅いしうるさい時間がかかる。・大人の考えを押し付けられるのが嫌だった。・大人の指示通りに動くことに不快感があった。・嫌いな人と一緒に活動したくなかった。・別のことがしたかった。・つまらなかった。・みんなと一緒に気持ち悪かった。・集団行動を楽しんでいる人にイラついていた。・表面上の仲間意識や協調性に嫌気が指していた。・同調圧力が不快だった。・もっと目立ちたかった。・みんな同じ能力にしたがる or 一定の能力で止めることが嫌だった。・集団行動を求められると寒気がした。・多数決で決めることに違和感があった。・偉そうにしてる奴が目障りだった。・その日の気分と異なることをするのが面倒だった。・集団行動ができる人ほど怠慢。・指示通り動けば機嫌がよくなり、いうことを聞かないと機嫌が悪くなる教師がうざかった。・間接的に考えることを放棄させているようで嫌だった。・多数が正義という考え方が嫌だった。・人と深くかかわることが嫌いだった。・イヌと同じような扱いをされたくない。・個々にランクが付き始めると集団の中で足の引っ張り合いが起きるから。・噂話やでたらめに左右されやすいから。・人の評価をはじめから。

これだけの「量」があると、これをもとに、どのような集団活動、集団指導が望ましいのか、「質」の高い見識を得ることができそうです。自己内対話で考えてみてください。「量から質への転換」と言うことができるかもしれません。

まず、このとき、他者は、指導者は、この子どもに「共感」できるのか、ということを考えてみましょう。私は「1%の批判」という言葉を提案したことがあります。その意味は、批判者がたとえ1%程度しかいなかったとしても、あとの99%の人にも必ず1%ぐらいの同じ「批判」が潜在しているのではないかということです。ですから、だれでも、この女子学生の集団活動への批判に「共感的理解」をすることができると考えています。「同感しろ」ということではありません。

次に、このリストを書いた学生と対話をしていたところ、「いつもは、優等生とは違うが、先生と仲良くフランクに付き合っていたので、誤解しないで」と言われたのです。これには驚きました。子どもの方が、集団指導をする教師側の事情を「大人になって」くんであげていたということでしょう。私も教師をやっていて、「ああ、この学生は大人になって対応してくれているなあ」と気がつくことがあります。「大人になる」ということは、社会に出たときなどは、必要なときもあるのでしょうか。

それにしても、ここでもう一つ注意しておきたいことは、指導者も「集団」を相手にしていないときは、子どもとけっこうフランクにつきあえるということです。「集団」というだけで、指導者にも、青少年にも、何か「圧力」のようなものが生ずるようです。「イヌと同じような扱いをされたくない」というこの女子学生の言葉は、集団指導から自己の尊厳を守ろうとする切実な叫びです。

ここでは、青少年教育の伝統である団体活動や集団主義について、その楽しさとともに、個の尊厳を踏みにじるマイナス面にも注意しながら、検討を進めたいと思います。

青年団は、全員参加型の地縁集団として、戦後の日本を各地で支えていました。青年団は自治の中心にあって、1960年代の高度経済成長による重工業化まで、農産漁村を中心として、むらづくり・まちづくりを推進してきました。青年団で育った人材は、くにづくりにもつながります。たとえば歴代の総理大臣にも、青年団長経験者が多くいました。

しかし、青年団は、高度経済成長の都市化、工業化、情報化、個人化によるコミュニティの崩壊の中で、衰退していきます。代わりに目的集団のサークルが“やや”盛

んになりました。しかし、地域のサークル等の参加率は青年団への参加率には到底及びませんでした。

また、一部にサークル連絡協議体などの社会や一般の若者に向けた活動も見られましたが（[西村美東士「青年の家についてみんなで考えてみよう」](#)、東京都青年団体連絡協議会『大会資料』、1978年8月）、多くは、自分たちが目的とする趣味的な活動に終始していました。

ただし、趣味の軽視、敵視は控えなければいけないと思います。社会教育においても、過去の公民館三階建論に見られるような「社会科学を頂点」とする傾向に対して、「文化活動は刺身のつまか」という反論がなされています。

また、「趣味縁」と呼ばれる若者たちのつながりが、新しいコミュニティとしての可能性をもっていることに注目する議論も出ています。（[西村書評](#) 北田暁大編『社会にとって趣味とはなにかー文化社会学の方法規準』、河出書房新社、2017年3月）
（[西村書評](#) 石黒格ほか『「東京」に出る若者たちー仕事・社会関係・地域間格差』、ミネルヴァ書房、2012年9月）。

今日では、青年層だけで固まるのではなく、多世代で構成するNPOに加入して、まちづくりや社会活動に加わる若者が少しずつ増えているようです。また、少年団体については、同様に弱体化が指摘されるとともに、今日における新しい存在意義が指摘されるようになっていきます（既出[西村書評](#) 明石要一『ガリ勉じゃなかった人はなぜ高学歴・高収入で異性にモテるのか』、講談社、2013年3月）。

それでは逆に、青年層だけをメンバーとする集団や講座は、今でも意味があるのでしょうか。それは、どんな運営をすればよいのでしょうか。中高年層が混じることによって、良い影響があるときと、困るときがありそうです。この問題は、青少年教育

論の今後の課題としておきましょう。

青年団の衰退と青年学級の振興

団体中心主義の従来社会教育に対して、社会教育行政の行う学級講座が並立するようになります。それは、個人化の進行の中での「個人学習の重視」とシンクロしているように見えます。

ただし、ここで、一点、注釈を入れておきます。学習方法（学習形態）には、大きくは「集合学習」「個人学習」があり、「集合学習」は、学習者同士の相互関与が期待されない「集会学習」と、相互関与を意図的に推し進める「集団学習」があります。そして、学級講座はなんと「集団学習」に位置づけられる（が定説）のです。

青年団が自主運営する青年学級が、高校に進学できない若者の「高校代わり」（高校との複線化）として進められてきましたが、1951年度に、文部省は、指定研究青年学級を全国に230学級委嘱することにし、その予算169万円を計上しました。

碓井正久編『社会教育（戦後日本の教育改革10）』（東京大学出版会、1971年2月）は、その経緯を次のように述べています。

それまで占領軍は青年学校の復活をおそれ、勤労青年の教育は成人教育の中にふくめるべきだとして、とくに青年教育を独自に行なうことには否定的であった。しかし、この年には、占領終結直前ということもあり、CIEの社会教育担当官がネルソンからニューフェルドにかわったということもあって、文部省のこの措置を簡単に承認した。これによってにわかに活発化したのである。

このときの社会教育局長通達「昭和26年度文部省指定研究青年学級開設について」（1951年6月15日）では、青年学級を「青年学級、勤労青年学級、青年講座、

職業教育講座等の名称をもって主として中学校卒業から20歳ぐらいまでの勤労青年を対象とする社会教育講座」とし、研究青年学級としては、市町村が設置主体で、年間100時間以上として計画され、受講者が運営に参加しているものから選定することになっている。委嘱経費は1学級6500円で、各県二学級ずつ割当てた。

民間情報教育局（CIE）教育顧問のW. C. イールズが1949年7月に新潟大学の講演で「共産主義の教授は大学を去るのが適当」と演説しています。当時、冷戦（アメリカ対ソ連）の影響を受け、GHQは民主化政策からレッドパージへと転換していました。このことも影響しているかもしれません。

【討論】高校の代わりに「楽しい勤労青年教育」の復活を

このようにして、戦後の団体中心主義の社会教育、そしてその中心の一つであった青年団、そこに所属する「勤労青年」（中卒者）のための青年学級はほとんど消えてしまいました。高校に行けない若者たちのために「15の春は泣かせない」というかけ声のもと、高校全入運動が起こり、昭和五十年代には、高等学校への進学を希望する者のほとんどは高等学校に入学できる状況になってきました。

一方で、バイトに追いまくられるヤングプアとしての高校生。経済的格差が問題となるのは言うまでもないでしょう（[西村書評](#) NHKスペシャル取材班『高校生ワーキングプアー「見えない貧困」の真実』、新潮社、2018年2月）。

しかし、ここでは、教育機会の保障の観点から、高校全入を見直してみましよう。もし、全入ポリシーを撤回して、「高校に行かなくても良い。公民館、児童館などで、勤労青少年教育の場で自分のペースで好きなことを学習できる（個別最適な学び）」となれば、どれだけの若者が救われることでしょうか。もちろん、高校や大学

に行って勉強したいという若者に、彼らがたとえ貧乏な家庭にいても、その願いを実現させてあげることが大切でしょう。しかし、そこそこ教養を身につけながらも楽しく学び、良い仲間と出会いたいということであれば、社会教育の場で過去の「勤労青少年」の面倒を見ても良いのではないのでしょうか。そして、そこでは、学校のクラスのような「目的集団」(?)ではなく、過去の青年団のような「生活集団」を再現できるとしたら、居場所のような、フリースクールのような、そして「合宿」のような新たな楽しさ ([西村美東士「団体・グループの仲間づくりの演出」](#)、『生涯学遊ネットワーク』、日常出版、pp. 70-76、1989年10月、とくに「4 みんなでメシ・フロ・ネル」) が味わえるのではないかと思います。私は、個人化社会だからこそ、アンチテーゼとして、存在価値をもつものと思います。みなさんは、どう考えますか。

私の最近の感覚では、このような場に、高校生や大学生も参加して、偏見なく勤労青年と交流し、元気回復の拠点とできるような気がします。そして、「高校、大学には、15歳、18歳の頃に、行かなければならない」という「学歴社会の足かせ」から青少年が自由になり、学校にも、社会教育の場にも、多世代が学び、交流するようになれば、楽しいのではないのでしょうか。

青少年団体の革新プラン/まちづくりにおける若者の役割

私は、以前、青年団の運営に関して、次のような提案をしました ([西村美東士「社会教育コラボ」No3](#)、日本青年団新聞、2021年3月)。

会員個人の生き方を犠牲にする活動は、今日の社会に馴染まなくなってきています。青年団は、今日、個人の多様性を認める数少ない場です。個人を尊重した上で

の他者との出会いと参画・協働こそが、世界を広げ、自己啓発本以上の効果をもたらすと考えています。

私は個人化社会を批判しても何も始まらないと考えています。個人化は時代の必然ですから、それを受け止め、青少年支援の立場からは、個人化社会において、彼ら自身が望む交流とコミュニティの形成を目指したいと思います。

インターネットを通じたコミュニティの可能性

ここで、注目したいのは、SNSにおける新たな若者のコミュニティです。そこでは、いろいろと問題は指摘されつつも、いつもとは違う仲間と出会える、安心してコミュニケーションできるなどの魅力があるようです。

私は、パソコン通信における青少年のネットワークについて、自らの体験をもとに、 知の「ボランティア化」、「アマチュア化」、「個別化」、「雑多化」、「民主化」、「非体系化」の傾向を指摘しました。そして、そこで新しく形成される「集団」について、「明瞭な人為性」、「諸単一機能の交錯」、「合理性と情緒性の混在」、「個人的行為と集団的行為の混沌化」という特徴を指摘し、近代的機能集団の中で「ハイタッチ」を実現しているとしました（[西村美東士「パソコン・パソコン通信と青年—成熟したネットワークとは何か」](#)、高橋勇悦編『メディア革命と青年』、恒星社厚生閣、pp. 109-141、1989年6月）。そして、そこでの個人主義について、次のように評価しました。

このネットワークにおいては、個人主義が障害にならない。むしろ質の良い個人主義が理想とされる。「質の良い個人主義」とは、魅力的・個性的な自立的価値をもちながら、なおかつ「異質」のものと喜んで交流する志向を意味する。このよう

にして、予想外の異質な人から、予想外の異質なレスポンスを得ることがパソコン通信の醍醐味である。

現在のネットワークやSNSが、そのような「質の良い個人主義」を伴った新たな集団を形成する基盤となりうるのか、そのためにはどうすれば良いかということが、今日の集団活動を議論するに当たってのポイントとなるでしょう。

第4回

③ 青少年教育施設論

～宿泊型青少年教育施設における教育機能を考える～

私の大卒後の就職先は東京都青年の家でした。青年の家（現在は青少年自然の家などと呼ばれている）は「団体宿泊訓練」を主要なコンセプトとしています。私は、この「団体宿泊訓練」という言葉を「背負って」、都立府中青年の家、武蔵野青年の家で3年間ずつ勤めました。この「団体宿泊訓練」という言葉を聞いて、ある学生が「私だったら行きたくない」と答えました。しかし、集団宿泊活動を伴う自然教室、林間学校と言え、多くの人がいろいろな思い出をもっているに違いありません。

私は青年の家で、「団体宿泊訓練」という言葉を背負いつつ、若者文化にマッチした運営を試みてきました。（[田中治彦「青少年施設とそのリーダー～東京都立武蔵野青年の家西村美東土さんの巻」](#)、ユースワーカー能力開発協会『ユースワーカー』、pp. 26-27、1981年2月）。

団体宿泊訓練の抑圧と解放

私は、青少年教育施設の団体宿泊訓練等の機能について、次のように説明しています（[西村美東土「青少年教育施設の活動・経営をめぐる問題」](#)、鈴木眞理編『生涯学習の計画・施設論』、学文社、pp. 153-167、2003年4月）。

国立青年の家は、自主性に満ちた健全な青年の育成をはかるため、団体宿泊訓練を通じて、次の各号に掲げる教育目標の達成に努めるものとされている。①規律、協同、友愛及び奉仕の精神をかん養すること。②自律性、責任感及び実行力を身につけること。③相互連帯意識を高め、郷土愛、祖国愛及び国際理解の精神を培うこ

と。④教養の向上、情操の純化及び体力の増強を図ること。（「国立青年の家の管理運営について」文部省社会教育局長通知、1996年）。

国立少年自然の家も、同じく自主性に満ちた健全な少年の育成をはかるため、少年を自然に親しませ団体宿泊訓練を通じて、次の各号に掲げる教育目標の達成に努めるものとされている。①自然の恩恵に触れ、自然に親しむ心や自然に対する敬けんの念を培うこと。②規律、協同、友愛及び奉仕の精神をかん養すること。③自然の中で心身を鍛錬し、自ら実践し、創造する態度を育てること（「国立少年自然の家の管理運営について」文部省社会教育局長通知、1996年）。

以上から国立青年の家、国立少年自然の家に共通する特徴を指摘しておきたい。

①青少年の健全育成を目的としている。②団体宿泊訓練を通じた規律、協同、友愛、奉仕の精神の涵養を目標としている。③広域交流や先導的な事業や運営により、その成果を広く公立青少年教育施設に及ぼし、水準向上に資することが求められている。④団体活動の助長および青少年教育指導者・関係者の研修のための事業が意図されている。⑤少年自然の家だけでなく青年の家も「引率責任者が定められ」「あらかじめ具体的な研修計画を定めている」いわば「しっかりした団体」の利用を想定している。

とくに上の①と②については、1959（昭和34）年4月の初の国立青年の家の中央青年の家が設置された際に、すでに「団体宿泊訓練を通じて健全な青年の育成を図るための機関」と法律に明記されているとおり、国立青少年教育施設の一貫した基本的性格ということが出来る（「文部省設置法の一部を改正する法律案」1959年2月3日、『衆議院内閣委員会議事録』第4号）。

指導者養成事業については、国立施設ではボランティア養成事業が全施設で、青

少年教育施設職員対象事業が8割強の施設で実施されているほか、野外教育指導者対象事業を7割強、学校教員対象事業を6割強の施設が実施している。公立施設では、ボランティア養成事業と集団宿泊担当者研修が多いが、それぞれ県立で5割弱、市町村立で3割5分弱の低率である。

青少年・親子対象事業については、自然生活体験事業が国立全施設、県立9割強、市町村立8割弱で実施されている。公立施設では次にはスポーツ・レクリエーション、クラフトが5割前後で続く。国立では冒険、環境学習、科学教室を半数以上が実施しているが、それらは公立では1~3割程度の施設でしか実施されていない（1999年青年の家・少年自然の家調査。[澁谷健治・池田尚「青少年教育施設における社会教育事業の現状と運営改善」](#)『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』第1号、2001、p.151-160）。

これは国立の公立に対する波及効果のあり方に関する課題とともに、公立施設側の施設・設備面および職員体制の課題を示すものといえる。

利用者層は宿泊型青年の家においても、青年の家創設期に最も多かった勤労青年の利用が少なくなり、在学青年とくに少年が最も高くなっている。青年の家においても、少年の積極的受け入れおよび自然体験活動の場として少年に対応するプログラムが充実してきたことが原因とされる（「全国青年の家実態調査」、全国青年の家協議会『青年の家の現状と課題』第22集、1994、p.140-141。1993年度で、勤労青年12.1%、小・中学生34.4%）。

本書では、集団宿泊訓練に焦点を当て、次のように、「宿泊型施設における指導性と専門性の困難」について論じました。

宿泊型青年の家独自の教育機能としては、たとえば朝夕の「つどい」等を含む生活時間のなかで、「規律正しい集団生活・訓練を体験させる」こととされてきた。そのことについて「今日の社会的風潮からすれば、利用者が『自由に使えて便利な施設』ほど良い施設であるように考えられがちであるが、青年の家はもともとこのような施設ではない」という記述がみられる。当時の宿泊型施設、とくに国立施設は、生活指導に関してはこのように確固たるアイデンティティを自負していた。

そこでの「生活指導」については、当時の次のような記述にその「教育性」を見いだすことができる。「青年の家の生活は、個人の目標と集団の目標を同時に達成していくことが必要であるが、究極は、個人がどのように生きていくかというものへのつながりを持たせる場である。このことから青年の家の生活指導は、ただ規律や規則を守らせるだけではなく、なぜ『きまり』が必要なのかを一人一人が納得するようなものでなくてはならない」。

このような生活指導に支えられたアイデンティティに対して、研修指導については、1970年代には、「一人の職員がフォークダンスを指導し、職員の間人関係を講義し、青年の生き方を話すなど、スーパーマン的活躍をして自己満足をしているものもある」という指摘がみられる。指導依頼の内容は、レクリエーション、野外活動、スポーツをあわせると73.5%にのぼった。一般教養、青年団体活動等に関する「文化」は15.3%であった。

また、1979（昭和54）年の指導系職員の調査から、「青年の家は主催事業を主体とするか、受け入れ指導事業を主体とするかについて、指導系職員の意見は、宿泊型青年の家ではほぼ同じ割合で両論に分かれ、非宿泊型青年の家では主催事業主体が受け入れ指導事業主体の2倍になる」ことが報告された。そして、報告者は、青

年の家が教育機関として存立するためにも主催事業を実施することが必要と主張している。

このように、宿泊型であっても、施設提供に終始することなく、教育機関としての専門性の発揮のために主催事業に力点をおこうとする議論があった。それは従来の団体宿泊訓練における生活指導機能が、研修指導を含めた体系化という困難な課題に直面して戸惑い、さらには時代の変遷のなかで生活指導自体も発揮しづらくなってきたという状況を示している。かといって主催事業だけに完全に乗り換えてしまうのでは、独自の教育機関としての展望を見失うのは明らかである。なぜならば宿泊施設提供事業のなかでの指導性のあり方も、時代に適した新たな形で、なおかつ主催事業のなかでの指導性と両立する形で見いださないかぎり、「団体宿泊訓練」を独自の役割とする青少年教育施設の存在価値を示すことはできないからである。

さらには、それに加えて宿泊型施設職員の勤務実態の厳しさも念頭におく必要がある。土・日曜日はもとより早朝や夜間にわたる勤務が恒常化し、そのうえ、多くの青年の家は、施設の性格上、市街地から遠く離れた山間や海浜に位置しているので、変則的勤務・交代制勤務の困難さは大きい。たとえば東京都青年の家の主催事業は、「国際青年年」であった1985（昭和60）年の記念事業を契機に、それ以降増えていったものである。青年の家開設当初の社会教育主事の役割は「受付から帰りまでのスローガンのもとにそれぞれの活動を助成」することであり、「利用団体への対応に追われ、主催事業の実施自体が困難だった」と指摘されている。

さらに1999（平成11）年の調査では、6～7割の県立施設が、事業運営上の課題として「施設・設備の老朽化」、「予算が少なく期待する事業ができない」をあげ

ている。しかし、大規模な施設・設備を誇る国立施設においても「活動分野ごとの専門性のある職員の不在」等が課題としてあげられている。

このことから、まずは、過去には意気込みをもって盛んにつくられ、職員も勤務の困難に耐えてきた多くの青少年教育施設、とくに宿泊型施設が、時代の変容のなかで老朽化すなわち「取り残され」「放置されている」問題が指摘される。しかし次に、たとえそれが改築され、デラックス化されたとしても、専門職員（指導系職員）がどのように配置され、どのように「専門性」「指導性」を発揮するかということが、より本質的な課題として残されている。

宿泊施設特有の勤務の困難さの中で、指導系職員の専門性をどのように確保すればよいのか。協力者会議（国立青年の家・少年自然の家の在り方に関する調査研究協力者会議）のいう「人材の計画的養成」による専門職員の専門分野の多様化は重要な指摘である。しかし、専門分野の多様化という場合、そのように多岐にわたる「専門性」の底を流れる共通の「教育性」の基盤をどこにおくのか、明らかにする必要がある。その基盤として、個人化／社会化の統合的教育機能を検討してみよう。

宿泊型青少年施設の指導系職員が、集団宿泊訓練という宿命を背負いながらも、「(集団宿泊訓練の)究極は、個人がどのように生きていくかというものへのつながりを持たせる場」という信念をもって仕事をしてきた職員がいるのです。

【討論】青少年教育の場に、自治と参画の支持的風土の宿泊型青少年教育を

私は、先に示した府中青年の家の「ディスコフェスティバル実行委員会」におい

て、毎週、休館日の日曜日に集まり、ディスコの練習をし、夜は安上がりの「鶏すき鍋」をつつき合い、大風呂に入り、その後、20畳の和室にジャージで集まり、夜がふけるまでフリートークで語り合いました（「寝床分科会」という）（[西村美東士「団体・グループの仲間づくりの演出」](#)、『生涯学遊ネットワーク』、日常出版、pp. 70-76、1989年10月）。翌朝（休館日の月曜日の朝）、実行委員の若者たちが三々五々、出勤や登校に出かけ、事務室に戻ると、所長から「超過勤務手当の予算を立てていないので、手当を出せなくて申し訳ないが」とねぎらいの言葉をいただきました。とんでもない。実行委員たちとの「合宿」は、実行委員の若者は休日を使って参加しているのに、こちらは勤務扱いで、昼から「代休」がとれるため、申し訳なく思っただけでした。若手の青年の家職員にとっては、夜更けまで、あるいは徹夜で若者と語り合うことなど、大して負担にはならなかったのです。

現在、「ブラック労働」などが問題になっています。社会教育主事においても、過去には自殺者なども出ており、例外ではありません。しかし、その裏には、社会教育主事という専門職に許されていた「自由裁量権」が徐々に狭められ、杓子定規な「決まり事」に縛られ、役所の組織内でのプレッシャーなどもあって、追い詰められてきたという事情があるのではないかと私は思います。専門職（または「先生」？）という役職に安住して、大した努力も工夫もないままに仕事をしていた人もいます。でも、多くの専門職は、伸び伸びと大らかに、かつ鋭い問題意識を持って仕事を進めていると私は感じていました。

さて、宿泊型青少年教育は、今日どうなっているのでしょうか。国立青少年自然の家、交流の家は、現在でも27箇所あり、広域機能を発揮しています。しかし、社会教育の中心である自治体の公立青少年施設は、宿泊型も、非宿泊型も、2010年の手

前から、大きく減少に転じました ([文科省 HP「公立青少年教育施設について」](#))。私の勤めていた東京都青年の家も廃止されました。(過去に私の友達が所長をやっていた野島青少年研修センターは健在のようですが)。

そして、コロナ直前までは、「通学合宿」が注目されていました。これは、子どもたちが親元を離れ、地域の公民館等に宿泊しながら通学し、団体生活の中で日常生活の基本を学ぶという活動です。これを、もっと自由な「ディスコフェスティバル実行委員会」のような形で、青年層向けに行なえれば楽しいのではないかと思います。そこには、どんな「障害」があるのでしょうか。

高校生も呼ぼうという話になったとき、「そうすると、お酒を飲めなくなっちゃうよね」と若者たちがためらっていたとき、一人の勤労青年が「みんなも酒飲まなきゃいいじゃん」と言ってくれました。宿泊活動には、このような「障害」が数多く発生します。しかし、それを乗り越えてでも、過去の「若者宿」のような「生活集団」としての魅力を復活すべきではないでしょうか。

過去の若者宿では、村落の未婚の若者が夜集まって、仕事をしたり話し合いをしたりして親睦をはかり、寝泊まりをします。ハイアラーキカルな階梯的、上下階層的性格も伴いつつ、村落の自治、村づくりを担ってきました。これが、明治後半期以降の社会教育や地方改良運動の進展に伴って娘組が消滅していきました。「特に明治後期から大正期にかけて、各地に青年会(青年団)や処女(しよじよ)会が発足した。これは品行方正な若者を育成することを目的とし、かつての娘組については、きわめて批判的であった。当時の社会で貞操観念の欠如などが問題となり、娘宿がその温床とされたからであるが、批判的な資料の例をあげてみると、いくつかある」とされています ([「青年団の活動で消滅—若者の男女交際の場「娘宿」三重県」](#))。このようにし

て、過去の生活集団は、青年団などの「社会教育」に取って代わられることになりました。

若者宿などの衰退は、今日の「青少年健全育成運動」と関連しています。各地では、村の祭りと同進行で、子どもたちの自治的な宿泊できる小屋、「祭り小屋」の活動がありました。「かつて子どもたちが集落の各家から藁を集めて小屋を作って夜にはオコモリをして遊んでいた」などの[聴き取り結果](#)もあります。そして、祭りが終わると小屋を燃やし、そこで子どもたちは「ハレ」が終わり、「ケ」に戻る寂しさを味わいました（[菅原道彦『遊びの学校』](#)）。

しかし、このような小屋で先輩が来て、酒やたばこを教えるということなどが問題になり、戦後、各地の教育委員会と「青少年健全育成運動」によって、廃止されていきます。子どもたちの「万能ナイフ」であった「肥後守」も、「青少年健全育成運動」による「非行防止」の名のもと、各地のPTA活動の「鉛筆削り器設置運動」もあり、学校から追放されました（中央青少年問題協議会「刃物を持たない運動」、1960年）。

このような「青少年健全育成」のスローガンのもとに、青少年が萎縮させられているのではないかと私は気がかりです。「ナイフやマッチを使えなくなった」などの指摘もありますが、それだけでなく、生きるエネルギーそのものの衰退につながっているように感じます。

河合隼雄は、暴力・攻撃性・盗み・うそ・秘密・性・いじめなどの「子どもの悪」が、人間であることと深く関わっていて、生きるエネルギーに結びついていることを示唆しています。

それでは、青少年教育は、子どもの悪に直面したとき、どのように対処すればよい

のでしょうか。この点について、私は次のように書きました（[西村美東士『現代青少年に関わる諸問題とその支援理念の変遷—社会化をめぐる青少年問題文献分析』](#) 科学研究費基盤研究（C）（課題番号 17530588）研究成果報告書（研究代表者：西村美東士）、2007年3月、p.73）。

河合隼雄『子どもと悪』（97/5）は、「端的に言ってしまうと、個性の顕現は、どこかで『悪』の臭いがするのではないか」として、好きなことへの熱中による個性の発揮や集団になじめない人の創造性などについて述べた。そのうえで、大人が子どもの悪に対して「ここからは許さない」という「強い壁として立つ」よう求めた。しかし、それは「何があたってきてても退かない強さであって、それが動いて他を圧迫することではない」とした。

その点からも、インフォーマルな青少年教育の施策と理論の到達点は示唆深い。繰り返すが、それは個別性、自由時間、固有の人生、そして独りの世界の発見、さらには悪の存在である。これをまとめて「個は個別に多義的に生きている」と表現することができると思う。

このことから私は、「悪」が生ずる環境をすべて排除してから、青少年を「健全育成」しようとするのは「愚の骨頂」だと思います。それよりも青少年教育にとって大切なのは、河合の言うように「悪いことは悪い」と言って動かぬ壁になることだと考えます。それは、相手に迫って追い詰めることではありません。

それよりも、のびのびと明るく生きる姿を見せて、「こんな生き方もありなんだ」と思わせ、「ストライクゾーン」を広げさせることが大切なのです（[西村書評](#) 居場所カフェ立ち上げプロジェクト『学校に居場所カフェをつくろう！—生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援』、明石書店、2019年8月）。

宿泊型青少年教育には、学校内ではあまり起こらない（見えづらい）「悪」が、見えてしまうことが多く、ハードルも多いと思いますが、安全や人権に関わること以外は、大らかに接して、それよりも学校内では味わえない青少年との出会い、青少年同士の出会いを進めていくべきではないでしょうか。

このことによって、若者宿や祭り小屋などの自治と参画の宿泊型青少年活動の場を復活させたいと考えます。そこでは、青少年教育が介入することによって、過去のハイアラーキカルな関係を復活させるのではなく、基本的信頼のもとで異質の価値観が交流し、相互に理解し合う「支持的風土」の関係を新たに創り出すべきだと考えます。

第5回

④ まだ遠い「青少年教育論」

みなさんは、どういう若者、どういう大人になりたいですか。これまで皆さんが受けてきた教育は、その「人間像」にとって、どのように貢献してきたでしょうか。

ここまで、みなさんは青少年教育論の基本的事項を学んできましたが、現在の青少年教育の課題は、より困難な状況を呈しています。今日の社会においては、個人化、流動化、多様化が進み、偽装が横行し、格差が拡大しています。そのため、多くの青少年が、これまで社会が共有してきた目標や価値を疑うようになり、社会形成の展望を見失いつつあります。青少年自身も、「社会の形成者」としての自負やプライドなど感じられない状況が拡大しているといえます。

これは国際的動向といえるかもしれません。たとえば以前は、アフリカの若者は、社会の発展の当事者として、プライドをもって生きていると言われていましたが、現在では、高い失業率と限定的な経済的機会が、アフリカの若者の潜在能力の発揮を阻害していると警鐘が鳴らされています（[国連開発計画 \(UNDP\) 駐日代表事務所 HP](#)「アフリカの若者に経済的機会を創出する官民連携の強化」）。

今日、SDGsの重要性が叫ばれていますが、次のような指摘があります。（書評未掲載 [原貫太『あなたとSDGsをつなぐ「世界を正しく見る」習慣』](#)、KADOKAWA、2021年12月）

■ 「衣服ロス」から考える大量消費社会

善意でなされる寄付が、現地の人にとっては「えらい迷惑」ということが多々ある。その代表が、先進国で集められた大量の古着の寄付である。日本だけでも現在、年間24万トンの（単純計算でTシャツ12億枚分）の古着が外国にわたっている。

もちろん表に出る目的は「貧しい国を支援するため」ということになるのだが、現地に送られた古着のほとんどは使われることもなく破棄される（送られてくる衣料品の量があまりにも多いのだ！）。

しかも、送られる側の国々の多くはごみ処理の技術が未発達なので、届いた古着、余った古着を処分するだけで大変だ、ということになる。加えて、入ってきた古着が現地の衣料産業に価格破壊をもたらすほど「安い」という事実にも注意が必要だ（ウガンダでは、古着1枚、大体6円ほどで売られているが、これは当然ながら現地の衣服よりもはるかに安価である）。大量に送られる“善意の”古着のせいで、現地で裁縫産業などに携わっている人たちが、職を追われたりしている。寄付が、めぐりめぐって現地の経済的自立を邪魔している、という事態につながっているのだ。

「先進国からタダ同然の古着が大量に輸入されれば、現地の消費者はそちらに流れてしまい、地元の繊維産業が成長することは妨げられてしまう」（同 33 頁）

「衣服ロス」をなくす、というと聞こえはいいが、そのために、いいように貧しい国が使われている。彼らの国は、さしずめ「衣服ごみの最終処理場」状態だ。

原は、「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を教えるべきだ」という言葉についてその意義を認めた上で、「先進国側の人間が一方的に考案した釣り方を教えるのではなく、現地の人たちの中に眠っている釣り方を引き出すためのサポートをする。川と魚がある所なら、現地の人たちは釣り方を知っているはずです。それを知らないと勝手に決めつけてしまっているのは、私たち先進国側の人間かもしれません」と警告を与える。そして、「魚を与えるのではなく、魚の釣り方を引き出すべきだ」と踏み込んだ提言をしています。

教育、さらには「共育」によって、新たな価値を創造する必要を述べているのだと私は思います。そして、私たちにも「内から湧いてくる問題意識を持つことが、本当に意味のある社会貢献をするために欠かせない」と警告を発しているのです。

持続不可能の危機も迫るわれわれにとって、未来に向けて公共的課題と社会的正義を追求する青少年の育成は、欠かせないことといえるでしょう。

しかし、今日の青少年の実態、願いやニーズとはかけ離れた教育が行われているように感じます。青年に対しては、「政治案件」に振り回され、とくにその傾向が強いように思われます。社会教育法第三条の2は、「国及び地方公共団体は、前項の任務を行うに当たっては、国民の学習に対する多様な需要を踏まえ、これに適切に対応するために必要な学習の機会の提供及びその奨励を行うことにより、生涯学習の振興に寄与することとなるよう努めるものとする」と述べていますが、青少年教育論においては、今日の青少年「多様な需要」とその対応について、十分な理解と原理の確立がされているようには思えません。

ここでは、「青少年教育論の基本的事項」を終えるに当たって、今日の青少年の実像として、ヤンキー、ひきこもり、同調圧力、「みんなぼっち」などについて考えてみたいと思います。

ヤンキー

～「理論は熱の前に敗れ去る」、「お笑い芸人のように達者なコミュニケーション」のマイルドヤンキーに対抗する教育的価値とは何か～

精神病理学者斎藤環は、各地の学校で取り上げられているよさこいソーランなどのヤンキーっぽさにふれ、また、スパルタ教育、金八先生やヤンキー先生、「GTO」や「ごくせん」などのメディアによる反知性主義の流れを指摘しています。ヤンキー

を突き詰めていくと、絆や協調性に傾き、まとまりをつくるのに役立つと言います。だが、同時に、「公共」概念とセットで「個人主義」を再インストールするよう提言しています([西村書評](#) 斎藤環「ヤンキー化する日本」、角川書店、2014年3月)。

また、海猫沢めろんとの対談([cakesHP「ヤンキー的バッドセンスの系譜」](#))のなかで、斎藤氏は、反知性主義の流れを指摘しています。「理屈をこねていてもしょうがない」、「とにかく真心と誠実さで当たっていけば人は変わる」、そして「理論は熱の前に敗れ去る」という前提を批判しています。

しかし、氏は、非行はともかくヤンキー性は更生させる必要はないと言います。ヤンキーを突き詰めていくと、絆や協調性に傾き、まとまりをつくるのに役立つと言うのです。同時に、「公共」概念とセットで「個人主義」を再インストールするよう提言しています。

評者は考えます。ヒップホップの裏には黒人の歴史があり、よさこいの裏にはまちづくりがあります。医療としてはともかく、教育においては、社会形成者の育成のための目標に沿って、「科学的な見方・考え方」や自己との対話の方法論を彼らに教える役割があるのではないのでしょうか。そのことによって、彼らは、より根拠ある自信を持つことができるのだと思います。

ひきこもり

ここでは『ひきこもりの理解と支援』([西村書評](#) 高塚雄介編著『ひきこもりの理解と支援—孤立する個人・家族をいかにサポートするか』、遠見書房、2021年3月)に基づいて考えてみましょう。

本書は、ひきこもり者にとって必要な自立とは他者に頼らないことではなく、必要

なケアを広く薄く調達することだと言います。そして、皆の前で自分のことなどを話すことを求められる、いわゆるプレゼンテーションや少人数で行うグループ学習について、ひきこもりの若者たちの多くが嫌いな教育のスタイルだと言います。発言できない者にとっては、自分の存在が「いてもいなくてもいいもの」になってしまうと言うのです。子どもたちに任せておけば自主性が育つなどという安易なものではないと本書は関係者に警告しています。

ICTについては、次のように述べています。似た境遇にある人がいると思っても、リアルな居場所に足を運ぶのは非常に勇気がいります。そのように迷っている当事者にとっては、まずはオンラインで過去に行われた対話グループを視聴するのが役に立ちます。そこで、どんな話をしているのか、ただ聞いているだけでもいいのかなどを確認することができます。大丈夫そうであれば、自宅にいながら参加することが可能になりますラインであれば、やめたいときはすぐにやめられます。本書は、ICTを活用することによって、ひきこもりの当事者が対支援者や当事者同士でよりつながることができるかと期待します。

評者は考えます。リアルな場で一人で子ども集団と対面する学校教育関係者にとっては、このような個人への対応は困難な面も多いでしょう。教員以外の支援者との協働などが求められるでしょう。同時に、個人の自立が困難な今日、教育における多様性の保証、個別最適化された学び、そしてその上での社会形成者の育成について、「わがこと」と捉え直して取り組む必要があるといえるでしょう。

同質化とみんなぼっち

1990年代に若者は、「仲間以外はみな風景」、すなわち、「仲間さえ大切にしていれ

ば、外の世界はどうでもいい」（宮台真司『世紀末の作法』リクルートダ・ヴィンチ社、1997年）と分析されました。われわれは、「それでは、その仲間の中はどうなっているのか」と考え、神戸、杉並の若者それぞれ千人の調査を行いました。そこで導き出したキーワードが、「みんなぼっち」です（[西村美東士「ネットワークーヒエラルキーからピアへ、ピアからネットワークへ」](#) 富田英典他編『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣、1999年5月）。

私は本書で、若者の交友関係改善の展望として、ピア（同質集団）からネットワークへのシフトアップを提唱しました。「島宇宙化」（宮台）して閉鎖された小さな仲間の中で、「みんな、みんな」と言ってますます同質化していきながら、それゆえ、じつは孤立していく。若者が社会化以前に立ちすくんでいる現在の状況の根源として、彼らの交友関係が「みんなぼっち」の孤独な状態にあると考えます。本書では、同一化せずとも「異なる他者」を受容するネットワーク型への転換の方向を示しました。

古くは「おしゃべり症候群」という特徴が当時の若者のコミュニケーションについて指摘されました。これについて私は次のように述べました（[西村美東士「コミュニケーションを求めておののく若者たち」](#)、日本教育新聞社『週刊教育資料』281号、pp. 26-27）

■コミュニケーションの成熟化と無力化

今日、コミュニケーションの手段は大いに発達している。しかし、そんなことは若者たちにとって「あたりまえ」のことであり、ツール（道具）の素晴らしさよりもコミュニケーションするということ自体が大切なのだ。これをコミュニケーションの成熟化とよぶことができる。

しかし、成熟化とは、ある面では、活力を失うことでもある。一方通行の音楽・

映像メディアや、フェース・ツー・フェースではないメディアによって、自分は傷つかないままにコミュニケーションを享受しているうちに、おたがいの存在を認め合うストロークのやりとりのチャンスまでも失いつつある。傷つく恐れのないコミュニケーションは、ストロークではない。そういう音楽や映像のメッセージが、カプセルの中の自分に個別に与えられたような錯覚のもとに受け入れられて、親和欲求を少し満たしている。つまり、エセ・ストロークとしても機能している。

また、若者たちは、おしゃべり（双方向）も華やかに上手に交わすことができる。雑誌「教育」（国土社）が「おしゃべり症候群」を特集してその空疎を衝いたのは一九八五年だが、いまや「双方向の一方通行」ともいうべき恐るべき軽やかなコミュニケーションが成熟しつつある。言葉は交わされているが、気持ちは交流できない（しようとしていない）のである。「それがおしゃべりだし楽しいのだから」と若者は言うのであろう。

現在からみれば、メディアをエセ・ストロークと断ずるこの私の文章は、時代錯誤のようにも思います。しかし、それよりも、「言葉は交わされているが、気持ちは交流できない（しようとしていない）」という指摘が、今日にも通じるディス・コミュニケーションの本質的問題だと考えます。

逆に、そもそも、「ぼっち」がなぜ悪いのでしょうか。少年自然の家には「ソロ・キャンプ」プログラムがあります（[自然体験活動「ソロキャンプ」](#) 国立花山青少年自然の家 HP）。これは、20年以上前から、「山中で一人で過ごす1泊2日のソロプログラムの導入」などとして、宿泊型青少年教育施設で挑戦的、開発的に行われてきました（[西村美東士「青少年問題に関する文献データベース」](#)でフリーワード「ソロ」で検索）。

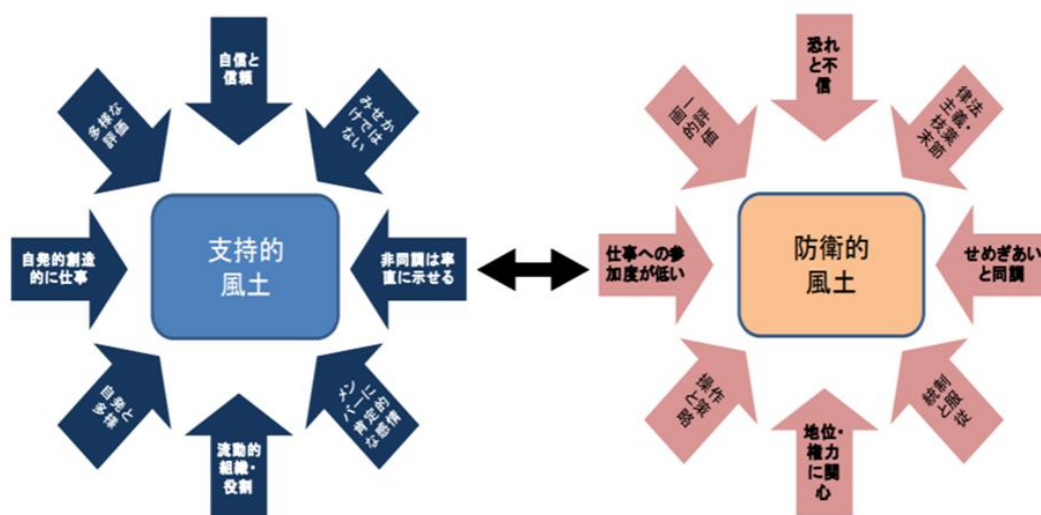
また、前衛芸術家の篠田桃紅は、「人生は一人でも面白い」と書いています（[西村書評](#) 篠田桃紅『一〇三歳になってわかったこと～人生は一人でも面白い』、幻冬舎、2015年4月）。孤独でないことをリア充と呼ぶのなら、キョロ充はあまりにも切ないと思います（キョロ充とは、常にキョロキョロと人目を気にしており、その時々
の流行や周囲の人間に合わせることで自分を「リア充」だと思い続ける者を意味する俗語。主に大学生に多いとされる。そもそも「リア充」とは「リアル(現実)の生活が充実している」者を指し、必死に「リア充」を演じているという意味なども含まれた言葉である。weblio 辞書より）。私は数十年前に授業で「個の発揮」の重要性を述べたとき、ある学生が「仲間から変だと思われたらもうおしまい」と出席ペーパーに書いてきました。現在の学生は、このような「ピアコンセプト」（仲間意識）はどうなっているのでしょうか。仲間内で独自のキャラを演じて、存在価値を発揮しているという解釈もあります。しかし、キャラのかぶる人が参入したときには問題が生じます。「みんなぼっち」は永遠の課題と言えそうです。

その点で、今でもたびたび思い出すのが狛江市中央公民館青年教室「狛江プータロ一教室」（狛プー）（[西村美東士『癒しの生涯学習』](#)、学文社、1997年4月）の運営方針です。そこでは、「一年に一回来ればメンバーだ」、「あるがままの自分が両手を広げて歓迎される」という「サンマ」（時間・空間・仲間の三つの間、今でいう「居場所づくり」）がつくられてきました。そこでの仲間関係は、「みんなぼっち」の防衛的風土ではなく、支持的風土だったのだと思います（防衛的風土と支持的風土については、[西村美東士「ネットワークの作り方」](#)、山本慶裕編『学びのスタイル』、玉川大学出版部、1996年10月、pp. 232-252）

以上の面から、青少年の社会化に対する効果的支援にとって、狛プーの示唆するも

のは大きかったと考えます。

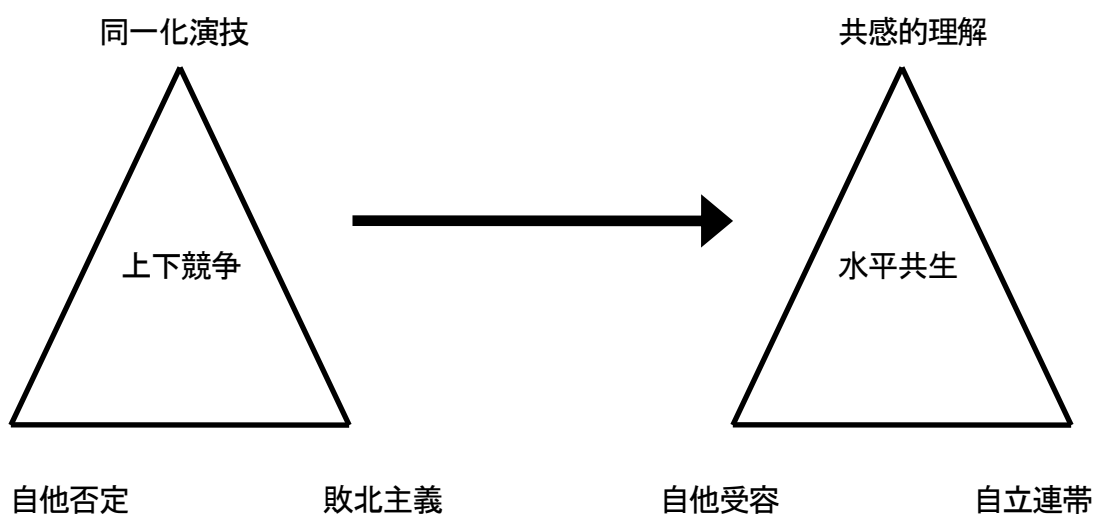
図 「支持的風土と防衛的風土」(Gibb, C. A.、1969)



(片岡徳雄『学習と指導—教室の社会学』から西村美東士作図)

図 求められる3つのちから

相互否定・同質上下競争の魔のトライアングルから、
相互承認・異質水平共生の癒しのネットワークへ



(西村美東士『癒しの生涯学習』学文社、1997年4月)

3 自分と社会

第6回

① トランジション・キャリア教育

トランジションとは「移行」のことです。学校に通っているときだけ充実していても、卒業して次の段階に移行したのち、うまくいかなくなってしまうのでは、教育としては問題があると言わざるを得ません。また、生徒や学生が卒業後にうまくやっていけるかどうか関心のない教師がいるとしたら、それは、教師失格です。

学生個人から言えば、学校（SCHOOL＝群れ）を卒業して一匹で社会に飛び出すまでに、社会における自己の位置決めをしておきたいところでしょう。また、大学の立場から言えば、卒業後の社会の状態を知らせ、社会（キャリア等）とのマッチングを進めておきたいところです。

■ 『つまずかない大学選びのルール』より

本書では、受験生に対して「後悔しない大学の選び方」のために、次のように述べています（[西村書評](#) 山本繁『つまずかない大学選びのルール』、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2013年2月）。

著者からのメッセージ

「もし世界が100人の村だったら」を知っていますか？世界の人口統計比率をそのまま100人に縮小すると、貧困状態にある人が何人、大学教育を受けられている人が何人…というように、「社会全体のなかで自分はどのような場所に立っているか」という気づきを与えてくれる文章です。ではここで、「大学がもし100人の村だったら」（ここでは新生が100人だったと仮定）と考えてみましょう。

まず、その約1割にあたる12人が卒業までに中退、他の13人はいずれかの学年

で留年します。残っている75人のうち、大学院や専門学校等に進学する人が9人。この9人には、就職活動を断念して進学に切り替えた学生が含まれます。また、卒業できても就職できない人が21人。つまり、大学を出るときに就職以外の道を選ぶ（選ばざるを得ない）人が30人です。残りの45人は卒業後に就職できませんが、3年続くのはそのうち31人だけ。つまり、入学してから卒業後3年までストレートに進めるのは全体の約3割です。これを高校のクラス（仮に40名）に換算すると、ストレートに進める人数は12人。これから大学に行こうとしているあなたが、その12人に必ず入れる保証はどこにもありません。

もちろん、中退したから、あるいは留年したから、その人はそのまま不幸せになってしまうということではありません。しかし、大学生になるということは、4年間という時間と400万円の学費（私立文系の場合）と引き換えに得られるものです。その結果がこれだとしたら、それはあまりに「高すぎる買い物」ではないでしょうか。使った時間やお金に見合わない大学に、あなたは行けますか？ 変化し続ける環境の下で未来を見据えしっかりと生きていこうとする受験生のあなたに「後悔しない大学の選び方」のための有用な情報を提供しようと、私は本書を書きました。

誤解してほしくないのは、この本は「良い大学」を教えるものではなく、あくまで「(自分にマッチした) 良い大学選び」の方法を教えるものということです。3章ではさまざまな大学を紹介しますが、これも「この大学に行け!」と勧めるのではなく、「良い大学選び」の例として読んでいただくようになっています。

あなたが「良い大学選び」を実践することで、日本の大学を良い方向に変えることができます。あなた自身が大学選びで後悔しないために、ひいては日本の大学、

そして日本を変えるために、ぜひ「賢い受験生」になってもらいたいと思います。

(「はじめに」より抜粋要約)

山本氏は、高等教育と社会教育の革新のために活動するNPO法人の理事長です。「入学してから就職後3年間までストレートに進めるのは全体の約3割」という状況のなか、「面倒見のよい大学→本当は中退率30%」、「就職に強い大学→実際に就職できるのは学生の50%」、「思いやりの心を持った学生を育てる大学→地域の人たちからの評判が芳しくない」と注意を喚起しています。

氏は問いかけます。パンフレットやWEBサイトでは、大学のコンセプトだけでなく、これを達成するための方法と効果の証拠が提示されているか。多忙な著名人教員では受講回数も制限されてしまうので、それより、一般の教員が教授法等を改善する訓練(FD)に取り組んでいるか。じつは、FDを嫌う教員も多い。大学の中身をこのように鋭くえぐる視点をこの本は提示しています。

私も、とくに感じるのは、今でも、「出口」だけを追求し、高い就職率だけを宣伝する大学と教職員。就職3年後でも、元気にやっているのか。小さいうちから「疑問をもたずに」突き進んできた専門職の道を、就職1年足らずで辞めてしまう「向いてない症候群」・・・。

それはトランジションというコンセプトが十分には行き渡っていない教育の責任でもあるのだと思います。

と、ここまで考えてきて、さて、そもそも、不透明化、流動化、多様化の今日において、「学生が飛び出していく先の社会について教える」ことなど、可能なのでしょうか。私は次のように書いています。[\(西村美東士「個人化の進展に対応した新しい](#)

[社会形成者の育成—キャリア教育及び青年教育研究の視点から](#) 日本生涯教育学会年報 33号、pp. 145-154、2012年11月)

社会形成者の育成を考える場合、まずは、経済社会の形成者としての「望ましい職業人」をどう育てるかということが重要になる。しかし、一部の先進的な企業内教育や職業能力開発の場を除く多くの教育の場では、展望も方法も見えずに無力感に支配されている現実を見ることが多い。

たとえば、大学におけるキャリア教育に関する否定的議論が指摘する「問題」について、筆者は次のように整理した（西村美東士、長江曜子、清水英男、齊藤豊、齋藤ゆか、林史典「[生涯教育文化学科におけるキャリア教育体系化の試み](#)」、聖徳大学FD紀要『聖徳の教え育む技法』6号、pp. 104-105、2012年2月。同研究では、おもに次の論文から問題点を導き出した。金子元久「キャリア教育—小道具と本筋」、IDE大学協会『現代の高等教育』No521、pp. 4-10、2010年6月。同稿で指摘されている「問題点」は、フォーマル・エデュケーションのもつ、もっぱら演繹法に基づく方法論によるキャリア教育の弱点を示すものととらえられる。その点で、学習者個人の問題から発して、帰納的に問題解決を図り、社会形成者としての育成を図る生涯教育の方法論をキャリア教育に適用することは、有益であると考えた）。

- ① 業種についての理解はできても、各企業における具体的な仕事内容にそのままつながるものではない。
- ② 職業知識の付与は、大学では、各学科の専門性によって限定される。企業は、それを採用基準にはできない。
- ③ 企業の側が具体的に要求する資質・能力のイメージがきわめて曖昧なままで

あれば、学生自身の能力の自己判断も曖昧にならざるを得ない。

④ 職業に対する「構え」は、学生が職業知識に則して自らの振る舞いを制限したり、発現したりすることによって獲得できる。そのため、個々の学生のとらえ方そのものに規定されてしまう。

⑤ コミュニケーション能力や論理的な思考は、生得的、あるいは幼児期から形成されてきたものであり、大学教育によってどのように形成されるかを具体的に示すことはできない。

⑥ コンピテンシー（ここでは、コミュニケーション能力や論理的な思考）というのは抽象的な概念である。個々の具体的なコンテキストにおいて意味を変えるものともみることができる。

まさに指摘のとおりと言わざるを得ません。それでは、どう考えれば良いのでしょうか。

先の註で、「学習者個人の問題から発して、帰納的に問題解決を図り、社会形成者としての育成を図る生涯教育の方法論をキャリア教育に適用する」という提案を書きましたが、先の日本生涯教育学会年報では、同様の趣旨から、次のように書きました。

上に示したそれぞれの「問題」について、本提言の観点から、表1のとおりキャリア教育の「課題」を設定したい（表1では、D. E. Superの職業的発達理論における「自己概念」を参考に、カッコ内に示した本研究の視点に基づいて、キャリア教育の課題を、「職業の理解」（対社会の気づき）、「自己の理解」（対自己の気づき）、「自己と職業の調和」（社会における自己の位置決め）の3項目に整理した）。

表1 キャリア教育の課題

項目	番号	課題
職業の理解	1	具体的な仕事内容の理解促進
	2	必要な職業知識の明確化
自己の理解	3	具体的必要能力の明確化
	4	個人の「職業への構え」の育成
自己と職業の調和	5	職業上必要な交信力と論理力の育成
	6	社会対応型能力活用力の育成

これらの課題は、社会化と個人化の両側面からのアプローチを行うことなくしては達成できないものとする。

キャリア形成において、これまでの集団主義が反省され、「個性の発現」が多く
の企業や若者自身から求められていることはいうまでもない（たとえば川端大二
『キャリア形成—個人・企業・教育の視点から』、中央経済社、2005年9月）。一方
で、現在のニートの問題などから、「若者のライフコースの個人化」を批判する議
論もある（宮本みち子『若者が「社会的弱者」に転落する』、洋泉社、2002年11
月。宮本は、「（若者の職業の）自己選択・自己責任」については、「ライフコース
の個人化と問題解決の私化」と同様の問題を抱えており、「何がやりたいことなの
かを自問自答するなかからは、やりたいものをみつけることはむずかしい」と述べ
ている）。

これらのいわば「混迷」の状態において、生涯教育が、雇用流動化時代における
職業生涯支援の立場を明確にし、キャリア形成に必要な社会性と個人性をともに育
成するためのプロセス分析及び教育目標設定を行うことの意義は大きい。

これまでのキャリア教育に関する研究では、社会性と個人性の育成の両側面から
の視点が明確でなかったため、直接的な職業能力よりも学力に、そして個人性より

も社会性に重点が偏り、上の状況に十分に応える結果を出せなかったものと考え
る。

コンピテンシーについては、教育界では DeSeCo の社会参画論が一般化してしま
い、一般の経済社会でいわれている「高業績者の行動特性」(Harry F. Evarts,
(1987) "The Competency Programme of the American Management Association",
Industrial and Commercial Training, Vol.19, pp.3-7) などの意味が希薄化している
傾向が見られるが、筆者は、まずは、「職業コンピテンシー」として、キャリア教
育の視点から捉えるべきであると考え。

だが、いずれの「コンピテンシー論」においても、「分解された必要能力」が明
らかになっておらず、それゆえ構造化もできていないといわざるをえない。そのた
め、教育側は、DeSeCo の論と日々の教育活動における目標設定をつなげられないま
まだし、企業の採用側は、経験知的に尺度を決めているだけといえる。

この超氷河期に、若者が自らの職業生涯に対して夢がもてるようにするため
は、コンピテンシー獲得のための達成目標を「見える化」して提示すべきである。

ここで述べた「分解された必要能力」の構造化の手法としてクドバスを紹介してお
きたい(クドバスについては、[西村美東土「クドバスを活用した子育て学習の内容編
成—高校生の子をもつ親のために」](#)、聖徳大学生涯学習研究所紀要『生涯学習研究』3
号、pp.41-54)。

4 クドバスの概要と活用の意義

4-1 クドバス開発の経緯

クドバスの概要を、その創始者である森和夫による数点の文献からまとめれば、
次のとおりである(森和夫ほか、『PROTS INSTRUCTOR'S HANDBOOK - Drawing up a

Training Program』, 海外職業訓練協会, 1990. 7。森和夫, 『現場でできる技術・技能伝承マニュアル』, 日本プラントメンテナンス協会 2002. 2。同『職務分析から見た保健師の仕事と役割』, 母子愛育会研修テキスト, 2002. 6。その他、同氏のホームページなど)。

クドバス (CUDBAS=CURriculum Development Method Based on Ability Structure) は 1990 年に開発されたカリキュラム開発手法である。1989 年、労働省を中心に、森らはプロッツ (PROTS=Progressive Training System for Instructor) という指導技術訓練システムの開発に着手した。これは海外で技術指導にあたる指導者たちに特に必要性が高かった指導技術訓練システムを開発しようとしたものである。クドバスはその一環として開発された。

4-2 クドバスの特徴

クドバスによって、教育内容項目を具体的な行動目標として能率的に記述し、カリキュラムもしくは教育計画を立案することができる。

森はクドバスでできることとして、次の 13 点を例示している。

- ①保有する技術・技能の評価
- ②職員の能力におけるウイークポイントの検索
- ③新規事業の立ち上げ可能性についての能力面からの検証
- ④職員の現状把握と経営戦略への立案、教育計画の立案
- ⑤教育システムの確立
- ⑥継続教育マニュアルの作成
- ⑦OJTマニュアルの作成
- ⑧テキスト、教材の開発

⑨管理職、マネジメント教育のツールとして実施

⑩人事考課への活用、処遇の決定

⑪人事配置・プロジェクト担当チームの編成

⑫問題解決手法への適用

⑬発想法としての応用

クドバスの特徴としては、次の6点が挙げられている。

①「早くできる」

②「手続きがシンプルで簡単である」「あまり多くの教育は必要としない」

③「小集団の意思決定によるものである」

④「第一人者であれば説得力があるものになる」「分析する内容についてよく知

る人であれば誰でも参加でき、安直である」

⑤「分析する途中の全てのプロセスが記録に残るため、改訂や見直しができ、他者への説明にも役立つ」

⑥「応用範囲が広い」

4-3 クドバスの進め方の概要

進め方としては次の5つのステップを踏むことになる。これらは、参考文献やホームページなどで公開されている「マニュアル」を使って、読み上げながら実施することが可能である。

①職場の熟練者について「何ができるか」、「何を知っているか」、「どんな態度が取れるか」で1件につき1枚のカードに書き出す。

②それらのカードを仕事の単位でまとめていく。

③水準の順序で並べ直す。

④カードごとの水準を書き入れる。

⑤能力資質リスト図に転記する。

作業は、その職業について知る人5~6人程度で行う。各方面からの参加が望ましい。その際の注意事項は次のとおりである。

①メンバーは同等の資格、権限で進めること。

②個人への批判や攻撃はしないこと。

③互いに協同して良いリストを作成すること。

④固定観念にとらわれず、柔軟に発想を出すこと。

能力カード作成にあたっては、「人格的なものや性格などは除く」とされている。また、他の人との重複は気にしないで、いろいろな角度から書く。所要時間は1枚につき1分程度で、一人20枚程度が想定されている。

書き込まれたすべてのカードを机の上に置く。同一内容のカードは重ね、類似カードは近くに置く。重ねたカードは内容を点検し、最も内容を代表するカードを一番上にする。適切なカードがなければ、新たに書き足す。確認してホチキスでとめる。ただし、少しでも違っていれば独立させる。

次に、これらを見渡して仕事内容でグルーピングする。仕事カードの語尾は「~をする」を使う。仕事カードごとに能力カードを右横に並べる。並んだ能力カードを重要度の高いものから順に右へ並べ直す。重要度のランクA、B、Cを決めて記入する。

次に縦の配列を行なう。カード群を比較して重要度の高い分類から順に下へ向かって並べる。「必要能力・資質リスト」は以上で完成である。

指導者がいなくてもできること、また、90分程度で作業が完成することが想定さ

れていることは、学習内容編成者にとっての実用性を保障するものであると同時に、先に述べたような「学習者参画によるプログラム作成」や「学習者個人の学習目標への自己関与」を可能にする道具としても注目に値すると思う。

ただし、クドバスの本命は、現場の職業人が、現場の課題に基づいて「分解された必要能力」を構造化して、人材育成プログラムなどを計画することにあります（未定稿 [西村美東士](#)「[【書評】現場参画型職員研修の新潮流～「工場発。このDXが技能承継の壁を突破する～凸版印刷滝野工場の挑戦」](#)を読んで」）。

職業の各現場においては、現場ごとの課題や変化に対応する「現場力」が求められます。その「現場力」は、普遍的知見を演繹法的に現場に適用するだけではなく、現場の課題から帰納法的に解答を発見することにあります。それは、まさに、大学で行われている「研究」の活動と一致するのではないのでしょうか。教育は「問うことを教える」ことであり、大学は学生に「研究の方法」を教える場であるとしたら、私は、大学のキャリア教育は、職業に関する基本的知識を与えるだけでなく、現場の課題と解決の発見の方法を教える場でなければならないと考えます。

現在、クリニカルラダーといって、看護師などがキャリアアップの展望がもてるラダーの見える化が進んでいます（[HP「充実した院内教育につなげる 組織・部署に合わせたラダー作成」](#)）。私はこのクドバスを活用したラダーは、他の従来の育成法やラダーなどより群を抜いて優れていると感じています。それはクドバスにおいては、現場の当事者からの参画により、現場ならではのリアルな見える化ができるからです。市街地の病院と海や山に面した病院とでは、患者や家族との対応一つとっても、異なる内容が求められるはずで、これによって、幼いうちから看護師を目指し、一生懸命勉強してきたのに、学校を卒業して、看護師資格をとって、看護師になった途端、

「私は向いてなかった」と言って辞めてしまうもったいない事例（「向いてない症候群」）などは減っていくはずですが。なぜなら、「向いてない」のではなく、現在の自分の職層においては、どんな能力が欠けていて、どうすればそれが身につくかが「見える」（評価の可視化）からです。「見える」からこそ、努力できるのです。

しかし、残念ながら、職場の一般的状況としては、このような「人材育成」がうまく回っていない事例が多くみられます。前掲書評で紹介した森和夫の「企業は教育投資の道筋を誤り、無駄な、無効な研修を課しているのに気づかないことこそ、最大の浪費である」という警告は的を射た言葉と言えるでしょう。

私は新入社員育成の課題として、次のように述べました（[西村美東士「若手社員育成の課題と方法」](#)—『組織の中で個性を発揮する人材』に育てるには、『日本生涯教育学会論集』35号、pp. 71-80、2014年9月）。

4-2 新入社員育成の課題

新入社員の自己発揮を求める育成者側の要請に対して、今後ますます流動化、不確実化する個人化社会を生きなければならない新入社員の心情は、防衛的にならざるを得ないと推察される。ここでは、世代間ギャップ及び育成する側と育成される側とのギャップの二つの視点から、組織的新入社員育成の課題を検討したい。

4-2-1 世代間ギャップの理解

日本生産性本部によれば、2013年度新入社員の特徴は「ロボット掃除機型」（「一見どれも均一的で区別が付きにくい、部屋の隅々まで効率的に動き回り家事など時間の短縮に役立つ（就職活動期間が2か月短縮されたなかで、効率よく会社訪問をすることが求められた）。しかし段差（プレッシャー）に弱く、たまに行

方不明になったり、裏返しになってもがき続けたりすることもある。能力を発揮させるには環境整備（職場のフォローや丁寧な育成）が必要」とされているが、たとえば、1976年度新入社員は「たいやきクン型＝頭から尾まで過保護のアンコがギッシリ」と評されていた。現在退職前の「たいやきクン型世代」が、どのように「ロボット掃除機型世代」を育てるのかという世代間ギャップ解消の視点が必要であろう。

4-2-2 育成する側とされる側のギャップの解消

前出 2013年度新入社員「会社や社会に対する意識調査」は、育成する側からは即戦力よりは行動力とリーダーシップが求められる一方で、新入社員は「挨拶」「笑顔」「良好な人間関係」を重視していることが明らかになった（新入社員と上司・先輩に『会社員生活で大事なこと』を尋ねたところ、両者ともに「仕事で成果を出す」、「心身ともに健康を保つ」が上位2項目であった。3位以下の順位に、新入社員と上司・先輩間に大きな認識の違いが見られた。両者の回答で10ポイント以上の差が開いたのは5項目。上司・先輩にとって重要度が高いが、新入社員が低いものは「人に負けない専門能力・技術を持つ」（17.9ポイント差）、「社外で視野を広げる機会を持つ」（12.5ポイント差）、「社内で豊富な人脈を持つ」（10.7ポイント差）であった。また、上司・先輩にとって重要度が低いが、新入社員が高いものは「元気に挨拶し、笑顔を絶やさない」（19.1ポイント差）、「上司・先輩と良好な人間関係を築く」（18.3ポイント差）と、両者の意識に歴然とした差が現れた。報告では、「新入社員は仕事経験がないがゆえにまだまだ仕事に対する具体性がなく、仕事の成果を出すために専門能力・技術力よりも、人間関係やコミュニケーションを重視することで、この難関を乗り越えようとする姿が垣

間見える。自らが成長していくための道筋までは、まだ描けていないようだ。新入社員と接する場合には、こうした価値観の違いを意識して、指導することが望ましい」としている)。

人間関係の希薄化などという視点よりは、仕事で成果を出すための調整力や交渉力の強化、すなわち、組織のパフォーマンスのために、良好な人間関係、すなわちメンテナンスを重視する若者をどう育成するかという視点が必要であろう。

また、頻繁な相談に閉口している上司も多い(新入社員の希望「頻繁なコミュニケーション」に対し、上司の方針は「自分で考えさせる」である。上司や先輩に『どのような対応(指導)を期待しているか』については、1位「頻繁にコミュニケーションをとってくれる」(50.1%)、2位「チャレンジする機会・場を与えてくれる」(42.0%)、3位「仕事について、事細かに教えてくれる」(31.7%)、4位「困った時は、助けてくれる」(29.9%)であった。上司、先輩に対し、『あなたが新入社員を指導するときのポイントは何か』を尋ねたところ、突出してトップで挙げているのは「自分で考えるように仕向ける」(70.0%)であり、新入社員との差は55.4ポイントもある。逆に新入社員が高くポイントをつけているが、上司・先輩が6.2%に留まった「仕事について、事細かに教える」であり、25.5ポイントの開きがあった。)。「仕事について、事細かに教える」などという新入社員の希望は、彼らの個人化未達状況を示すものといえる。

同報告では、「多数の受身的な態度の新入社員は、この状態から脱却し、自発的に仕事に取り組む心構えが必要である。また、上司・先輩の回答と大きくギャップが開いた項目は両者の意識や行動のずれ違いを示唆しており、育成・指導をするうえで注意すべきことであろう。しかし、多くの企業で行われている指導・育成方法

は教育担当者任せの状態であり、職場ぐるみ、組織的な対応が望まれる」としている。

「仕事をする上でどうしても犠牲にたくないこと」の1位である「仕事とプライベートの調和を保つ」(32.3%)については、「仕事をする上でワークライフバランスは大事な要素と認識されているが、会社選びにあたっての重視度は低い。ここに彼らの心の葛藤と矛盾があるようだ。会社に入社して仕事を始めると、必ずしもプライベートな生活ばかりを重要視しているわけにはいかないのが現実だ」として、新入社員育成の課題としての職場適応のポイントを指摘している。

このようなことから、彼らの個人化、社会化の達成状況を見ながらも、現実の会社の組織的要請への対応と、社員個人としての生活の充実を統合的に実現できるように育成することが必要といえる。

4-2-3 メンタルヘルスの課題

岩間は、「職場でメンタル面に問題を抱える若者が多いことは、不況期にあって再就職が困難な状況でも、新卒入社から3年以内に転職する大卒者がおよそ30%であまり変化していないこと、あるいはニートや引きこもりという現象が深刻な社会問題化していることによっても物語られる」としている(岩間夏樹「若い働き手のメンタルヘルス」、『日本労働研究雑誌』635号、2013年6月)。

企業の平均寿命が23.5年(東京商工リサーチ2012年「業歴30年以上の企業倒産」調査結果)であることなどの環境的要因も考慮する必要があるだろうが、もう一方で、個人化する若者たちの心因的状况についても理解し、効果的な育成を図る必要がある。

岩間は、社内に所属部署とは無関係に一種の疑似家族を作って若手のケアにあたる、様々なメンター制度やチューター制度を設ける、産業カウンセラーと契約してカウンセリングの機会を制度化するなどの例を挙げ、「モチベーションを失い、くすぶった気分で勤務するようなケースはかなり広い範囲にある」として、モチベーションのマネジメントによって若い人材を活用するという観点から組織のありようを検討し、メンタルヘルスのみならず生産性の上昇にも寄与するよう提唱している。

個人化社会では、個々人の選択と責任がきわめて重視され、結果として、流動性が高まり不安定で不確実な社会状況を生み出すといわれる（Zygmunt Bauman, *The Individualized Society*, London: Polity Press, 2001）。これまで見てきた育成者側のキーワードである「自分で考える」、行動力、リーダーシップ、創造・挑戦などについては、個人化の及ぼすメンタル面でのマイナス要因を踏まえた上で実現する方法を見いだす必要があると考える。

4-3 本テーマから見た先行調査の課題

先行調査では、「良好な人間関係」や「事細かな指示」を求める新入社員と、「組織の中での自己発揮」を求める会社、上司側とのギャップが示されている。その根源には、メンタル面も含めて「頑張ろうとするが、一人で空回りしてしまい、疲れ果ててしまう」という個人化社会の中での若者の姿がある。彼らに対する組織的対応と計画的育成のためには、彼らの個人化・社会化状況を理解するための明快な視点を設定する必要があると考える。

ここまで、スムーズな移行（トランジション）を目指したキャリア教育の観点から論を進めてきました。しかし、もう一方で、何のために「モラトリアム（「社会に出

る」前の執行猶予)」があるのか、ということについても考えておきたいと思います。

(最初に私の感覚を言っておけば、「まあ、1年生、2年生のうちは、自由に泳がせてあげてもいいのではないか」ということですが・・・)。

私は、『仕事なんか生きがいにするな』という本に対して、次のように書評を書きました(西村書評 泉谷閑示『仕事なんか生きがいにするな—生きる意味を再び考える』、幻冬舎新書、2017年1月)。

氏は、イソップ物語のアリとキリギリスの例を示す。わが国では、サブカルチャーにおいては世界をリードする勢いを持っているが、カルチャーそのものについては十分ではないとし、キリギリスのように、憧れるに耐える文化を生み出すことが、現代の虚無に押し潰されないために求められていると言う。

評者は考える。泉谷氏の言うような文化を求める子どもたちは、少ないだろう。多くの子もたちはサブカルに走り、教師もそれに対応しなければならない。文化は押しつけでは育たないからだ。しかし、個に応じた指導を考えるならば、生きにくさを感じながらも「実存的問い」や文化を追い求めるタイプの子もたちに対しても、イソップ物語のアリのような「未来」だけでなく、キリギリスのような「今」の充実のための支援を検討する必要がある。

将来の労働だけでなく、「私は何者なのか」と問う、「生きる意味」を問うといった実存的悩みに答えることも、教育は忘れてはならないと私は考えます。

第7回

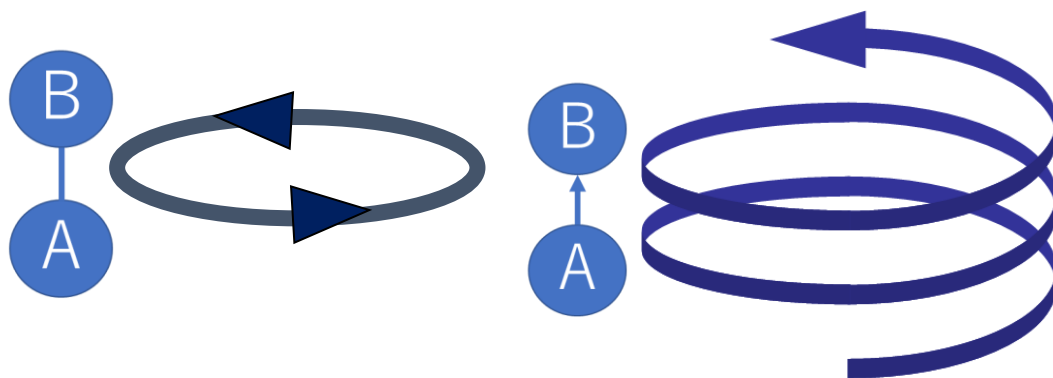
② 個人化社会に生きる前編＝社会の中での自己決定

個人化社会においては、自己決定の自由が尊重されます。しかし、自己決定して行動すれば、それは自分の責任になります。他者の言うとおりにすれば、指示されたとおりに動けば（指示待ち）、それは自分の責任にはならない（ような気がします）。

あることを目指して失敗しても、目指したことを諦めなければ、それは「体験」になります。しかし、失敗することを恐れるがあまり、自己評価基準を下げて、「どうせ失敗するだろうから」（敗北主義）と言って挑戦しない人もいます。

私はこのようなとき、教育側が「初めの一步を励ます」よう提案したことがあります。「失敗を恐れず突き進め」と言うのではなく、こけないように、傷つかないように、恐る恐る一步を踏み出そうという趣旨の言葉です。

「自己決定」を避けると、右図のような「らせん状発展」が望めず、左図のような同じ地平をぐるぐる回っている状態（ロボット化）になってしまいがちです。「他者や、環境、社会が悪いからこうなっている」のであって、右図のような自分の意思で生きている状態ではなくなってしまうからです。それはつまり、「（親や教師などの）他者が決めたルールの上を生きている」ことといえるのではないのでしょうか。



左図 他者が決めたルールの上を生きる

右図 自己決定の人生を生きる

図 自己決定によるらせん状の発展

この図で注意すべきは、本人にとっては、両図とも主観的には、前の位置に舞い戻ってしまったと感じられるかもしれないということです。しかし、客観視すれば、右図の場合は、A地点からB地点へとシフトアップされていることがわかるでしょう。

前出古市憲寿は、「自立し、自己決定の人生を歩むことには、高いハードルがあり、今や、自由は、手放しで喜べることではない今日、そこに猛烈に立ち向かわないことによって、若者は絶望からくぐり抜けている」と言っています（[西村書評](#) 古市憲寿『僕たちの前途』、原書房、2012/09）。

しかし、青少年教育の観点からは、自立して主体的に自己決定する若者の育成を目指す必要があるのではないのでしょうか。それは個人化社会を充実して生きるためには欠かせないことだからです。

ただし、ここは議論のあるところですが。そのように主体的に生きることが、本当に必要なのか。多くの若者が、状況に適応して受動的に生きようとしているようにも感じます。さらに、中村雄二郎は、個人が固有の身体を伴って、それぞれの世界で受苦し、受動しつつ生きているという真実を説いています（中村雄二郎『臨床の知とは何か』、岩波新書、1992年1月）。

しかし、ここでは、自己決定が必要なときに自己決定できるよう支援することが、教育にとっては不可欠と考え、その方法について考えてみましょう。

私は、ワークショップ型授業の方法について、次のような論文を投稿しました。これが私にとっては、初めての「ジャーナル論文」（学会誌、学術雑誌に掲載されたオリジナルな研究論文）ということになります。それまでは、社会教育主事時代から、おもに依頼原稿を200件ほど書いてきました。ジャーナル論文は、依頼原稿と違っ

て、原稿料が支払われない、原稿督促が来ない、そして、「論文の作法」にうるさいなどの大きな違いがあります。ジャーナル論文は、形式偏重などの問題もありますが、研究者にとっては必須のタスクといえます。

本論では、2日間の「生涯学習概論」の授業で、学生がどのように自己や他者に対する気づきを得たのか、その変容の過程を解明することによって、学生の自己決定能力を高める授業の構成要素とその効果を明らかにしました。第1に、ワークショップ型授業によって、即自から対自へ、対自から対他者へと学生の気づきが促され、対他者から再び対自や即自のより深い気づきへと循環する過程が明らかになりました。第2は、学生の自己決定能力の到達段階の把握に基づく戦略的な指導内容と授業構成の必要性が明らかになりました（[西村美東士「ワークショップ型授業の構成要素とその効果－学生の自己決定能力を高める授業方法」](#)、大学教育学会『大学教育学会誌』22巻2号、pp.194-202）。

本授業で次のようなことがあった。ある学生が「価値観の違いという一言で、何もかもすまされてしまう。その言葉は人を理解することを拒否する言い訳のように聞こえる。午後の授業では、そんな言葉をなくせる人間関係の方法を知りたい」と書いた。だが、このワークショップの終わりでは「今、何か考えがまとまりそうと思っていたときに別のことを言われてわからなくなったりした」と書いている。このような先まで見ている学生には、一斉参加型のワークショップだけでなく、自己内の深い思考のための静寂の時間が必要だといえる。ワークでの他者との交流がかえって自己への気づきにとって邪魔になる場面もあると考えられる。

本稿の最後には、次のように「討論」を提起した。

5. 討論

5-1. 自己決定能力を高める授業方法

学生を自己や他者存在への気づきにまで導くためには、一方向の一斉承り型講義では時間がかかる。双方向の授業や学生同士の共同作業によるワークショップ型授業は、現代青年を自己決定の態度に向かって変容させるために一定の効果があるといえよう。

学生の「即自」→「対自」→「対他」という気づきの発展過程の仮説は、部分的には検証された。しかし本研究では同時に、他者への気づきが「対自」や「即自」の気づきに再び転化して深まっていくことが確認された。

気づきの循環を効果的に支援するためには、個人の生涯の時々と生活の各場面に、自己と他者とのトータルな相互関与を体験する機会をいくつか用意する必要がある。これを高等教育において実現するためには、「問わず語り」の場を数多く用意することが必要であろう。

さらに、一人一人の自己内対話をどう促すかという教育的視点が求められる。ワークショップでの対他者の体験だけで自己を質的に高めることはできない。他者との相互関与とともに自己内対話の充実こそが、現在、若者が顕在的に求めている「癒し」「居場所」の中でのように「あるがままの自分」でいられることにつながり、さらには自己対社会・自己対歴史の学問の広がりにも通ずるのである。自己決定能力はこのようにして育まれると考える。

5-2. ワークショップ型授業の構成要素とその効果

上の視点に立ち、今後求められるワークショップ型授業の構成要素を考えたい。

今回の授業における指導者の行為は、課題提示(問いかけ)、紹介(読み上げ)、回答(レスポンス)、指示(ワークの進め方)が頻繁に行なわれた。そのことによって、

役割提供機能(ワーク)、表現支援機能(文章、話し合い、発表)、受容機能(学生の表現への評価)、課題解決機能(気づきの促進)、揺さぶり機能(固定概念の打破)を發揮していたと推察できる。

しかし、その効果は、学生の到達段階やその循環の程度によって左右されることが明らかである。

受動的に生きてきたと自己規定する学生にとっては、表現支援機能や受容機能による学習が大きな部分を占めていたと考えられる。日常で避けてきた「新しい関わり方」を体験し、他者への肯定的関心と自己への気づきにつながったといえる。

次に、自己決定がしづらいと認識していた学生に対しては同様の効果があったと思われるが、それ以上のものは得られなかったようである。これらの学生に対しては、より質の高い課題を提示することによって、もっと高いレベルの気づきを促すことが重要といえよう。

このように、ワークショップ型授業の構成にあたっては、学生の変容がどの段階にあるのかをたえず把握しながら、適切で柔軟な授業を組み立てることが求められる。学生が到達した質的内容に応じたグループ編成や展開方法も検討の価値がある。適時処理が行なわれず、終了後に教師が講評で補完する事態では、ワークショップ型授業の意義は薄いのである。

また、学生のもつ固定概念を揺さぶり、自己と他者との関わりのとらえ直しを促すことが大切である。自己内対話の深化を含めた気づきの支援機能の充実が重視されるべきであろう。

他者との距離を測ることによって自己の位置を客観的に認識し、役割發揮を自己決定する要素も重要である。本授業の図解ワークショップで自分のカードの主張が

メンバーに共有され、全体の図のなかで位置づけられることは、その自己決定を促すものであった。

以上の検討によって、ワークショップ型授業の構成要素(機能)の働き方ともたらず効果に一定の関係が見出せた。今後はこれらの関係に注目し、より洗練した授業に高めることを課題として深めてゆくこととしたい。

終わりに本論文をまとめるに際し、貴重な示唆をいただいた徳島大学森和夫教授に感謝する次第である。

教師の発問の方法など、マニュアルは多く、また、実践にとって有益であるが、オリジナルな仮説に基づいて自由に書ける「研究論文」においては、より本質的な検討を試みることができるでしょう(すべて「根拠を示す」というやっかいな前提が必要ですが)。

このような個性豊かな「研究論文」が、教育現場でも書かれ、交流され、蓄積されたとしたら、教育の仕事は、より生き生きするだろうし、学問としての教育学も二流学問などではなく、原理、実証、実践の3分野の体系化が行われるのではないでしょう(西村書評 苫野一徳『学問としての教育学』日本評論社、2022年2月)。

指導者にとっても、研究者にとっても、自己決定が重要といえるでしょう。その障害となるのは、「政治案件」と「訓詁学的」検討だと、千々布敏弥は警告しています。これについて私の書評を紹介します(西村書評 千々布敏弥『先生たちのリフレクシオンー主体的・対話的で深い学びに近づく、たった一つの習慣』、教育開発研究所、2021年11月)。

教師が自らの信念に疑問を抱き、リフレクシオンと実践の往還を経て初めて可能になるものである。そのため、中教審答申はそこで授業研究を提案しているが、

教師の学習の場である授業研究が知識偏重の信念に支配されている場合、信念の変容を得ることは難しいと著者は言う。

本書が目指す教師の姿は「主体的・対話的で深い学び」の視点で自らの授業を見つめ直し、信念を変容させ続けるものである。そのためにどのように教師に働きかけたらいいのか、その戦略を本書は考える。

著者は、都道府県教育委員会の施策の主たる考案者の指導主事の問題を、次のように指摘している。先行研究をレビューして問題点を検討して論文の主題の必要性を説明する。同様の手段をとるように助言すると「それはできない」との回答。

「引用するのであれば、そのセンターの了承を得なければならない」という理由だ。部外秘の文章ではない。ほとんどの教育センターは紀要として冊子を刊行し、図書館や他センターに送付している。インターネット上でPDFを公開する教育センターも多い。それなのに、許可なしに引用することはできないという価値観（迷信）が流布していると言う。最近の教育センター論文をいくつか検索してみても、やはり他センターの引用がない。実践研究論文を書いた体験をポジティブに語る教師は少なくないが、他者が書いた実践研究論文が自らの実践に与えた影響を語る教師はほとんどいないと言うのだ。

教育センターの研究は、学習指導要領の項目に従ったものが多い。「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」「見方・考え方」「情報活用能力」というキーワードは当然だが、教科別にみると、学習指導要領改訂にしたがって新たに登場した内容項目に関するもの、たとえば国語における「情報の扱い方に関する事項」「自分の思いや考えを広げる」、社会における「社会への関わり方」「社会の情報化と産業の関わりなどがある。それらの改訂事項について、学習指導

要領および学習指導要領解説の記述内容を引用し、それに教育センターとしての解釈を加えて研究仮説を設定して協力校で実践する。その成果を紹介しながら研究仮説が検証されたと、まとめるのだと言う。

著者は言う。このような研究スタイルにおいて、学習指導要領自体が検証の対象になることはない。学習指導要領をいかに解釈するかという姿勢で研究がすすめられる。これは儒教の教えを解釈していった訓詁学に似ている。訓詁学は経典の語句の意味を解釈するものとして出発したが、その解釈の形骸化が指摘されることになった。

そのような訓詁学的な実践研究が蔓延している。学習指導要領を経典のごとくとらえ、いかに解釈するかが重要になってくるので、実証研究の積み重ねで新たな理論を構築する発想は希薄になってくる。

著者は「演繹的思考が続いてきた日本の公教育」として、次のように述べている。私と似た認識が苅谷剛彦の著『コロナ後の教育へ』（2020）で示されている。苅谷氏は戦後の教育改革をリードしてきた教育政策の言説は演繹型思考となっており、抽象度の高い理想や概念を、抽象度を下げて論じようとする思考形態が主になっていると批判的に論じている。そこで多用される言葉が「周知・徹底」であり、国が生み出した「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」などのことばが内包するだろう問題点や矛盾についての議論を封じ込め、予定調和的に新しい概念を普及することが「周知・徹底」という言葉に込められている、と論じているとする。

著者は言う。苅谷氏の演繹的思考論は、前節の教育センターにおける訓詁学的研究の要因を説明してくれる。学習指導要領などの国が新たに示した概念を演繹的に

思考しようとするならば、他の教育センターの考えの引用よりも、国の考えをより妥当に解釈することに重点をおくのは当然だろう。もっとも、荻谷氏は演繹的思考形態のアンチテーゼとしてイギリス・オックスフォードにおける帰納的思考形態を示しているが、それが日本において有効な打開策となるかについては著者は疑問を呈する。

なぜならば、日本で、とくに学習指導要領に関して新しい概念が形成されるときは、現場目線の帰納的思考で検討されるからだと言う。学習指導要領の成果は教育課程実施状況調査で測られることとなっているが、ペーパー調査で判明できるのは限界がある。

そこで検討に付されるのが、文部科学省の教科調査官が講演や授業研究指導などで得た現場情報である。教科調査官の週末は、学習指導要領作成や学力調査などのための会議で埋められている。そのためにウイークデーに代休を取得できるが、多くの調査官はその代休日に現場に足を運んでいる。著者は、そこまで働いて、彼らが手にする給与は教員時代よりも低い。まったく頭の下がる人たちだと言う。

著者は続ける。教科調査官が得た情報は定期的開催される教育課程課との会合で行政職に提供される。加えて教科調査官が学習指導要領作成などのために開催している教科ごとの協力者会議のメンバーの多くは全国から集められた、選りすぐりの現職教員や指導主事たちである。国としては、常日頃から現場の情報を収集しており、それらの情報は帰納的に将来の施策を議論することに役立っている。都道府県教育委員会の議論も同様だ、施策の考案者のほとんどは指導主事であり、彼らも日常的に現場に足を運んでいる。

日本の問題点は、それらの（筆者注：教育現場から得る）帰納的思考が含まれている場がブラックボックス化していることだと著者は言う。帰納的思考で100%教育課程施策が形成されているわけではない。今日の意味決定システムであれば、国民の信託を得た議員やそのなかから任命された省庁の幹部からトップダウン的に新しい施策が示されることは避けられない。行政官はそれが現場に降りた際に予想される混乱や効果を説明し、現実的な施策となるよう働きかけるのだが、その説明が効を奏さない場面が増えているようである。

評者は考える。下の者は「前例踏襲」となりがちなのだが、上の者は、新規に着任した途端、目新しい、あるいは目新しく見える施策を立てたがるのは、よく見る傾向である。それが教育界に混乱を引き起こすことにつながると評者は考えている。

さらに、著者は次のように論を進める。内部の人間であればどれが政治案件で、どれが現場の実態に即した帰納的思考で形成された施策であるかは承知しているのだが、それをブラックボックス化していずれも必要な施策として説明するのも、日本の行政官の思考形態である。かくしてトップダウン的に示された施策を演繹的思考で「周知・徹底」しようとする教育関係者が増えているのではないかと懸念される。

評者は考える。学習指導要領では、「生きる力」や「学びに向かう力」など、さまざまな非認知能力の育成が謳われている。しかし、そこには「社会からの要請」や「政治案件」による影響、偏り、変質が存在している。ここに、著者の言う「訓

「詰学的」検討の限界があいまって、中教審の求める「授業研究」が、現実的な教育施策に結実しないという状況が生じているのではないか。

青少年教育指導者が「教育学なんかあてにしていない」現状、教育学研究者が、教育現場にラブコールを送り続けていても、教育現場の課題に十分には応えられない状況を考えると、お互いがもっと自由に語り合い、いきいきとした青少年教育論を構築することが必要と言えるでしょう。

青少年教育論を学ぶ学生に対しては、私はわが国の能の教育方法としての「守破離」（無着成恭「型がある人間が型を破ると『型破り』、型がない人間が型を破ったら『形無し』」）という言葉提起したい。これまでの知見を学び、それを守る。しかし、いつまでもその型を守るのではなく、その型を破り、自分らしい仮説に基づいた新しい知見を生み出す。それが、レポートとは異なる研究論文（卒業論文）の書き方と言えるでしょう。

第8回

個人化社会に生きる後編＝自分の人生を自己決定で生きる方法

解説/個人化社会に生きる若者たちの動向（2012年青少年研調査結果から）

私の所属する青少年研究会について

[HP 青少年研究会 Japan Youth Study Group](#)

これまでの調査は以下の通りです。

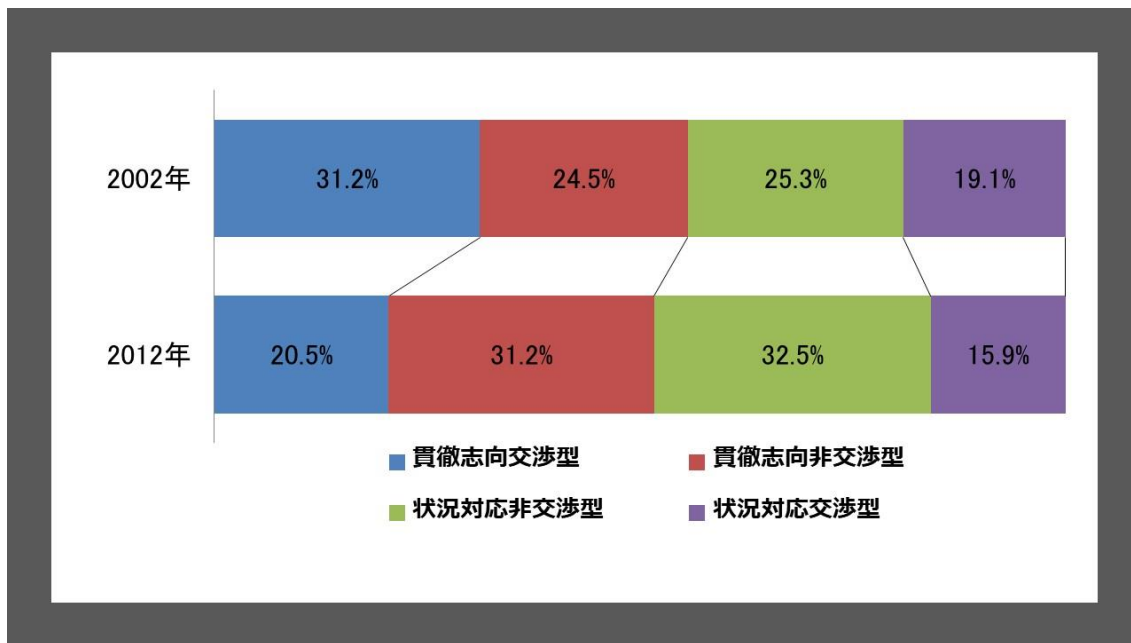
調査年	1992年、2002年、2012年、2022年（予定）
定点調査	東京都杉並区（1000人）と神戸市灘区・東灘区（1000人）
調査対象	16歳から29歳の都市青年

以下、私の分析結果を説明します。

西村美東士「[この20年に若者の意識、生活、考え方はどう変化したか](#)—個人化に対応する青年団体育成の方法を考える」、日本青年館『社会教育』2014年2月号

- ①貫徹志向交渉型＝「どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切」だと思っていて、「友達と意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをする」タイプ
- ②貫徹志向非交渉型＝「どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切」だと思ってるが、「友達と意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをするということはない」タイプ
- ③状況対応非交渉型＝「どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切」だとは思っておらず、「友達と意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをするということはない」タイプ

- ③ 状況対応交渉型＝「どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切」だとは思っていないが、「友達と意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをする」タイプ



次に、各タイプの属性（フェースシートから）の特徴を次表に示します。ここで、

- （1%有意）は○（5%有意）よりも強い有意差を示しています。

表 各タイプの属性の10年前からの変化

タイプ 調査年	貫徹志向非 交渉型 2002	貫徹志向非 交渉型 2012	状況対応非 交渉型 2002	状況対応非 交渉型 2012	状況対応交 渉型 2002	状況対応交 渉型 2012
性 差	●男>女	→有意差なし	●女>男	→有意差なし		
年 齢	●低年齢>高年齢				有意差なし →	●高年齢> 低年齢
親との 同居	●親と同居	→有意差なし	○親と同居 していない	→有意差なし		
学生か 有職者か	有意差なし →	○学生>非 学生			有意差なし →	○非学生> 学生で有職 者多い

本表について、私は次のように分析しています。

この表から、たとえば、非交渉型のうち、男は貫徹志向、女は状況志向の傾向があるという10年前の感覚で見間違ふことになるといえる。また、状況対応交渉型では高年齢という傾向が新たに生じている。このことから、若者のなかでも、とくに低年齢層は、2002年の貫徹志向非交渉型の傾向が引き続いているとともに、さらに、状況対応しつつ交渉すること（状況対応交渉型）を苦手とする傾向が強まっていると推察される。

量的に大きく減少した貫徹志向交渉型だが、属性の面でも、2002年の高校時代「○運動部系に所属」、「○文化部系の場合、積極的活動」という項目の差が消滅している（有意差が5%レベルに至らないという意味。以下同じ）。また、状況対応非交渉型の「●運動部系の場合、非積極的」などの差も消滅している。

このように、貫徹志向交渉型における体育会系優位傾向の消滅をはじめとして、各タイプの有意差項目が変化している。これらは、体育会系を含む若者の個人化が進み、各タイプの特徴が質的にも変化していることを示すものであると考える。

西村美東士「[青年教育研究 30年から見えてくるもの](#)—個人化を育む社会化支援教育の今日的課題」、日本青年館『社会教育』2015年10月号

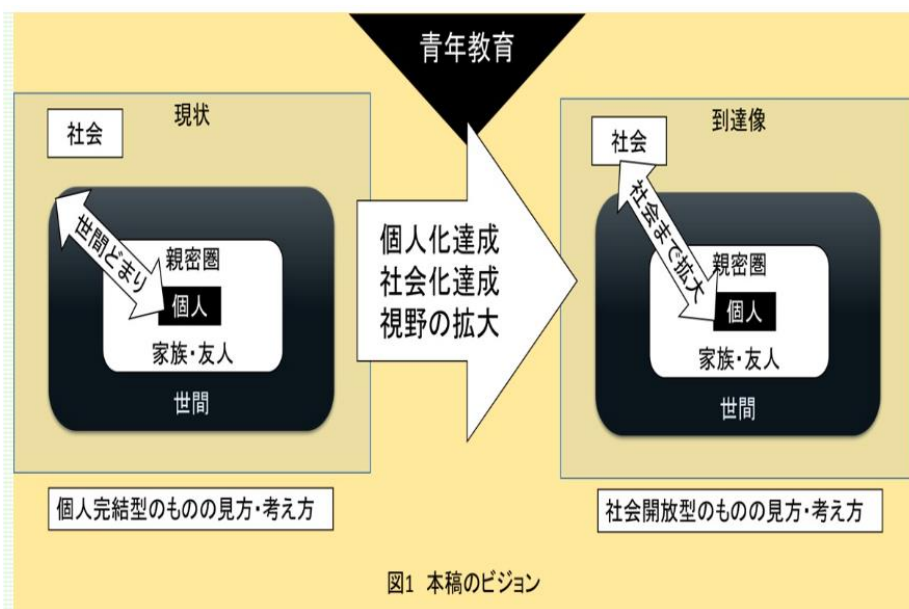


図1 本稿のビジョン

上図の親密圏の「世間どまり」でおさまってしまう若者の交流について、私は次のように説明しています。

3. 親密圏での交流に頼る若者たち

1992年から10年ごとに3回継続してきた神戸・杉並の青年に対するわれわれの調査では、親友や仲のよい友達と知り合った場所は、2012年では「高校で」がトップで7割以上である【[青少年研究会](#)】。また、地方においても、石黒格は、東北地方の若者の東京圏への移動に関する調査結果などをもとに、地元志向の若者たちにとって、「新卒採用時に県の出身者枠を設けている企業の寮に入れば、同じ高校出身の先輩が何人もいる」などのローカル・トラック(水路付け)により移動先が東京圏と宮城県に集中していること、それでも高卒者にとっては労働現場が厳しく、仲間が次々と辞めて青森に戻っていくなかで残された者が苦悩していると指摘する【[東京に出る若者たち](#)】。

地方の青年教育にとっても、今日の若者のこのような地元志向は、手放して歓迎できるものではない。その本質的要因として、多くの若者が、親密圏での交流に頼

っており、地域社会での自己発揮には向かっていないということが挙げられよう。

青年期精神病理学専門の斎藤環は、今の若者は「ヤンキー化」していると言い、「気合い」や「絆」といった理念のもと、家族や仲間を大切にするという倫理観が融合した普遍的な文化だと説明する。コミュニケーションも、お笑い芸人のように達者で、なぜか自信をもって生きているという。斎藤は、これは非行ではないのだから、更生させる必要はないとしつつ、公共概念とセットで「個人主義」を再インストールする必要を指摘する【[ヤンキー化する日本](#)】。親密圏での交流については、いわば今日では「成功モデル」のヤンキーに対しても、社会は何らかの社会化支援機能を果たさなければならないということなのだろう。

われわれの前出調査等からは、「メディア利用によって、人間関係が希薄化している」などの言説は、今日の若者の実態からは筋違いであることは明らかである。それよりも、いくらスマホを使いこなし、友人数やおしゃべりの時間が増えて親密そうに見えても、その交流からは個も深まらず、社会に対しても開かれていかないということこそ、社会化支援が解決すべき課題なのだと考える。

西村美東士「[若者との協働による価値創造の新しい方向](#)」日本青年館『社会教育』

2017年10月号

私は、本稿で、次のような「個人化・社会化のスパイラル」の図を示しました。

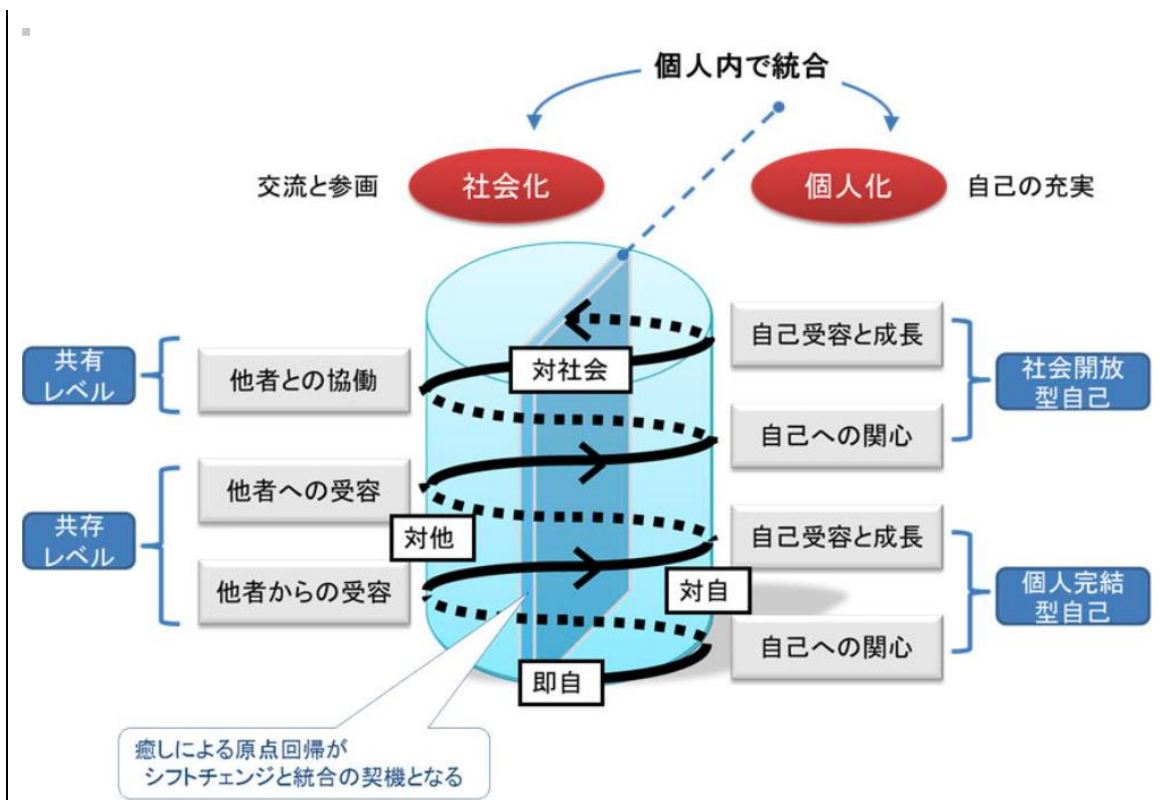


図 個人化・社会化のスパイラル

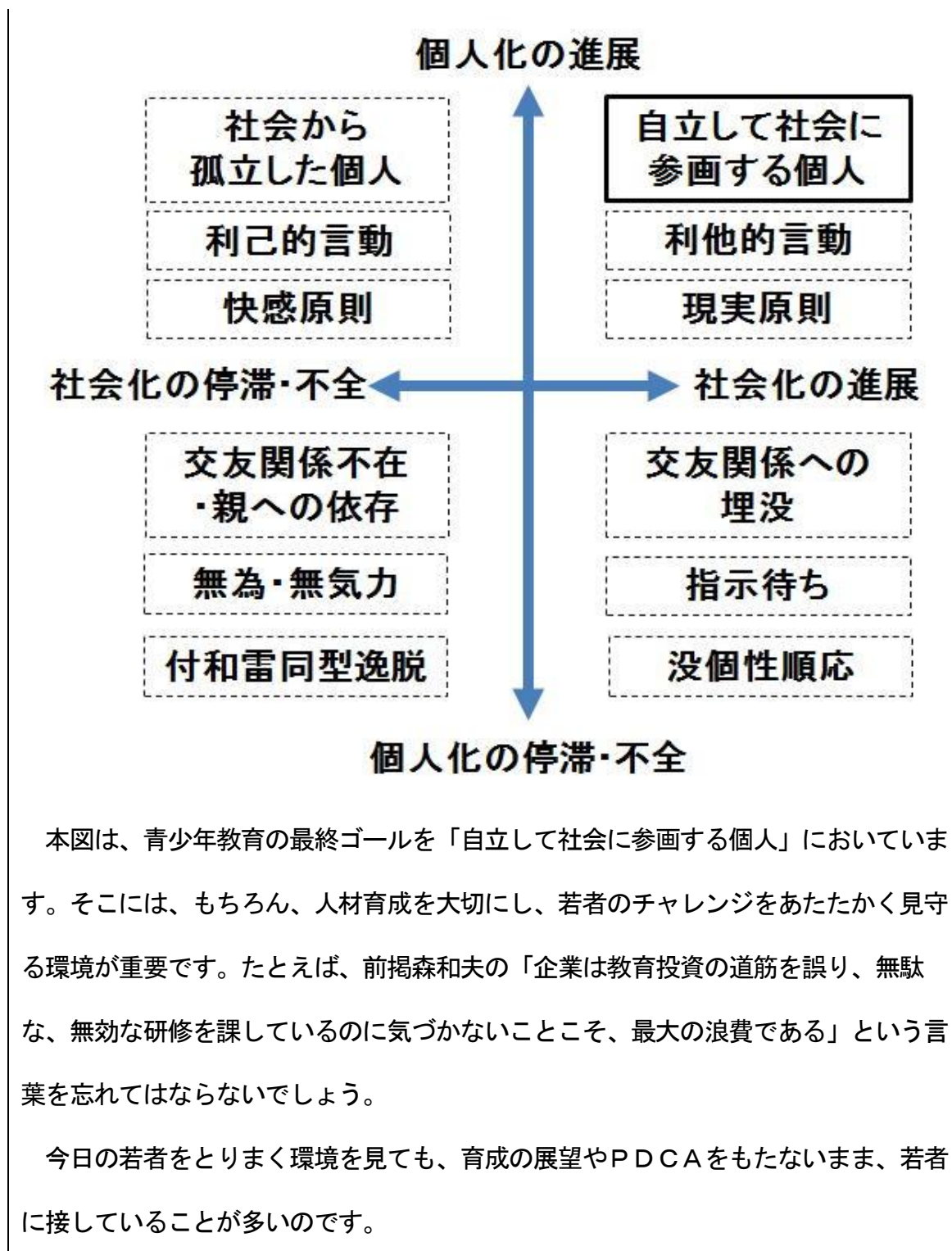
私は、本稿で、次のような解説を加えています。

このスパイラル自体は連続的なプロセスであるが、本図を個人化支援の視点（右側）のみから見た場合は、ついたての裏は見えず、個人化プロセスに戻ってきたときだけ、その成長を「自己の充実」（人格の完成）の側面から見るることができる。社会化支援の視点（左側）のみから見た場合は、逆に、個人の自己への関心と自己受容のレベルアップの様子を見ることはできないが、共存から共有への社会形成者としてのレベルアップの側面から見るることができる。これらのいわば「断続的観察」が、図に示したようなスパイラルとしての理解により、「連続的観察」ができるようになると思いたい。（西村美東士「個人化の進展に対応した新しい社会形成者の育成—キャリア教育及び青年教育研究の視点から」『日本生涯教育学会年報』2012年）

エリート層の自己実現を頂点とするマズローのヒエラルキーから抜け出し、図のような寛大さで支援を進めるほうが柔軟性に富んでいて、かつ、生涯学習の精神を実現することになるだろう。今日の個人化社会は図3の第一象限のように自立して社会に参画する個人を求めている。しかし、生涯学習研究はマクロすぎて、個性の側面は無頓着だった。臨床心理学はミクロすぎて、課題を横つなぎできなかつた。そして、若者自立支援政策は個人化と社会化のあいだをぶれ続け、政策の進展は滞ってきた。これを解決できるのは、時代、対象、価値観の変化に対応する「現場力」（臨床の知）である。そのためにまず、個への対応と集団への対応の両者の実践と研究のコラボを進めたい。

注：筆者は、日本子育て学会研究交流委員長として、子育て支援学の体系化に取り組んでいる。そこでも学際的な観点が求められている。

加えて、「青少年の個人化と社会化の不全と進展」について、私が作成した図を下に示しておきたいと思います。



そこで、ここでは、若者自らが自分の人生を自己決定で生きる方法として、日次計画表について紹介したいと思います。

http://mito3.jp/ccc/05_file.html

から「卒業時仕上がり像到達日次計画」を選んでダウンロードしてください。

■自己決定のコツ 計画は緻密に、変更は大胆に（気楽に）

コントロール+矢印キーでラクラク移動 大きい表も瞬間移動ができます。

スタートの日付を変えると、以下日付、曜日すべて変わります。

不要になった列は、列選択→切り取り→右端に貼付けで記録は残しておきます。

目標ページ数 (p) は、実際の進行のなかで、変更できます。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
1	卒業時仕上がり像到達計画			コントロール+矢印キーでラクラク移動										
2	氏名 聖徳花子													
3	月日	曜	イベント	人間書き	人間書き	p	研究活動	就職活動	就職活動	就職活動	就職活動	就職活動	p	就職活動
4				大切な人に気持ちの良い言葉遣いができる	人の痛みを知っている		〇〇は〇〇であることを明らかにする	自分の就職希望先を知っている	自分にあった企業に就職することができる	旅程管理者として採用されるための能力を身につけている	旅程管理者としての能力を身につけている	公務員採用試験に合格する学力を身につけている		公務員としての能力を身につけている
5	不安なこと													
6	当面の課題			自己主張訓練										公務員の仕事観
7	2012/05/01	火		図書館調査	心理学の本10ページ	10		キャリア支援室	方針決定	採用案概調査	仕事案概調査	傾向と対策		図書館調査
8	2012/05/02	水		アサーション	心理学の本10ページ	10		企業訪問ネット	企業活動実態調査					
9	2012/05/03	木		アサーティブ	心理学の本10ページ	10		文献調査	キャリア支援室					図書館三越キャリア
10	2012/05/04	金		交流分析学習	心理学の本10ページ	10			卒業生の進路とその実態					関係機関調査
11	2012/05/05	土		交流分析学習	心理学の本10ページ	10								
12	2012/05/06	日		交流分析学習	心理学の本10ページ	10								公務員
13	2012/05/07	月		交流分析学習	心理学の本10ページ	10		丸屋助手インタビュー						
14	2012/05/08	火		交流分析学習	心理学の本10ページ	10		太塚助手インタビュー						
15	2012/05/09	水		交流分析学習	心理学の本10ページ	10								
16	2012/05/10	木		交流分析学習	心理学の本10ページ	10								
17	2012/05/11	金		交流分析学習	心理学の本10ページ	10								放送大学視聴計500時間
18	2012/05/12	土		交流分析学習	心理学の本10ページ	10								
19	2012/05/13	日		交流分析学習	心理学の本10ページ	10								
20	2012/05/14	月		交流分析学習	心理学の本10ページ	10		事務プレインタビュー						
21	2012/05/15	火		交流分析学習	心理学の本10ページ	10								
22	2012/05/16	水		交流分析学習	心理学の本10ページ	10								対策開始
23	2012/05/17	木		交流分析学習	心理学の本10ページ	10								
24	2012/05/18	金	籍根PT	交流分析学習	心理学の本10ページ	10								
25	2012/05/19	土	籍根PT	交流分析学習	心理学の本10ページ	10								
26	2012/05/20	日		交流分析学習	心理学の本10ページ	10								

本計画表のミソ

就職活動は、採用されるための能力獲得と、採用後その仕事をしていく上での能力獲得の2通りがあります。

しかし、後者が十分には達成できなくても、採用が決まって、同僚が一安心しているあいだに、自己開発して追いつけば良いのです。

明るく朗らかに、自己決定の人生を歩いて行ってもらいたいと思います。

前回の振り返り(出席ペーパーより)

出席ペーパー

「貫徹志向非交渉型」についてですが。人によって価値観が異なっていることが理解できるため、他人と意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをしたくないです。それでも、「自立して社会に参画できる個人」と言えないのでしょうか。

私のコメント

「他人と意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをする」ことがいいのかどうか。アクティブラーニングの発想では、「積極的」と評され、それを「くぐり抜けようとする」若者については、「消極的」というレッテルが貼られがちです(しかし、古市憲寿「自立し、自己決定の人生を歩むことには、高いハードルがあり、今や、自由は、手放しで喜べることではない今日、そこに猛烈に立ち向かわないことによって、若者は絶望からくぐり抜けている」などの指摘がある。2012年)。

私は、むしろ、アクティブラーニングのような「納得がいくまで話し合いをするほうが積極的で良い」という一面的な考え方に反対です。対話は、自己内対話を伴ってこそ、探求的になると思います。教育は、社会の形成者とともに、自立し、自己決定ができる人格の完成を目指しますが、それは、「つねに納得がいくまで話し合いをする積極的な人」を目指すということではないと思います。

実際、社会的能動／受動との関係を調べるため、「貫徹志向」のタイプの者については、「個人のみ力で社会を変えることはできない」の回答により、「状況志向」のタイプの者については、「みんなで力を合わせても社会を変えることはできない」の回答

により、それぞれ否定を「社会的有能感」、肯定を「社会的無力感」ととらえ、8分類に細分化してみました。これを類型ごとに有能感／無力感で比較しましたが、友人関係に見られるような目立った特徴は多くは見られませんでした。

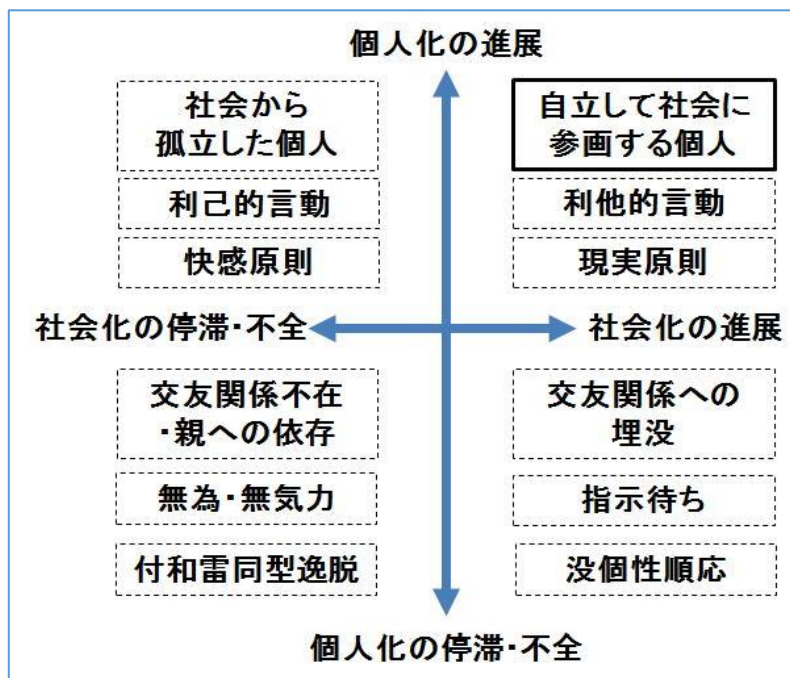
その理由として、社会的有能感が、「友だちと意見が合わなかったときには、納得がいくまで話し合いをする」という友達との合意形成への態度ほどにはリアルなものにはなっていないこと、また主観的には社会的有能感がたとえあったとしても、それが「社会的能動」の展望までにはつながっていないことなどが考えられます(西村美東士「[学生の社会化を支援する大学授業の方法論](#)」、徳島大学、『大学教育研究ジャーナル』1号、pp. 1-19、2004年3月)。

社会に出たときに必要なチームワークとしては、「旗を振る人」、「その人をサポートする人」などの多様な役割が求められると考えます。そして、この学生の言うように「人によって価値観が異なっている」個人化、多様化の時代に、「納得がいくまで話し合いをしない」ことも選択肢の一つだと思っています。そのことによって、思わぬ人から、はっとするような言葉を聞けたりすることもあるかもしれません。

ただ、「話し合いをしない」というのは「共存の作法」であり、(価値観が異なる人とも)「納得がいくまで話し合いをする」というのは「共有の手段」だと考えられます。後者が必要な場面というのでも出てくるでしょう。そのため、個人は、自己のタイプを把握し、「強み」を拡大し、「弱み」すなわち課題を少しでも解決するために視野の拡大と自己客観視が必要になると考えます。

非交渉型の人に対しては、「アクティブな人間関係」を押しつけるのではなく、たとえば「マナティの世話をする」とか「牛を飼う」などの体験学習から、自己の生き方を考えさせるなどの対応が必要だと思えます。

話を戻します。ですから、「このタイプは自立して社会に参画できない」ということはできないと思います。それよりも、前回提示した青少年教育の理想型は、「個人化と社会化がともに達成した状態」であることが私の主張のポイントです。この図を再掲します。



ただ、前出個人化・社会化スパイラルにおいて、すべての人々の発展の節目節目に「癒し」による「原点リセット」（生まれたままの感情を取り戻すこと）の機会が必要であることは付言しておきたいと思います（[西村美東士「癒しと生涯学習」](#)、生涯学習研究 e 事典、日本生涯教育学会）。

出席ペーパーを書いてくださった学生に、感謝いたします。このようにして、教師と学生の双方向の関与があつてこそ、授業の不十分な点が補足され、さらには探求的学習や価値の創造が可能になると思います。

第9回

④ 貧困・格差・差別＝今日の貧困、とりわけ関係性の貧困について考える

報われない差別観

競争主義（同質上下競争）のレールを走ってきた人は、同質の価値観のもとにいがみ合うという「防衛的風土」に苦しむことになりがちです。私は学生の「出席ペーパー」とのやりとりを引用して、次のような論文を書きました（[西村美東士「生涯学習社会が大学授業を変える－高等教育内容7つの転換」](#)、全日本社会教育連合会『社会教育』51巻3号、p16-21、1996年3月）。

転換5－課題提起・解決型にする

学校での学習への導入が科目中心なのに対して、成人の学習は課題中心であるという（M. ノールズ）。初等教育などでも、同様の課題中心の教育がかなり普及しつつある。心と体の病いを治すのを援助してくれるのはお医者さんであっても、実際に治しているのは本人である（自己治癒力）のと同様に、課題を認知してこそ主体的な学習が成り立ち、それが自己教育力の発揮につながるのである。学生の課題意識を呼び起こさないままに教え込むのでは教育効果が薄い。

さらに、そこで呼び起こそうとする課題自体も、日常生活の事実には埋没するなかでは気づきそうもない、真実にふれる感動と気づきを与えるような深みのある課題でなくてはならない。次のような出席ペーパーがあった。

わたしの友人でいわゆる一流大学に通っている人がいます。その人は、一流企業に入るために一流大学に行ったんだそうです。

今、就職で、みんな四苦八苦していて、やっぱり一流企業へのあこがれというか、入りたいという気持ちはあると思うんですけど、一流大学以外の方がそんな

ふうに思うのはおかしいって言うんです。自分は一流企業に行くために一生懸命勉強して一流大学に入ったのに、そのとき遊んでいた一流大学へ入れなかった人が、自分と同じ立場になろうと思うなんておかしいのだそうです。

人には、その人に見合った世界があって、その世界の中での上を目指すことはかまわないけど、その上の世界を目指すのはむだな努力だし、自分が下の世界の人と一緒に仕事をするなんて考えたくない、と言っていました。私は、そんなものなの？、と考えてしまったんですけど、どうなのでしょう。（S大社会教育計画、女）

これについてぼくは「そんな馬鹿、あざ笑って内心で唾を吐きかけるか、いっそのこと、いつかは打ち負かすための現在の自己のばねにせよ」とコメントした。これに対し、次のようなレスポンスがあった。

一流大学に入り、天狗になってしまっている人に対して、mitoさんは「ばか」で切り捨ててしまわれましたが、それはいかがなものでしょうか？ 確かにその人の簡単に人を見下す態度はあまり感心できたものではないと思います。しかし、自分の努力の結果に自負を持ち、自尊心を持つのはいいと思いますし、わたしはその努力は認めたいと思います。（T大Ⅱ部社会教育計画、男）

これに対しては、ぼくは、「ぼくたちはいったい何のために学んでいるのか」と題して次のようにコメントした。

例の友人は、持ち前の差別観・被差別観によって、まわりの人びとにこれからも多大な迷惑をかけ続けるだろう。なぜならば、今後の社会が克服しなければならない学校歴偏重の、あるいはヒエラルキー上下競争の価値観の残りかす（とはいっても、いまだ「健在」だが）を温存させる「人類の幸福追求の敵」としての役割を果

たすからである。このような客観的には「不当なこと」（その判断は難しく、継続的な検証が必要になるが）を、「（その個人は）頑張った」という理由だけで許してしまうのでは、わたしたちがせっかく学んできた学問の価値も、すべて白紙に戻ってしまう。

たとえば、差別の問題でいえば、それを不快なこと、不当なことと感じ、社会の差別構造や内なる差別意識を解明したかったからこそ、わたしたちは学問（とりわけ人文系の）を続けてきたのではないか。言い換えれば、差別観の上にあぐらをかき自称「上の世界の人間」が滑稽であることを知り、「ケツと言って笑い飛ばす」思考方法や生きる姿勢を身につけるためにこそ、人間は学問や芸術を積み上げ、また、その蓄積から学ぼうとし続けているのだといえよう。

授業も社会教育でいう集合学習である。そこでは、せっかく時空間を共有するのだから、同時代性のある授業でなければ、集合する意味がないし、学生も教師もおもしろくない。そのためには、上のような問題についても、学生の「偽りのやさしさ」に追従するのではなく、同時代に生きる者が直面している共通の課題を鋭く抉り出して提起する授業が求められている。これは学問や芸術の重要な意義のひとつであろうし、先の生涯学習審議会答申の提唱する「現代的課題の学習」も、そういうことを意味しているのだろう。

『高校生ワーキングプア』を読む（[西村書評](#) NHK スペシャル取材班『高校生ワーキングプアー「見えない貧困」の真実』、新潮社、2018年2月

本書は言う。「7人に1人」の「貧困状態」の高校生にとって、生活費を稼ぐためのダブルワークは当たり前で、毎日兄弟の世話や家事をこなし、「多重債務」を背負う危険もある。そのほとんどは「家族のため」に働いており、決して後ろ向きに生き

ているのではない。そして、最新ファッション（じつは低価格なファストファッション）にスマートフォン（じつはライフライン）が「普通」に見させる点でも、同書は注意を促す。

よく、大人たちから「貧困と言ったって、ちゃんとスマホを持っているじゃないか」などと言われますが、スマホはバイトシフトなどのための生命線です。むしろ、公共Wi-Fiなどの整備を考えるべきでしょう。

『女子高生の裏社会』を読む（[西村書評](#) 仁藤夢乃『女子高生の裏社会―「関係性の貧困」に生きる少女たち』光文社新書、2014年8月）

私は次のように書評を書いた。

筆者は、中学生の頃から「渋谷ギャル」生活を送り、高校を中退後、大学に進学し、女子高校生サポートセンターの代表理事を務めている。そこでは、「居場所のない高校生」や「性的搾取の対象になりやすい女子高生」の問題を社会に発信するとともに「若者と社会をつなぐきっかけの場づくり」事業を展開し、ホームレスや引きこもり支援をする大人の姿を見せて、「かっこいい大人」と出会う体験などにより、少女たちの自立支援を行っている。

筆者は、普通のJK（女子高生）が「JKリフレ」（個室でのマッサージ）や「JKお散歩」（客とのデート）の現場に入り込んできていると述べる。しかし、そこで登場するJKたちの多くは、親からのネグレクト、虐待や、性被害などの成育歴を抱えており、表社会では普通にふるまっても、家族関係等の現代の病理の影響を受けていることがうかがわれる。児童相談所や警察については、親に通報されて元の木阿弥になる経験をしているため敬遠がちであり、セーフティネットとして

の機能が十分発揮しづらくなっている。また、「ルールに従順なタイプ」も登場する。仕事を辞めようと決断しても、1か月前までに申し込む必要があると店長に言われると、それまでは働こうとする。客の性的欲望への対応が苦痛なのは、すべての少女に共通しているが、店長から言われた「女の子が体を売らなくても稼げる仕事をつくってあげたい」という言葉を信じて、その仕事にプライドを持つようとする少女もいる。

「わかってくれる大人がいない」という「関係性の貧困」のなかで、スカウト、店長、オーナーは「居場所づくりのプロ」だと筆者は言う。スカウトは、見た目や性格、所属高校など、個人のタイプやニーズに合わせて、こまめに連絡をし、店につなぐ努力を惜しまない。店長は、少女の話を聞き、励まし、ほめて叱り、居心地の良さを与える。リーダーになりそうな少女については、過ごしやすいルール作りや客の喜ぶオプションを考えさせて、やりがいを持たせる。受験を控えている少女には学習支援を行い、厳しい家の子にはアライバイづくりの協力をし、金銭管理ができない少女には貯金代行サービスも行う。オーナーはときどき来て、「君には期待している」などと声をかけ、少女を喜ばせる。また、日常的には、スカウトを通してフォローし、うまく適応できない少女には他の店を紹介したりする。「お前の夢はなんだ」など、プライドを持たせるワークショップを行っている店もある。このようにして、卒業後も、系列の風俗店で面倒を見るという。

評者は考える。「みんなを」ではなく、「自分だけを」かまっていきたいという若者の関係への志向は、われわれもよく感じるころだ。教育では、これをそのまま受け入れるわけにはいくまい。しかし、少女たちを取り巻く「裏社会」が、このような隙間について少女たちを取り込んでいることは認識する必要がある。店のルール

を守ろうとする少女といい、店に居場所を求める少女といい、人々が支え合う社会に向けて、自己を位置付けることのできる本当の社会的自立を促すわれわれの役割は大きい。それは、生徒の卒業後の充実をも視野に入れたものでなければならぬ。

■青少年教育が目指す恋愛関係

ここで注目すべきは「関係性の貧困」です。社会が若者の存在を認め、若者同士が、あるいは異世代同士が、互いに認め合う関係を創り出すことが、貧困の問題を改善するための大きな契機になるのではないのでしょうか。

私が新卒の頃、前出ディスコフェスティバル実行委員会で経験した一人の若者との出会いを思い出します。われわれ実行委員はクリスマスイブの日、たまたま青年の家の前出賃し切り合宿で、男女各5人くらいずつで青年の家近くのスーパーで買い出しをしていました。その彼は、スーパーで小さなホールのクリスマスケーキを買って持っていました。実行委員が「そのケーキ、いいなあ。どうするの？」と声をかけると、「今夜、一人で食べる」と言います。そこで、誰かが「みんなで食べた方がおいしいよ」と言って(笑)、結局彼も一緒に、青年の家でイブを過ごしました。

当時から、メディアでは、若者はクリスマスはカップルで過ごすと言われてきました。今でも、カップルでクリスマスを迎えるために、懸命になって相手を見つけようとする若者が多いようです。学校以外でも男女がもっと普通に出会える場があるといくと私は思います。

私は「共生社会創造のための公的サービス」として、次のように書いたことがあります(西村美東士「初めての人のための『狛プーとは何か』」全日本社会教育連合会『社会教育』50巻6号、pp.71-75、1995年6月)。

4 共生社会創造のための公的サービス

狛プーは狛江市中央公民館の青年教室事業として、つまり、公式の青年教育の一環として行なわれているものである。そういう場合、主催者側は、公金を支出したり専門職員等を配置したりして参加者を援助する根拠をきちんと示せるようにしなければならない。社会教育活動自体の主人公は住民の側にあり、その自由は最大限に保障されなければならないのだが、社会教育行政の側には、公金を支出してその事業を行なう意味を明らかにする義務がある。

青年教育の場合、青年期特有の課題として、望ましい恋愛や結婚の相手を見つけるということが重視される。そのための援助サービスも、かならずしも一概に「税金の無駄遣い」と非難することはできないだろう。これによって、個人の幸福追求などに資することができるだろうからである。しかし、青年教育が「結婚相談所」やたんなる「お見合いパーティー」の場になってしまっているのかという疑問は残る。個人レベルの問題解決にはとどまらず、社会創造としての意義にまで発展するからこそ、青年教育はほかの民間サービスとは異なる独自の教育的役割を発揮できるのではないか。

狛プーの場合にも、メンバーのあいだに恋愛関係が生まれることがある。しかし、そのとたんに二人は狛プーの活動から遠ざかってしまうなどという、よく見られる「つまらないミーイズム」の現象はまったく起こらない。むしろ、その二人がますます「番外編」の仕掛け人として活発に活動している。二人だけで過ごす時間も大切にすけれども、「癒しのサンマ(時間・空間・仲間の3つの間)」(前掲拙論参照)のなかでの二人の存在も大切にするのである。みんなと過ごす時間も、二人にとってはそれはそれで充実していて楽しいからだろう。ぼくは、これこそ「ミ

「イズムの功績」だと思っている。そもそも、狛プーには若い主婦だって参加している。「主婦業に埋没するのはいやだ。癒しのサンマのなかで、たくさんのいい仲間たちと出会っていききたい」という彼女の願いは、きっとよい妻や、よい主婦業の遂行者としての自己成長という望ましい結果につながるだろう。つまり、それは、会社人間であった男たちの最近の変化としての「自分探し」と同様の意義をもっているのだ。

今日の社会においては、恋愛や結婚は、基本的には二人だけの幸せや不幸せの問題として閉塞してしまいがちである。ところが、狛プーにおいては、二人が仲間のなかで愛を育み、仲間が二人の愛を応援するのである（反面、「恋のさやあて」も起こりうるが、それは仕方ないとぼくは思う）。この「仲間」を「社会」に置き換えて考えてみれば、狛プーの場の提供という公的サービスが、ほかの行政分野では困難な役割を果たしていることが理解されよう（なにも恋愛や結婚に限ったことばかりではないが）。すなわち、ともに生きる社会（共生社会）やコミュニティの創造の一端を担っているといえる。

また、このようにこちよい人間関係を実際にこの現代社会において創り出しているということは、現状否定や告発だけに終始するような受動的な運動とは異なり、競争一辺倒の学校歴偏重社会から、異なる他者をたがいに受容しあってともに生きようとする生涯学習社会に転換するという社会的課題を、実質的に達成していくという提案型の能動的な営みであるといえることができるのだ。

5 いい男、いい女の支援さえすればよい

それにしても、恋愛問題をはじめとして、このように「いい男といい女」が期せずして狛プーに集まっているのはなぜだろうか。その積極的原因としては、狛プーが最初に述べたような「自分の人生をていねいに大切に生きたい」という彼らの心に呼びかけ続けていることと、彼らが「自由への恐怖」を突きつけられるなかで、みずからの内なる差別意識や被害者意識と闘い、たくましく自己成長し続けてきたことがあげられる。そして、本節ではつぎのことをいいたいのだが、消極的原因としては、いい男やいい女ではない人、あるいはそうであろうとして努力する気がまだわいていない人がいるとしたら、そういう人は狛プーから自然に「排除」されていくということなのである。

たとえば、今の世の中の風潮では、「人を傷つけてもいいから、自分の傷を癒したい」という不幸な認識をもっている人たち（「イヤなヤツ」）は残念ながら多いだろう。現実社会では、そういう人が幅をきかせたりしている。たとえば、相手の女性が傷ついてでも、自分のナンパが成功すればよいなどという男性は、たくさんいる。しかし、そういう現代社会の人間関係がいやで狛プーにきている人たちにとっては、狛プーに「イヤなヤツ」が入ってきては困るのである。ただし、狛プーは出入りの自由を原則としている。新規参入も自由なのである。そこで、担当の職員や講師のぼくに、そういう人の排除を頼む人もいる。しかし、その排除行為をぼくらが請け負ってしまったら、狛プーの存在価値はなくなるとぼくは思っている。ネットワークではなく、ファシズムになってしまうからである。

やはり、望ましいのは、「いやだ」と思った人が「あなたの〇〇という行為は、私はいやだ」とさわやかに自己主張することなのだ。その人から電話がかかってくるのがいやだったら、「あなたからの電話はほしくない」ときちんというべきなの

だ。ちゃんとそういうふうには主張できる人も狛プーにはいる。そのことによって、いい男いい女になる気のない人は狛プーから自然に排除されていく。つまり、ここでの排除とは、規制や規則などによってではなく、個々人が内面的に排除することなのである。だから、逆にいえば、狛プーのメンバーがこの世の中でたくましく生き抜いていくためには、「イヤなヤツ」が（単純なナンパ目的などで）少しは入ってくれるのも、「人びとがいがみあう現実社会のなかでどう生きるか」の絶好のトレーニングの機会になるのだ。それに、さわやかな自己主張ができれば、それは基本的信頼を示す行為の一環でもあるのだから、もしかしたら、「イヤなヤツ」にとっては生まれて初めてのいい体験になり、「イヤなヤツ」から「いい男いい女」に自己変容する可能性さえなくはない。人間は無数の変容の可能性をもっているのだから。まあ、どちらにせよ、いい男といい女だけが狛プーに残ると同じ結果になる。

ここで、いい男いい女の定義は、まだしていない。前掲拙論に「家族や学校や職場や社会のコミュニケーションのなかで痛みや悲しみは当然だれにでもあつたろうが、その痛みや悲しみをその人なりに受けとめてきた人」と書いたことがあるが、「人に傷つけられることよりも、人を傷つけてしまうことを心配する人」、「被害者意識に陥らず、さわやかに主張できる人」、あるいは、「いやなときは、潔く撤退して静かに微笑んでいる人」などと定義ができるかもしれない。どの場合でも、もともと弱い存在としての人間が、それほどの徹底したいい男いい女になれるわけがないとも考えられる（人間はだれでも「ろくでなし」であることにはかわりない＝他拙論参照）。だから、実際には、いい男いい女になりたいと思って生きている人たちのことを「いい男いい女」ということになるのかもしれない。

人が偏差値や学校歴などの画一的な物差しで比べられてきた学歴偏重社会に対して、それに代わる生涯学習社会の重要な指標のひとつとして、「人が個性に応じて適正に評価される」ということがある。しかし、それが表面的な評価にすぎなかったり、資格取得などによって他者を打ち負かすことを目的にした非人間的な受験地獄が再現したりするのでは、人間の幸福追求のあり方に沿うものとはいえないであろう。狛プーは、「イヤなヤツ」がおいしい目にあうのではなく、いい男やいい女こそが正当に評価される社会を創り出そうとする営みの一環といえるのである。

社会教育の全国的状況からみても、前節で述べた公的サービスの存在意義を考えると、よっぽどの人的・財的余裕のない限り、いい男いい女になりたいという意思のない「イヤなヤツ」に追従するようなサービスをする必要はないといえる。そんな余裕があるのなら、本来は社会からいい男いい女として評価されてよいはずの一部の青年たちが、現代社会では「癒しのサンマ」を味わうことなく疎外されて生きている現実を、関係者はもっと深刻にとらえて、せめて「何とかしたい」ぐらいには思ってもらいたい。もちろん、実際には、全国の青年教育の場で、いい男いい女が集まってきていると思う。ただ、行政側や担当者が、「公平の原則」を機械的に解釈してしまって、参加者が少ないなどの理由からその事業に消極的になったり、表層的な事業展開をしたりすることによって、そのせつかくのいい男いい女の参加をいかしきれていない結果に陥っていると思うのだ。

私は今でもこのように、青少年教育は「二人だけで過ごす時間も大切にすけれども、仲間のなかでの二人の存在も大切にす」という世界だと考えています。

そして、イブと一緒に過ごす恋人がいないなどという状況は、じつは若者のあいだには普通に存在しているのではないのでしょうか。それなのに「非リア充」などとラベ

リングされ、それがいやで焦って相手を探すなどという現象は、人の目に踊らされた惨めな姿のように思われます。

しかし、実際の世の中では、急に声をかけてくる人についていくと、マルチ商法、新新宗教、政治団体などから洗脳されてしまうのではないかという恐れもあります。その点で、教育委員会などの事業は安心感があるといえます。ただし、「教育委員会だからいや」という若者もいると思いますが・・・。

児童館や公民館で、クリスマスパーティーというと、子ども対象や高齢者の社交ダンス教室ばかり目につきますが、「今の若者がクリスマスなんかにはたくさん来るわけがない」と言って若者対象事業を切り捨てるのは、青少年教育にとって大事な顧客を人数稼ぎのために逃していると言わざるを得ません。

関係性の課題について、私がワークショップの効果測定の際、重視している項目は、「見知らぬ人と出会いたくなる」です。これが向上すれば、大きな効果があったとみることができると思っています。

女子大生に「居場所の条件」を聞いたところ、「知らない人が入っていない」という回答が返ってきました。私はこれを関係性の貧困と考えています。ワークライフバランスにソーシャルを加えようという提案に耳を傾ける必要があるでしょう(西村書評 川島高之『いつまでも会社があると思うなよ!』PHP 研究所、2015年9月)。

「見知らぬ人と出会うことの楽しさ」、これが生涯学習や青少年教育、青少年団体の大きな魅力の一つと考えます。

前回の振り返り(出席ペーパーより)

出席ペーパー

授業に関係ないことですが、先生に聞いてみたいことがあります。私は小学校の担任の先生に「大学は人生の夏休みだ」と聞いて、それを楽しみに受験や定期テストを耐え抜いてきました。でも実際入ってみたら、課題に追われてばかりで、少しも夏休みらしいことができていません。先生が学生の時はそうだったのでしょうか。それとも、「夏休み」の意味が私の考えるものとは違うのでしょうか。先生の意見が聞きたいです。

私は、大学での学修は、基本的に「自己決定」であるべきだと考えます。しかし、授業に出席する理由を学生に聞くと、あたかも当然のことにように「単位をとるためでしょ」と言います。他者が決めた履修コースのとおり出席する。出席するのは自己決定だと言うかもしれませんが、私の主張したい「自己決定の学修」とは、「学びたい科目を組み合わせる履修する」という意味です。

しかし、授業時間は(講義2単位の場合)、「1単位15時間の授業時間×2単位=30時間(授業時間)」を基礎とします。1単位は45時間の学修(時間)とされていますので、2単位ということは90時間の学修時間が必要になります。そこで、90時間-30時間=60時間は、授業時間以外での学習の時間となるわけです。これは15回の授業の2単位の講義だと、各回の授業に2時間の事前学習と2時間の事後学習が必要ということになります。

私たち教員も、この枠に縛られています。1コマの授業に対して、2時間の事前学習と2時間の事後学習の課題を設定するよう指示されています。1日3コマ履修する

学生は、その日、12時間学習することになります。夕方6時から始めて、翌朝6時までです。

こんな決まりをまともに信じている学生も教員もいないでしょう。しかし、ルールは知っておいた上で、破る必要があります。これが自己決定のコツです。

大学にこのような窮屈な決まりが広がってきて、自己決定の範囲が狭められてきた原因には、「大学の大衆化」があると思います。エリートには自由を認めるが、大衆は管理しておいたほうが良いということなのでしょう。マーチン・トロウ, M. A.

(Martin A. Trow, M. A.) による議論では、「大学の大衆化」の過程は「エリート段階」から「マス段階」、さらには「ユニバーサル段階」へと展開するといわれています。

しかし、私は、学生に自己決定力を身につけさせることによって、新たなエリート教育(「旗を振る人」も「旗を振る人を支える人」も)ができると考えています。たとえば、トロウは、「学生食堂での教授を交えた少人数のフリートーク」などに、「エリート段階」の大学の残滓が見えると言っています。

私が学生時代、もっとも積極的に授業に参加したのは、「自主ゼミ」です。学生仲間を集め、気に入っている先生に指導をお願いしますが、単位にはなりません。先生も「光栄だが、私の授業実績にはカウントされないことを理解しておいてほしい」と言っていました。しかし、この「自主ゼミ」の時間こそが、大学での学修において、卒論の次にもっとも「学生らしい」充実した時間になりました。ひところはやった「もぐり学生」というのも、よいかもしれませぬ。そのほか、先生は嫌がるかもしれませんが、先生のご自宅にみんなで押しかけて、おしゃべりしてくるのもお勧めです。その先生の生活や仕事への「構え」を感じ取ることができます。

ここで、質の高い教育を、無料で、世界中のすべての人にネットで提供する「カーンアカデミー」を創設したサルマンカーンの著を引いておきたい（西村書評 サルマンカーン『世界はひとつの教室－「学び×テクノロジー」が起こすイノベーション』三木俊哉 訳、ダイヤモンド社、2013年5月）。

筆者カーン氏の創設した「カーンアカデミー」は、「質の高い教育を、無料で、世界中のすべての人に提供」しようとする。サイトには、数学、科学、経済、ファイナンス、歴史、美術などのレッスンビデオが四千本以上並ぶ。

カーン氏は、「ほどほどの知識がある、聞き分けがよくて標準的な市民、労働者をつくりだす」プロイセン型モデルの学校に対して、「家では講義、学校では宿題」という「反転」モデルを提示する。個人のペースに合わせて、100%理解してから次の単元に進む。落ちこぼれはない。

MITに入学したカーン氏は、まわりのみんなの頭の良さにおじけづく。しかし、「途方もない時間の無駄」である大教室の講義を受動的に学ぶ学生を見て、そういう授業をサボり、本当に役立つ授業を受けるなどの「能動的学習」をすることによって、結局、彼らの2倍近い講座を取得することができたという。

われわれは、ユーチューブで検索して、「カーンアカデミー」の内容をつかんでおく必要がある。しかし、それ以上に、カーン氏の学校教育への問題提起を真摯に受け止めるべきである。カーン氏は、生徒の時に「テストを受けて次に進みたい」と学校側に申し出たところ、「そんなことを認めたら、全員に認めなきゃいけません」と拒否されたのである。学校側の事情はよくわかる。だが、同時に、個人の状況に合わせて学習を支援しなければならないことを忘れてはならない。

過去の遠隔教育は、カーン氏が批判するような受動的な一方向授業の象徴であった。しかし、ネットのもつ自己選択性、進度自由性、双方向性は、これを逆転させようとしている。

次に成績の付け方についてお話しします。各科目の成績は「勤勉度」ではなく、設定された「教育目標」の到達度で決定しなければならないことになっています。これが表の話です。過去には、フランス文学の授業にまったく出席しなかった学生が、試験で満点をとって、Sと評価され、フランス文学者になったという話がありました。裏の話は、差し障りがありますので、授業で口頭で話します。

最近でも、この原則は生きているのですが、規定出席数(これも解せない話ですが)には足りていても、ぎりぎりの学生には悪い評価をつけたがる教員がいるようです。このように、評価の決まりはあっても「表と裏」があるようです。

私は、「盲目の恋でずっと欠席してたけれど、これから一生懸命勉強するので単位ください」と先生にお願いする「お願いトレーニング」を授業でやっていたことがあります。しかし、「盲目の恋なんかしない」という学生が増えてきて、このテーマはやめました。規定のルールの上をきちんと進むということのようです。

他方で、出席ペーパーの学生が言う「夏休み」への憧れをもつ学生は、今でも多いと思います。老荘思想では「無為自然」(知や欲をはたらかせずに、自然に生きることを)を良しとしています。河合隼雄は、3年寝太郎や吉本ばななの話から、「ちゃんと寝ていたから、ちゃんと目覚めることができた」と言っています。

東京都青少年問題協議会は、次のように自由時間の重要性を訴えています。

東京都青少年問題協議会意見具申「青少年が主体的、創造的に生きる21世紀を」(1994年3月)([青少年問題に関する文献データベース](#)で検索)は、「自由時間

の中での成長」というサブテーマにおいて、学校に代表される計画され、整えられ、課題の用意された時間（課題のある時間）の中での成長のほかに、遊びに代表される自由な時間の中でのもうひとつの成長を重視し、「自由時間」の中での今日の青少年の成長の機会が欠けていたのではないかとする視点を提出している。

この視点に立ち、たとえば部活動については、「余暇教育的な『エンジョイする部活動』への方向転換をする時期が来ている。また指導者は、外部から招聘する方式を原則とすべきであろう」とイメージチェンジを提唱している。さらには、国民的な余暇活動の推進、学校での「自由時間」をもっと楽しく、「アフター3」の楽しみ、子どもの生活圏の整備、家庭基盤の充実のために、余暇と自由時間を支えるシステム作りなど、全般にわたって思い切った施策の転換を提言している。

たとえば、「アフター3」の楽しみの項では、デートは若い世代の楽しみばかりでなく、異性間の相互理解の機会であり、青年の成長と社会化のために意味をもつとして、学校教育や社会教育に対して「デートに関する教育」や相談の機会の必要性を提起している。

しかし、このような「惰眠」や「自由時間」をエンジョイする余裕は、現代青少年にあるのでしょうか。無理に、「惰眠」や「自由時間」を強制するのもおかしな話でしょう。森田正馬は『神経質問答』において、「私は集中して勉強しなければならない」と思い込んで悩む「神経質な人」に対して、自分は集中し続けられるなんて「虫がいい」考えだと諭します。森田の臨床心理学では、「気になることは気にすればよい」と説いています。そうしていれば「流転」が生じて自然に解消するというのです。

([西村美東士「自分のストレスを主観的にしゃべろう」](#) 全国公民館連合会『月刊公民館』519号、pp41-42、2000年8月)。

次に「余暇活動」の意義について、北田暁大の著を引いて考えてみたいと思います

([西村書評](#) 北田暁大編『社会にとって趣味とはなにかー文化社会学の方法規準』、河出書房新社、2017年3月)。

北田氏は、腐女子（BL-男性同性愛の漫画や小説を好む女性）をフェミニズムの表れにとらえ、「きわめて洗練された形で、それぞれの方法で男性中心主義的な世界観に異議を申し立てている」とする。そして、「アニメもBLもどうでもいい」という考えに対して、政治的連帯・社会的な関係性構築の資源の存在から目を背けることになるという危険性を指摘する。

評者は考える。オタク、サブカルなどの趣味が、他者との差別化だけでなく、逆に紐帯としても機能していることは事実であろう。実際、クラブ通いの友人を得た地方出身の若者の東京定着率が高いなどの効果が他の調査で明らかにされている。だが、階級的な差別化とは異なる独自の自己の確立という「個人化」と、それに加えての「異質な他者との交流と共有」という「社会化」こそ、教育が追求すべき価値といえよう。そのとき、オタク、サブカルを含めた生徒たちの趣味に注目し、干渉することなく、機会をとらえて望ましい個人化と社会化の契機になるよう働きかけることが、教師にとって重要といえよう。

これらの流れに真正面から杭を打つのが「1億総活躍」の施策といえるでしょう。

厚生労働省HP 特集1 一億総活躍社会の実現に向けて より

2015（平成27）年9月、安倍内閣総理大臣は少子高齢化という構造的な問題に真正面から取り組んでいくとの姿勢を表明し、一億総活躍社会の実現を目標に掲

げた。一億総活躍社会は、女性も男性も、お年寄りも若者も、一度失敗を経験した方も、障害や難病のある方も、家庭で、職場で、地域で、あらゆる場で、誰もが活躍できる、いわば全員参加型の社会である。

生涯学習の視点から言えば、「職業生涯」を大切にすることは必要だが、「生涯職業」という言葉には、私は疑問を感じる。

ここで、泉谷閑示の『仕事なんか生きがいにするな』を引用しておきたい(西村書評 泉谷閑示『仕事なんか生きがいにするな—生きる意味を再び考える』幻冬舎新書、2017年1月)。

氏は、「生きる意味」を問うことなんて無駄なことだというシニカルな言説によって、「実存的な苦悩」を抱いている人たちは、ますます困惑させられていると言う。氏は、「実存的な苦悩」から抜け出て「生きる意味」をつかむことに成功したクライアントの姿を数多く目撃してきた立場から、諦めない限りにおいて、「実存的な問い」には必ずや出口があるものなので、このようなニヒリスティック（虚無的）な言説に惑わされてはならないと訴える。

社会的成功や世間的常識などにとらわれず、俯瞰的にこの世の趨勢や人々の在りようを眺めることができた時、人には必ずや「実存的な問い」が立ち現れてくる。この問いに苦悩することは、他の生き物にはない「人間ならではの」行為であり、そこにこそ、人間らしい精神の働きが現れているというのだ。

また、青年期の危機は、人が社会的存となっていこうとする出発点での様々な苦悩、つまり、職業選択や家庭を持つことなど「社会的自己実現」の悩みを指すものだが、中年期の危機の方は、ある程度社会的存在としての役割を果たし、人生の後半に移りゆく地点で湧き上がってくる静かで深い問い、すなわ

ち、「私は果たして私らしく生きてきたらうか？」といった、社会的存在を超えた一個の人間存在としての「実存的な問い」に向き合う苦悩のことだと言う。青年期には重要に思えた「社会的」とか「自己」といったものが、必ずしも真の幸せにはつながらない「執着」の一種に過ぎなかったことを知り、一人の人間として「生きる意味」を問い始めるとし、また、今や青年期においても、そのような「実存的問い」が見られると言う。

氏は、イソップ物語のアリとキリギリスの例を示す。わが国では、サブカルチャーにおいては世界をリードする勢いを持っているが、カルチャーそのものについては十分ではないとし、キリギリスのように、憧れるに耐える文化を生み出すことが、現代の虚無に押し潰されないために求められていると言う。

評者は考える。泉谷氏の言うような文化を求める子どもたちは、少ないだろう。多くの子どもたちはサブカルに走り、教師もそれに対応しなければならない。文化は押しつけでは育たないからだ。しかし、個に応じた指導を考えるならば、生きにくさを感じながらも「実存的問い」や文化を追い求めるタイプの子どもたちに対しても、イソップ物語のアリのような「未来」だけでなく、キリギリスのような「今」の充実のための支援を検討する必要がある。

さて、自己決定の活動には、実際にはいろいろな迷いが生ずると私は思います。ある学生が、小さい頃からやってきた地域活動が「義務的」で「しがらみ」のように感じられるようになったと言いました。私は、次の書評を紹介したところ、「胸にすんと落ちた」と感想を述べてくれました([西村書評](#) 村尾泰弘『家裁調査官は見た—家族のしがらみ』、新潮新書、2016年7月)。

暴力とともに嘘をつく子の問題がよく取りざたされる。嘘をつく子の多くは、言葉そのものに信頼を置いていない。こういう子どもたちの大半は、親から言葉によって守られてこなかった子どもたちだ。日常的に、親や周囲が約束を破ったり、嘘をついたりしてきたのだろう。だから、平気で嘘をつく。他者に嘘をつくだけではない。自分自身にも嘘をついているのだ。このような子どもへの対応でも言葉を重視し、「言葉で守ってやる」ことが重要である。言葉で欺かないこと。言葉でねぎらい、言葉でほめ、言葉で一緒に考えていくことだ。大事なことは、家庭内の良好な言語コミュニケーションを活性化させることだという。

しがらみという言葉は、通常、まとわりつくものというネガティブな意味で使われるが、元来、「しがらみ」は、川の勢いをゆるめて我々の生活を守るものだった。その意味で、家族はまさに本来の意味でのしがらみでなければならない。今まで見たくないと思っていた自分自身や家族と向かい合う勇気を持とうと氏は訴える。

家族だけでなく、友人関係や大学生活の中でも、「しがらみ」はたくさんあるでしょう。そのとき、しがらみから抜け出して自由になるのも一つの方法ですが、しがらみを受け入れて生きていくのも一つの方法であり、自己決定と考えてよいのかもしれない。

「大学は夏休み」という言葉には、さまざまな意味が含まれていると私は考えます。ただ、そのような意味が、すべて葬り去られ、がんじがらめの決まりや制度が大学から自己決定の余裕を奪っている現状においては、個人は強い意思を持って、そして楽しく、自己決定の学修への展望をもつ必要があると思います。

第 10 回

⑤ 日本の衰退＝日本の衰退に教育はどう立ち向かうか

政権が経済政策はうまく進んでいると主張するのは世の常のようですが、前回取り上げた貧困・格差の問題など、日本経済はかなり衰退しつつあります。英国は衰退していますが、「文化」を守り、「粘り強く持続」しています。しかし、日本は、そのような「文化」や「持続」ができるのでしょうか。次のような本を読むと、旧態依然とした枠組みを破ろうとしない政治や教育が心配になってきます([西村書評](#) 佐藤学『第四次産業革命と教育の未来－ポストコロナ時代の ICT 教育』)。

ここで、私の書評を紹介します。

その前に本書のタイトルにもある第 4 次産業革命について内閣府の説明を紹介しておきます([「第 4 次産業革命のインパクト」](#))。

第 4 次産業革命とは、18 世紀末以降の水力や蒸気機関による工場の機械化である第 1 次産業革命、20 世紀初頭の分業に基づく電力を用いた大量生産である第 2 次産業革命、1970 年代初頭からの電子工学や情報技術を用いた一層のオートメーション化である第 3 次産業革命に続く、次のようないくつかのコアとなる技術革新を指す。

一つ目は IoT 及びビッグデータである。工場の機械の稼働状況から、交通、気象、個人の健康状況まで様々な情報がデータ化され、それらをネットワークでつなげてまとめ、これを解析・利用することで、新たな付加価値が生まれている。

二つ目は AI である。人間がコンピューターに対してあらかじめ分析上注目すべき要素を全て与えなくとも、コンピューター自らが学習し、一定の判断を行うことが可能となっている。加えて、従来のロボット技術も、更に複雑な作業が可能とな

っているほか、3Dプリンターの発展により、省スペースで複雑な工作物の製造も可能となっている。

こうした技術革新により、①大量生産・画一的サービス提供から個々にカスタマイズされた生産・サービスの提供、②既に存在している資源・資産の効率的な活用、③AIやロボットによる、従来人間によって行われていた労働の補助・代替などが可能となる。企業などの生産者側からみれば、これまでの財・サービスの生産・提供の在り方が大きく変化し、生産の効率性が飛躍的に向上する可能性があるほか、消費者側からみれば、既存の財・サービスを今までよりも低価格で好きな時に適量購入できるだけでなく、潜在的に欲していた新しい財・サービスをも享受できることが期待される。

ところが、佐藤は、日本はこのような第4次産業革命への対応ができておらず、第二次産業革命の時代の産業と教育に固執してきたと言います。

AIの到来による本当の危機について、新井紀子は次のように言う(西村書評 新井紀子『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』、東洋経済新報社、2018年2月)。

AI楽観論者は、人間とAIが補完し合い共存するシナリオを描く。しかし、東ロボくんの実験と同時に行なわれた全国2万5000人を対象にした読解力調査では恐るべき実態が判明する。AIの限界が示される一方で、これからの危機はむしろ人間側の教育にあることが示され、その行く着く先は最悪の恐慌だという。

それでは、佐藤の書に戻しましょう。

本書は、新型コロナ・パンデミック、第四次産業革命、グローバルゼーションのもとでの、世界と日本の社会と教育の変化、第四次産業革命が公教育に及ぼしている影響、これに対応した教育と学びのあり方について論ずる。著者は、第四次産業

革命は教育のICT化を推進しているだけではなく、グローバル化を背景として教育市場の急成長を生み出し、教育を「ビッグビジネス」に変貌させて、公教育の危機を生み出しており、しかも、ICT教育を中心とする教育市場の膨張とビッグビジネス化は、新型コロナ・パンデミックによって加速していると言う。

「世界時価総額」の一九八八年のランキングでは金融業と自動車産業が占め、トップ30社のうち21社が日本企業だったが、現在は、ほとんどがIT企業に置き換わり、日本は30年間、**第二次産業革命の時代の産業と教育に固執**することによって、グローバル化に対応できず、21世紀型の産業と経済と教育への転換を怠ってきた結果、トップ48位にトヨタが一家あるのみで、GDP成長率は世界最低に落ち込んでいるとしている。**GDP世界第三位の位置は確保しているが、経済の勢い（GDP成長率）では世界最低に落ち込んでいる**と言うのだ。

経済産業省の提唱する「未来の教室」のICT教育については、従来の文部科学省（公教育）と経済産業省（教育産業）と産業界（IT産業）の間の壁を取り払い「経済産業省と文部科学省の協力」によって推進されるICT教育が**「未来の教室」**であり**「GIGAスクール構想」**であると言う。「個別最適化」については、かつての「プログラム学習」や「完全習得学習」における「学習の個別化」とさほど違いがないように見えるが、個々人の学習歴に関するビッグデータとAIの技術によって、一人ひとりに最適の教育プログラムの提供が理論的には可能であり、そのメリットによって海外のICT企業と教育企業は学校教育に進出しているが、その技術的に洗練されたICT教育と比べれば、経済産業省が推進している「未来の教室」は、20年前の「過去の教室」のIT教育に見えてしまうと批判している。

同時に、第四次産業革命に対応できる「21世紀型の学び」は、「個別最適化」

の学びではないとして、その方式では教育効果が乏しいことがわかったため、近年は多くのICT教育のプログラムが「協同学習」と「個別最適化」を組み合わせ実施していると指摘している。そして「未来の教室」の「学習の自立化・個別最適化」は、海外諸国のようなビッグデータとそのAI制御を伴っていない点で、50年前の「プログラム学習」や「完全習得学習」と類似した「学習の個別化」の域を出ておらず、協同学習とのつながりを失っている点から言っても、15年前のICT教育のレベルを超えていないものだと指摘する。

一方で、著者はICT教育の効果について、OECDのPISA2012のビッグデータを活用した分析結果（2015年）を引き、読解リテラシーにおいても数学リテラシーにおいても、学校でコンピュータの活用時間が長時間になると、学力は低くなることを示しているとして、ICT教育による学びは、一般に期待されているような効果をもたらしていないと指摘している。これについて、OECDが進めているPISA (Programme for International Student Assessment) 調査委員会は、コンピュータは情報や知識の獲得や浅い理解には有効だが、深い思考や探究的な学びには有効ではないという解釈で答えているとして、批判的思考や探究的思考による学びは、顔と顔をつきあわせて行う協同的学びが最も有効だと主張している。

著者は言う。周知のように日本の財政赤字は世界一多額になっている。福島原発事故による経済的損失は今後も延々と続き、膨大な負担になって次世代にのしかかっている。第三次産業革命に失敗したため産業構造の改革は著しく遅れ、未来投資としての教育への公的支出を怠ってきたため、科学研究と学術研究は停滞し、大学進学率も30年前は世界第二位だったが、2020年現在は46位まで転落している。この30年間の政府の外交、経済、社会、文化、教育政策の失敗が日本の経済

と社会と文化と教育の転落を招き、転落し続けるアリ地獄から脱出する道が見いだせない状況だと言う。そこに新型コロナ・パンデミックが起こり、第三次産業革命（デジタル革命）が未達成の状況で第四次産業革命が加速し進行していると言うのだ。

著者は、「もはや国家や資本に依存して仕事と暮らしと文化と教育の将来を展望する思考は捨て去った方がいいのかもしれませんが。自分たちで地域を中心に経済と社会と文化を創造し、学校を中心に子どもたちの未来と地域社会の未来を創出する、その発想に立った改革の展望を拓くべきでしょう」と述べている。そして、この新しい段階において教育の公共性を擁護するためには、公共性の哲学と民主主義の哲学にもとづいて学校を共同体と市場のセクターで維持し発展させる仕組みを創出する必要があるとして、**市町村教育委員会と学校が自律性を確立し、地域共同体の文化と教育のセンターとして学校を再定位し、教育委員会と学校の自律性によって教育企業やIT企業とも連携した教育の公共圏を創出することが求められており、その新たな実験を各地域、各学校で始める必要があると言う。資源と資本をシェアし、一人も置き去りにしないでケアし合い、さまざまな問題を解決して未来の希望を啓くために学び合う社会の建設なしには、資本とテクノロジーの暴走をくい止めることはできないとし、「学びのリノベーション」も、この「新しい社会」の建設を担い推進する子どもたちを育てることにあると言ってよいとしている。**

評者は考える。これまでのわが国の教育は、つい最近まで、ポップカルチャーやパソコンなどに傾注する子どもたちの変革力を評価できないまま、過去の価値を押しつけてきた。今後は、これを転換して多様性を確保するとともに、**ICTと「深い学び」によって社会に開かれた新しい価値の創造を期待したい。**

過去の大英帝国が没落したのちも、英国国民が文化を守り、むしろ幸福に暮らしているように(移民問題、4カ国間の紛争などの問題はありますが)、日本の衰退後も、国民が充実して暮らせるようにするためには、現在の第4次産業革命に対して、国民と、それを支援する教育はどのように立ち向かえば良いのでしょうか。

このことこそ、わが国の社会的課題の一つとすべきでしょう。

第11回

⑥ ワーク・ライフ・ソーシャル＝社会化と個人化の連続体としての若者のQOL

ワークライフバランスで主に叫ばれているのは、仕事と家庭の両立です。しかし、若者のQOL (Quality of Life : 生活や人生の質)の向上を考えた場合、私は個人完結型から社会開放型への転換を軸として、職業人・家庭人として以外の社会人としての充実を重視する必要があると思います。

ここでは、三井物産ロジスティクス・パートナーズ株式会社代表取締役の著者による、ワーク・ライフ・ソーシャルバランスの提唱について、次の私の書評を紹介したいと思います(西村書評 川島高之『いつまでも会社があると思うなよ』)。

他者との対立や私生活への犠牲を避けようとする今の若者を、流動化社会の中でどう育てるか。川島氏は、社員を育てる「イクボス」が必要だと言う。それは、部下の私生活に配慮しながら、業績目標を達成させるという「新しい管理職像」である。その要件は「部下の私生活とキャリアを応援している」「自らも仕事と私生活を両立させている」「業績目標の達成に強くコミットしている」の3つである。氏は、仕事(ワーク)と共に、私生活(ライフ)と社会活動(ソーシャル)という「3本柱の生活」が人生を強く豊かなものにしてくれると言う。

氏が代表を務めるNPOゴチカラ・ニッポンにおいては、苦手や弱点ではなく、得意なことに注目する。そして、社会で役に立つ経験を与えて「貢献心」を育むことによって、子どもの自主性と社会性を育てようとしている。

評者は考える。若者の帰属意識の不足などを批判するだけでは、教育は始まらない。仕事だけでなく、私生活、社会活動のそれぞれの場で、幸せな生涯を送るための基礎・基本を、個人差に応じて身につけさせることこそ、生涯学習時代の学校教

育の役割といえよう。

より詳しく見てみよう。

氏は、経済成長期の「オヤジ」が、「圧倒的な権力」を背景とした理不尽な命令や支配に対するストレスで、家庭を暗くさせたとし、若者に、結果志向で「柳に風」のしたたかさでやっていこうと言う。

ただし、生産性重視は譲らない。時間泥棒トップ3として、資料作成、メール、会議を挙げ、たとえば会議については、ゴール決め、資料の事前配布、人数絞りの3つで時間は8分の1になると言う。ただし、その生産性とは、アウトプット÷インプットであることから、分母である時間の削減幅以上に、分子である成果を収縮させないよう警告する。

氏は、怒鳴り続ける少年野球のコーチを例に上げて批判し、代表を務めるNPOゴチカラ・ニッポンの方針を示す。それは、部下や子どもを自主性を育てるためには、苦手や弱点ではなく、得意に注目すること、社会で役に立つ経験を与えて「貢献心」を育むことなどである。そのうえで、残業している社員より成果を出すことを若手社員に求めるのだ。

氏は「三本柱の生き方」によって、次の仕事能力が身に付くと言う。人脈が広がる／視野が広がる／多様性が身に付く。頭の中で、仕事とは別の視点との化学反応を起こせる。コミュニケーション力が高まる。組織運営力が高まる。自分の素の実力、強み・弱みがわかる。プロジェクトマネジメントなど、OJTトレーニングの場を得られる。

職業への価値観の多様化と自己客観視

価値観ゲーム (職業)

価値観ゲーム ネットワークの担い手になるためには、他者が異なる多様な価値観をもっていることに気づき、認め、さらには面白がる態度が必要である。坂口順治は『実践・教育訓練ゲーム』（日本生産性本部）でつぎのような価値観ゲームを紹介している。①価値の序列づくり＝健康、愛、富、奉仕、自己実現、正義。②一対比較法＝地位、時間、収入、評価、保障、人間関係、仕事。③同（結婚相手）＝容姿、人柄、資産、愛情、将来性、健康、経歴。一対比較法とは、すべての組み合わせを一対一で比較して集計して順序づける手法である。③で短大女子のほとんどが容姿を最下位（第7位）としたので意外だったが、まれに上位とする女性もあり、その理由を聞くと実際にはうなずいてしまう。どちらにも共感はできるのである。このように異なる価値観を相互受容する体験によって共生能力が培われる。

ここでは、価値観ゲームを活用して、職業に関する自分の価値観を客観的に把握してみましよう。

「教材」からエクセル版をダウンロードできます

		地位	時間	収入	評価	保障	人間 関係	仕事 内容	得点	順位
	地位								=	
	時間								=	
	収入								=	
	評価								=	
	保障								=	
	人間 関係								=	
	仕事 内容								=	

前回の価値観ゲームについて

前回の「職業に関する自分の価値観」について、価値観ゲームをやらないまま提出した学生が多いように感じました。迷ったところはないと言う回答がいくつかありました。もしそうなら、「葛藤のない人生」ということになりませんが、一対比較法で迷う組み合わせがなかったというはずはないのではないかと、それは一対比較法という科学的手法による優先順位の検討をしなかったからではないかと思えます。今後の人生で自己決定を要する場面において、頭がぐるぐる回りになって悩むことがあると思えます。そんなとき、今回の価値観ゲームの手法を思い出してもらって、自己のプライオリティの把握に役立たせていただければと思います。

なお、異なる二つの価値を両立させる方法として、私は「幕の内弁当方式」という

のを考案したことがあります。また、恋愛対象の決定において、なぜ地球上のすべての相手と面接もしないで、「この人は世界一」とか「世界に一人しかいない」と言えるのでしょうか。これについては「二人だけのメモリ」というレトリックを考案しました。これらを授業で説明いたします。参考にさせていただければと思います。

価値観ゲームを行い、他の学生から「〇〇は〇〇に勝っていますか？ それはなぜですか」という（思わぬ組み合わせでの）質問を受け、回答した結果、「自己の水面下への気づき」（自己洞察、自己客観視）が深まります。とくに、順位としては負けているのに、その組み合わせでは勝っているという場合は大ヒットです。その「理由＝判断基準」を答えたときに、気づきが深まるのです。

このような気づきの成果例を一つ、お示しします。

私の職業に関する価値観(自己分析)価値観ゲームの結果：①仕事内容 ②人間関係 ③保障 ④評価の順に高く、⑤収入・⑥時間・⑦地位の順で、⑤～⑦は差異はあるが、どれも同じラインの優先度

- ・仕事に関しては、現場で働いていたいという気持ちが強く、加えて仕事内容に誇りを持って仕事したいという思いが強い
- ・ワークとライフのバランスをというよりは、あまり分けて考えずに仕事とライフを融合させたい（仕事とライフの切り替えはする、でも完全に分けて考えられない→仕事からも、ライフからも得るものがある）
- ・価値観ゲームの結果からは、評価よりも保証が優先されたことに少し驚いた
- ・時間については、リフレッシュする時間は欲しいが、まずは仕事に懸命になってみたいという思いがある。

- ・働くなれば、自分を高め、成長できてなおかつ自信を持って働くことのできる環境や仕事内容が良い
- ・人間関係は、仕事をする上でならば少し冷たかったりドライであったりしても我慢できる
- ・自分の感情などをコントロールして、仕事はきちりやりたい
- ・周りの人と協力したい
- ・人と関わる仕事がしたい

これこそが、「個別最適化された学び」というべきではないでしょうか。

4 集団・組織のなかで生きる

第12回 一人で生きる、価値観の異なる仲間と生きる、その支援

前衛書道家篠田桃紅は「自由と個性を尊重するから孤独であり、コミュニケーションが大切」と言う。彼女の孤立ではなく、人と交わらないのでもなく、「混じらない」「よりかからない」シングルライフに徹するという言葉は、個人化社会において社会的にも充実して生きていくために、根源的な示唆を与えてくれる。ここで、私の書評を引いておきたい(西村書評 篠田桃紅『一〇三歳になってわかったこと～人生は一人でも面白い』、幻冬舎、2015年4月)。

30年以上前、外山滋比古は、激務の校長が退職後、些細なことで命を落とす事例などを挙げ、「フィナーレの発想によるライフワーク論」を勧めた。篠田氏は、さらに積極的に現代の高齢期を生きる指針を示している。人生の楽しみは無尽蔵、行きたいところがあったら行く。それは、個人化社会において「自由に生きる」という指針であり、教育の社会化重視の価値観と一線を画している。

篠田氏は、生涯一人身で、美術家団体にも属さず、墨を用いた抽象表現主義者として活躍している。非婚や無所属の自由といえるだろう。人という漢字は「人が互いに支え合っている」意味だと言われるが、古来の甲骨文字では、一人で立ち、両手を前に出して、何かを始めようとしたり、人に手を差し出して助けようとしたりしているのではないかと彼女は言う。

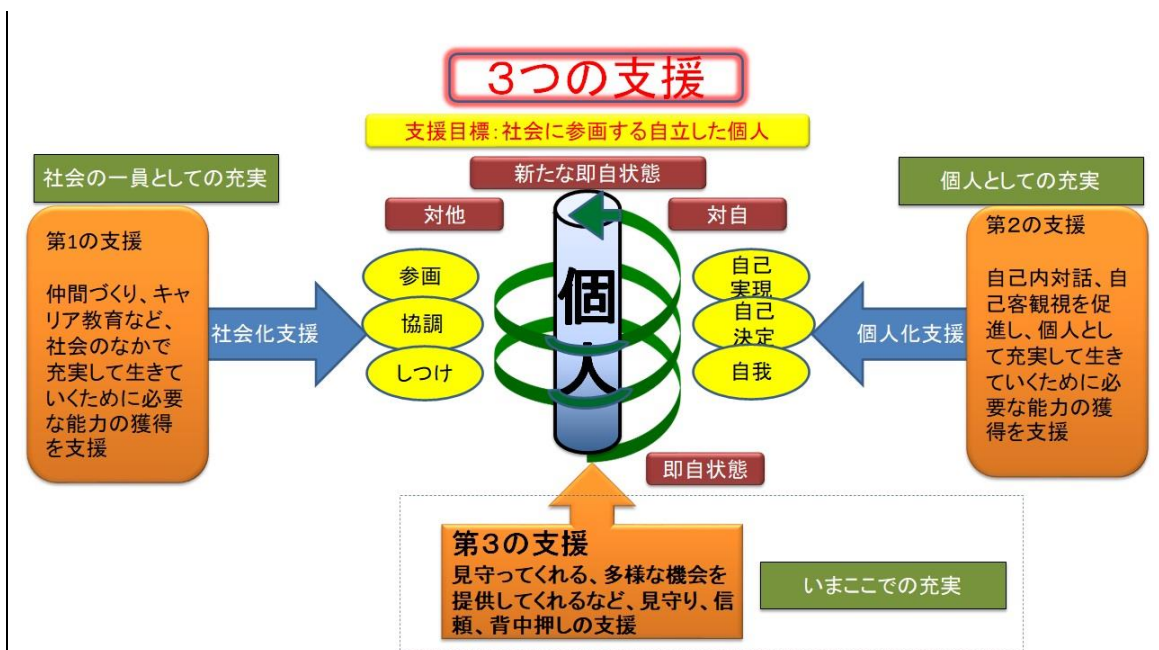
歳をとると、過去を見る目に変化が生まれ、未来を見る目は少なくなり、肯定、否定の両面が生じ、あきらめと悟りが生ずる。彼女は、これを、高いところから自分を俯瞰する感覚だと言う。今の「悟り世代」といわれる若者の感覚と通じるものがありそうだが、若者の「悟り」に欠けているものを彼女から学ぶ必要があるだろう。

「結構」という言葉は、良いという意味といらぬという意味が同居している。彼女は、これを、余白を残し、臨機応変に加えたり減らしたりすることのできる「いい加減」という言葉と同様の日本文化の良さだと評価する。教育においても、アメリカ製の「自己主張訓練」ばかりではいけないのかもしれない。

そのほか、常識に生きなかつたから長生きできた、常識に頼らずに自分の目で見ると、人生を歳で決めたことはない、規則正しい毎日から自分を解放する、などの含蓄に富む言葉があふれている。とりわけ、「自由と個性を尊重するから孤独であり、コミュニケーションが大切」、孤立ではなく、人と交わらないのでもなく、「混じらない」「よりかからない」シングルライフに徹するという言葉は、個人化社会において社会的にも充実して生きていくために、根源的な示唆を与えてくれる。

居場所において、青少年教育指導者はどのような点に留意すれば良いのか。私は、次のように「第三の支援」を提起した([西村美東士「若者の居場所に求められる第3の支援」](#)、日本精神衛生学会『日本精神衛生学会第36回大会抄録集』、p. 41、2020年11月)。

精神衛生学が提起する「教育に対する忌避」については、「対処療法」を批判する積極的意義を持ちつつ、結局は社会化だけでなく、個人化としての能力獲得の支援のあり方も避けた議論に陥っている。これに対して、発表者は将来よりも「いま」を重視する「第3の支援」を対峙させたい。これは、カウンセリングの全人的理解につながるものであり、社会化と個人化の両者を同時に促進する支援として推奨すべきものと考えられる。



日本精神衛生学会第36回大会発表への質問への回答

回答1 「社会化と個人化の同時支援の具体的内容」について

本発表では、「社会化と個人化の両者を同時に促進する支援」と述べましたが、正しくは「社会化と個人化の一体的支援」と表記した方が良かったと考えています。

社会化支援の具体的な内容は、仲間づくり、キャリア教育など、社会のなかで充実して生きていくために必要な能力の獲得を支援するものです。個人化支援の具体的な内容は、読書指導、日記、テーマに対する論述などを通じて、自己内対話、自己客観視を促進し、個人として充実して生きていくために必要な能力の獲得を支援するものと考えます。

今日における若者支援の方法上の問題として、例えば、不登校の子どもが「学校に行けるようになる」という社会化の成果にばかり目を奪われて、個人化の過程を支援者が手がけない点にあると考えます。このように、社会化支援と個人化支援は、支援者が「連続的観察」による全人的理解によって、両者の一体的支援に努める必要があ

ることを重視すべきと考えます。

回答2 「第3の支援の具体的説明」について

いくつかの場面を例に、「第3の支援」について具体的に説明いたします。

社会教育の場では、「仲間になじめない」、「団体活動で協調行動ができない」などの青少年に対して、支援者が直接的に集団に適応させようとする、本人は次からは来なくなる危険性があります。支援者は本人自らが動き出すのを待ち、そのときにこそ「肩を押してあげる」などの支援をする必要があると思います。

学校教育の場では、ルールに従わない生徒に対して、教師は「ルールに従わせる」という指導をすべき場面が生ずることがあります。しかし、教師がそばにいることで教師の存在が子供たちの励みとなり、言葉がけによって一歩を踏み出せることがあります。これは同時に自己肯定感を育てる契機となります。

このような支援者の「存在感」は、第1の支援としての「社会化」や第2の支援としての「個人化」のための支援とは別の日常的な「子どもを信じて見守る態度」から生まれるものと考えます。

つまり、「第3の支援」とは、第1や第2の支援のような「未来の充実」に向けた支援ではなく、「現在の充実」をめざす支援と考えます。

最後に、自己肯定感を育てるということについて考えてみましょう。最近の女子学生に「自分を好きか、嫌いか」と聞くと、多くの学生が「自分が嫌い」と答えます。これは自己評価の難しさを表わしていると思います。

ここである学生との「自己評価」に関する対話のメモを示します。

自己評価について（ある学生（女子）からの相談に答えて）

学生：中学まではちゃらんぽらんでも、やればできちゃっていた。しかし、高校から厳しさにめざめた。ランニングでも追いつめて練習できる。労力をかける。しかし、本番や人の目があるところでは緊張してしまう。

西村：

- ① 「いい加減はよい加減」という言葉がある。
- ② 森田正馬の「神経質問答」では、勉強に集中できない人に、「自分だけが集中できるなんて、むしのいい考えだ」と諭している。
- ③ ベテランのアナウンサーでも、「良いしゃべりをしてやろう」と思って緊張するそう。緊張するということは、今の自分の力量を超えようと努力することであり、向上心のあらわれではないか。緊張しないということは、発展性がない、成長がないということだろう。
- ④ 教育実習を行う学生への相談と回答をまとめた本で、「私は塾講師としていい教育をしているので、自信がある。いつもの通り、緊張しないでやっていけるだろう。ただ、実習先の学校の指導教員が、私のやり方でやらせてくれないのではということが心配である」という相談があった。「緊張する」と相談した学生は、「私はそんな自信を持ってないけれど、塾講師の学生は素晴らしいと思う」という感想だった。しかし、その本に書かれた教育学部長の回答は、「何年も教壇に立っている私だって、授業に行く前は、毎回、今回はうまくできるかどうか、不安になり、緊張する。自信があって緊張しないというあなたは、教師には向いていない。あなたに教わる子どもたちがかわいそうだ」というものだった。PDCAによって、自己の教授法をいつまでも改善する教師が「良い教師」なのだろう。

- ⑤ 「自分のダメなところ」を受け止めることは大切なことだ。しかし、それが自己否定や自己嫌悪につながるのは問題だ。[SWOT分析](#)では、「弱み」が逆から見れば「強み」だったということがよくある。
- ⑥ 障害があっても、必ずしも社会的不適応にはならない。コントロールが効いていて、自己制御ができれば問題にはならない。
- ⑦ 「失敗を恐れてチャレンジしない」という「敗北主義」が発展を妨げる。これは自己評価の問題である。とくに一回失敗してしまうと、自分を今までより低く見積もって、適正な目標を立てられなくなり、安全なレベルしか狙わなくなる。失敗は、その夢を諦めない限り、「挫折」ではなく「経験」ととらえたい。たとえば、受験も「経験」になる。受験したこと自体をプラスに考えると良い。

第13回

① ビジネスと社会貢献

駒崎弘樹『社会を変えたい人のためのソーシャルビジネス入門』では、最近のICTを活用して、ビジネスを通して社会をよくしていく方法を説いています。ここで、私の書評を紹介しておきます（[西村書評](#) 駒崎弘樹『社会を変えたい人のためのソーシャルビジネス入門』、PHP 研究所、2015年12月）。

本書では「フルタイムでNPOを事業として経営する」ための具体的方法が書かれている。駒崎氏は、「社会起業家」という自分を説明する言葉があとからくっついてきてくれたと言い、株式会社、社団法人、財団法人などの区分にはこだわっていない。

彼は2004年にNPOフローレンスを設立し、日本初の「共済型・訪問型病児保育」サービスを開始した。10年後に待機児童問題解決のため「おうち保育園」を創設し、これが後に「小規模認可保育所」として国策に採用された。本書では、「国に事業をパクってもらい、社会変革を行う方法」として、視察を受け入れ、官僚に「肝」と費用対効果を伝え、政策化につなげるよう助言する。また、「現実はもっと厳しいよ」と批判する「ドリームキラー」に対しては、「貴重な意見ありがとう。でもまあ、俺はやるけどね」という「スルー力」の必要を説くとともに、一割くらいは「よい批判」があるので、「なんで？」と聞き返し、彼らのライフスタイルを推察し、ターゲットとすべき人物像を発見するという、いわば「生きる力」の具体的発揮方法を示している。

また、このような具体的方法をネット上でも公開している。たとえば、「本格的な準備をしよう（情報編）」については次のとおりである。メンバーのメールはGメール、チームの予定表はグーグルカレンダー、ファイルの共有はグーグルやドロップボ

ックス、サイボウズ、ハングアウト、顧客管理システムはクラウド型のセールスフォースを利用して、グループウェアは無料で構築する。また、対外的な情報発信は、まずはブログとフェイスブック、ツイッターの3つを使う。さまざまな活動状況を発信することで、チーム内、さらにはステークホルダー（支援してくれる個人や財団・企業など）への活動報告になる。また、応援してくれる人を増やす効果もある。たまたま読んでくれた人が、「頑張っている人がいるんだ。私も手伝いたいな」と思ってくれるきっかけづくりになるからだ。

さらに、このように日々の活動報告が蓄積されることで新しくかかわってくれた人には、その団体の歴史や、メンバーたちの人となりを知ってもらえるツールとなる。そのほか、ブログやフェイスブック、ツイッターの更新をルーティンにすることで、将来、ウェブサイトをつくった時に、スムーズに移行しやすいというメリットもある。経営者個人が情報発信することで、自分自身を知ってもらえるいい機会になる。団体そのものの情報発信は学生インターンや社会人プロボノ（専門的技能をもったボランティア）にまかせる。ブログなどの更新は遠隔でもできるので、彼らにまかせやすい仕事だといえる。

そして、サービスインの前にはウェブサイトスタートさせる。これがないと、利用者に、どこか頼りない団体との印象を与えかねない。助成金などでお金が入ったころ、30万~50万円くらいでつくれるものにする。あるいは社会人プロボノにお願いして、タダ同然でつくってもらえるのならば、それに越したことはない。NPOやソーシャルビジネスにかぎらず、起業の鉄則は、最初は小さく、どんどん大きく育てていく。いかにお金をかけないで、いいものをつくっていけるかを考えるのが重要だ。なお、ウェブサイトをつくっても、フェイスブックとツイッターは生かしておこう。

一方、ブログはウェブサイトに移行させるのがいいだろうと言う。ネット社会において将来、生徒が利益を得る手段が拡大していることに無頓着であってはいけないといえよう。

本書が提唱する「新しい社会貢献」について、筆者は次のように考える。このような手の届く範囲で社会貢献したいという若者の志を大切に受け止めたい。もう一方で、過去の学生は（当時の公害垂れ流し企業などに代表されるような）「儲け主義はイヤ」という理由で教員や公務員を目指していた（今の学生は安定のためだが）。今後は、職業全般が社会貢献につながるという実態と認識も広げていきたいものだ。

また、ビジネスの側から社会に向けたメッセージも、ICTを活用して盛んに行われるようになっていきます。10年ほど前から、SNSを活用して、シェアによる普及と社会貢献を目指した企業広告が盛んになっています。

多摩美術大学教授佐藤達郎氏が、我々の青少年研究会の会合において、「若年層を中心とした情報接触・購買行動の変化に呼応した広告のトレンド」を報告してくださいました。それらの広告の先駆的な試みは今後の企業広告及び社会貢献のあり方を先導する重要な役割を果たしていると思います。

そこで、その報告の要旨とともに、ユーチューブを使った企業広告の内容を紹介したいと思います。

① ブランデッド・コンテンツ(非広告型広告)

[Sony BRAVIA](#)

[Sony BRAVIA メイキング](#)

[Dumb Ways to Die Metro Australia](#)

② ブランド・ウィル What to say

[DOVE EVOLUTION](#) 女性の true beauty とは何か

③ ソーシャル・クリエイティビティ 伝えるから巻き込む、つなげるへ

[ロッテ Fit's CM](#)

[T-mobile dance](#)

[T-mobile dance メイキング](#)

④ 一回性と真正性

[祝！九州 九州新幹線全線開通 CM 180秒](#)

[祝！九州 九州新幹線全線開通メイキング](#)

アップロード日: 2011/03/09 500万ヒット

⑤ 仕掛けのクリエイティビティへ

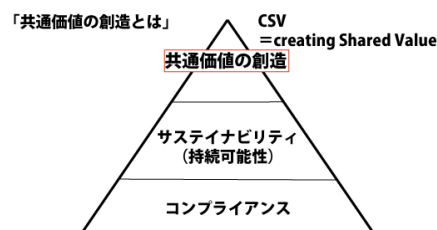
[Carlsberg stunts with bikers in cinema](#)

1500万ヒット

⑥ ソーシャル・グッド

CSV (Creating Shared Value)

[IBM Smarter City](#)



Fit'sについては、二人の学生から、小学生の時、「踊りが苦手なので、歌だけ歌っていた」「タレントが嫌いだったからやらなかった」という発言がありました。グレードアップのためには、タレントに頼らないセンスが求められるのでしょう。

また、最近ではSDGsの普及により、サステナブルを訴える企業広告が増えているように見受けられますが、上にあげたような、突出したセンスのものが少なくなって

いるような気がします。多くの社員が広告に関わるようになって、最大公約数的な内容になっているのではないかと思います。

最近のユーチューブなどの企業広告で、AC ジャパンを除いて、突出したセンスの動画を見つけた人は、掲示板などにぜひ報告してください。

5 まとめ「青少年教育論から得たこと」

第14回 青少年教育論の今後の展開：「豊かな人間性」という「常套句」によって失われたもの

「エリート教育」には批判も多いと思います。しかし、私は、「良きリーダー」として学生を社会に送り出すことを、大学が大衆化した今でも、必要であるし、可能だと思っています。ただし、そこでめざすリーダー像は、過去の「エリート教育」で生み出したリーダーではありません。新しい「社会の形成者」としてのリーダー像です。

たとえば、「豊かな人間性」という言葉が濫用されていますが、これでは、一般的な人物像が想定され、「必要な能力」が明らかになりません。

ここで関連する文献を紹介します（[西村書評](#) 竹村詠美『新・エリート教育 混沌を生き抜くためにつかみたい力とは』、2020年7月）

2人の子育てをする中、著者は「クリエイティブ・リーダー」がどのような教育環境で育ったのかについて強い関心を抱くようになり、コンサルティング業界で鍛えられた調査力と好奇心で世界の教育を探究し始めた。以来、100校を超える欧米やアジアのトップ校・先端校の実践を学び、30校を超える欧米の学校を訪問してきた。そこで浮き彫りになったのは、今までインターネット業界など変化の激しい業界に限られていたクリエイティブ・リーダーシップの発揮が、あらゆる分野において新・エリートの条件となってきたことだ。そうしたクリエイティブ・リーダーシップを発揮できる力を身につけるために有効なアプローチが、1人ひとりの興味に合わせて心身頭を統合的にバランスよく育む「ホール・チャイルド・アプローチ (Whole child approach)」という学びの考え方である。

著者は、日本の生徒一人あたりの義務教育予算はOECD（経済協力開発機構）加

盟国中で15位と高くはないが、国際学習到達度調査（PISA）の比較では、数学（6位）と科学（5位）で上位、読解（14位）もトップ10と僅差のレベルであり、従来の教科型教育において、学びの保障を効率よく実現してきたとしている。

しかし、変化が激しくグローバルな時代に求められるクリエイティブ・リーダーの資質やスキルは、限られた教科のテストで良い点を取る学力だけで育たないことは言うまでもなく、従来型の学校が抱えるジレンマが一気に露呈するだろうと危惧する。

教科で分断した教育の成果を、単元の履修やテストの点数という狭い範疇の学力や認知能力にフォーカスしすぎると、2020年から施行された新学習指導要領で提唱されている「主体的・対話的で深い学び」からは遠ざかる。なぜなら「主体的・対話的で深い学び」に達するには、豊かな人格や態度、価値観などのいわゆる非認知能力の育成を必要とするからだとし、これらの力を育むには、外的モチベーション（テストの点数、真正な目的のない大学受験など）ではなく子ども自らが目的意識を持ち、高い内的モチベーションで学校生活に取り組める環境が必要としている。

ホール・チャイルドの育成に必要な環境とは、「生徒一人ひとりが学びに目的を見出し、高い次元の思考力を実践する学びの環境になっている」、「子どもたちが先生や生徒たちを心から信頼し、建設的なフィードバックを与え合いながら、自らの高みにチャレンジできる環境になっている」、「生徒が訪問者に尋ねられたら、現在取り組んでいる課題の目的や、社会とのつながりについて説明できる」、「様々な表現能力を身につけて、学内外の人たちに発表する機会がある」。

さらに、著者は、新型コロナウイルスの直撃による長期休校は学びのあり方を根本的に問い直す好機となったと言う。「コロナ後を見据えた学び」をテーマにしたイベントのアンケートから、著者は、自律的な学習習慣や自己調整力、探究心などの非認

知能力による新しい学びの格差拡大を予見する。受け身で一方向の学びに終始し、管理されることに慣れている子どもたちが、自学自習のスキルやマインドセットを十分に備えていないのは当然であるとして、子どもの幸せを望まない教育者や保護者はいないはずだが、幸せな人生の実現を支援するための学校のあり方についての議論は少ないと警告する。そして、明治に始まり戦後 70 年以上の歳月を経て確立した教育観やシステムを進化させるのは、容易ではないが、地域コミュニティや教育委員会といったステークホルダー（利害関係者）も関与しながら、それぞれの学校がじっくりとホール・チャイルド・アプローチへの転換を検討すべきだと言う。

北欧のような高福祉国家と異なり、現在の日本の教育費の脆弱性を考えると、公共预算だけでホール・チャイルド・アプローチを実現することは難しいが、地域コミュニティや次世代の人材に期待したい企業が ESG（環境・社会・企業統治）投資として幼小中高の教育に参画することも大切だろうと言う。そのため、後章では、米国での産学民連携の最前線をレポートしている。

著者は、地球のどこにいてもハーバード大学やケンブリッジ大学のオンライン授業が受けられる日はもう来ているとして、素晴らしいことに、子どもたちは世界の最先端教育にアクセスしやすくなっているのだと言う。この学習環境の大転換を踏まえた上で、「学びへの内発的動機にあふれたホール・チャイルドを育むための学校はどうあるべきかを対面授業とオンライン授業を俯瞰的に捉えながら考える必要がある」と主張する。

著者は言う。「従来型の分断された授業にとられるのではなく、多様な個性や発達段階にある子どもたち 1 人ひとりの心身頭の健全な成長にフォーカスしたアプローチに移行することで、生涯にわたる自律的学習者が育つ地盤が形成される。土壌を耕

し多様なタネの特徴を尊重しながら成長を支えることで、未来の日本は創造性やイノベーションにあふれ、幸福度の高い国となり得るのだ」。

私は「資質向上」というあいまいな言葉を排除して、必要能力を「見える化」する必要があると考えます（[西村書評](#) 廣瀬裕一「『教員の資質向上』でいいのか、日本教育新聞社編集『週刊教育資料』教育公論社、1578号、pp. 35-37、2020年8月）。

1 資質向上という言葉への違和感

廣瀬は、“improving teacher quality”あるいは“upgrading the quality of teachers”を、我が国では「教員の資質向上」などということについて、この表現は、いつ誰が使い始めたのか知らないが、昭和22年の文部省と日教組の覚書にはすでにあるとしたうえで、次のように批判する。「資質は本来、生得的なものを意味し、向上はしない。言葉の意味は時代とともに変化もするから、今や法律上の文言ともなった『資質』が誤用であるとは言いきれないが、日本語の不適切な使用や解釈が、教員のクオリティ向上を阻害している現状がある」。

廣瀬は、平成28（2016）年に改正された教育公務員特例法には、その前年の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（副題略）」を受け、教員等の「資質」という語が頻出する。そして、それを「向上」させるために「研修」を行うこととされているとし、「校長及び教員としての資質の向上に関する指標」（22条の3）、指標を踏まえた「教員研修計画」（22条の4）、資質の向上に関する「協議会」（99一条の5）、「中堅教諭等資質向上研修」（24条）などと例示する。

しかし、『日本国語大辞典』や『広辞苑』では、資質とは「生まれつきの性質や才能」等とされており、先天的なものというその語義からすれば、後天的に研修によって「資質」を向上させることについて違和感があると言う。

私は、このことについて、クドバスの「能力カード」の表記ルールを想起する。クドバスの「能力カード」の表記には、「できる、知っている、態度がとれる」（技能・、知識・態度）という「縛り」があり、「資質」は書かないことになっている

（技術・技能教育研究所ホームページ）クリックして参照。クドバスは教育が可能であること、現実的な教育目標（としての能力）をもとにしたカリキュラム作成手法を目指しているからである。私は、さらに、教育が、「もともとのその人らしさ」とも言うべき「資質」にまで踏み込んで教育目標を設定すること自体に大いに抵抗を感じる。

2 立法及び行財政施策と「資質向上」の呪文

廣瀬は、「といっても、教員の〈資質〉向上が不可能なわけではない」として、国の立法や行財政施策に期待する。昭和49（1974）年のいわゆる人材確保法の制定は、教育職員給与の「優遇措置」（3条）により「すぐれた人材を確保」（1条）した。国策で教職へのインセンティブを付与し、教員全体の〈資質〉レベルを中長期的に底上げしたと言う。だが、廣瀬は、近年この優遇措置は大幅に縮減され、教員免許更新制と多忙化という負のインセンティブも加わり、志願者が減って〈資質〉レベルは中長期的に低落し、教員不足も深刻化している。これは国の大失策なのだが、「資質は研修で向上」という呪文をかけられた国民には、そのことが見えにくくなっているかもしれないと言う。

採用時点で、すぐれた資質の者を採用することによって、資質向上は可能ということなのだろうが、厚遇を依存的に期待するだけの「成績優秀」な学生を採用したところで、教育改革は期待できないように私は思う。

3 審議会答申における「資質」等

廣瀬は、答申で多用される養成・採用・研修の過程を通じた教員の「資質能力の向上」（昭 53 中教審、昭 62 教養審、平 24 中教審ほか）等の表現は、怪しいが不適切とも限らないと言う。「養成」の入試段階や「採用」選考では〈資質〉の低い者を排除できるし、「研修」で向上させるのは〈資質〉ではなく「能力」のほうである、と読めないこともない場合があるからであると言うのだ。

しかし、「能力」をはずして単に教員の「資質の向上」（昭 33 中教審、昭 46 中教審、昭 62 臨教審ほか、昭 57・5 初中局長通知も）などと言われると、救いようがないと廣瀬は言う。その一方で、「資」を抜いて教師の「質の向上」（平 17・10 中教審ほか）とされたこともあり、この表現ならば納得できると付け加える。

4 法律上の「資質」

廣瀬は、法律では最も不適切な「資質」になってしまうとして、その経緯を次のように説明する。平成 11（1999）年の文部科学省設置法（現 4 条 1 項 13 号）等でも使われているが、教特法に登場したのは平成 14（2002）年で、「十年経験者研修」を義務化し、「教諭等としての資質の向上を図るために必要な事項に関する研修」（旧 20 条の 3）と規定した。そして、平成 18（2006）年には教育基本法にまで「…必要な資質を備えた…国民の育成」（1 条）という表現が加わり、辞書とは異なる「資質」の

用法は広くお墨付きを得てしまったとし、冒頭に述べた平成 28 年の教特法改正はダメ押しであろうと批判する。

5 人格と修養

廣瀬は、それ以上に問題なのは、教育の根幹に関わる法律用語の曲解・誤解であると言う。まず、教育基本法 1 条の「人格の完成」について、文部（科学）省の公的解釈は、旧法以来、一貫しておかしいと言う。

改正法案を審議した平成 18（2006）年の国会答弁で文科大臣は、「人格の完成」とは「各個人の備えるあらゆる能力を可能な限り、かつ調和的に発展させることを意味する」と述べた。これは旧法制定直後の昭和 22（1947）年に、文部省訓令「教育基本法制定の要旨について」で示された定義をほぼ踏襲したものである。

しかし、この定義は「人格」の道德性を捨象し、能力面だけで無理に説明しており、常識と隔たると廣瀬は言う。廣瀬は、この「人格」とは自律の主体であり、この意味の人格性を有するがゆえに人間は尊厳である（カント）とし、人間だけが他の動物と異なり人権を享有することを正当化できる根拠もここにあると言う。

さらに見落とされがちなこととして、誰の「人格の完成」を目指すのかということについて、それは教育を受ける者だけでなく、教育を施す者の、でもあると言う。人は皆不完全。教育者自身も己の人格を磨き続け、その背中を見て子は育つと言うのだ。

廣瀬は、他の論文で、次のように述べている。近年、我が国の教育界では「豊かな人間性」という語がはやっている。しかし、教育の目的は、「豊かな人間性」ではなく、「人格の完成」である。「人格の完成を目指す」とは、教育を施す者が自らの自律

性の完成を目指しつつ、教育を受ける者の自律性の完成を目指すことを意味する。人格の完成を目指すところにこそ人間の尊厳があり、この尊厳性こそが人類の特権としての人権の根拠であることを忘れてはならない（廣瀬裕一「人格の完成を目指すとは」、上越教育大学教職大学院研究紀要第1巻、平成26年2月）クリックして参照。

このことについて、私は、社会教育の指導者論を思い出す。社会教育では、「学ぶ人は教える人、教える人は学ぶ人」と言う。「教うるは学ぶの半ば」ということである。

6 「研修」と「研究と修養」

「研修」とは「研究と修養」を意味するという古典的な解説や学説も、辞書的語義とずれており、解釈を見直す必要があるとして、廣瀬は次のように言う。

地公法は、「研修」は「任命権者が行う」（39条2項）と規定しており、職員にとっては、他律的な能力開発である。教特法も基本的に同じだが、それに加えて、自律的な「研究と修養」の責務を宣明する（21条1項）。教基法9条1項も同旨である。すなわち、他律的「研修」と自律的「研究と修養」は、内容的に重なるところはあるかもしれない。指導と学習の関係に似て、主体が異なる。そして「能力」を高める「研修」「研究」に対し、「人格」を高めるのが「修養」である。〈資質〉は何によっても高まらない。ところが、そこが整理されずにいるため、「修養」独自の意義は見失われかけていると廣瀬は述べ、教員不祥事が絶えないわけであるとしている。

私は、ここで、「能力開発を効果的に進め、結果として対象者の能力を発揮できるような環境を整える」という「能力管理の目的」をもっと鮮明に、という森和夫の観点を想起する（森和夫『実践 現場の能力管理：生産性が向上する人材育成マネジメント』）

ント』日科技連出版社、2020年8月、西村美東士書評) クリックして参照。自律的な「研究と修養」の責務は個人にあるのだが、その環境を整える「能力管理」の責任は、組織、チームにあるのである。

さて、廣瀬は、「人格」が「能力」に貶められ、「能力」が「資質」にすり替わり、「研修」と「研究と修養」が混同され、教員のクオリティ向上について、誰がどのように担うのか混沌とした現状に対して、「教員のクオリティ向上の6視点」を、改めて日本語本来の用法に留意して次のように整理する。

- ①人材確保（国）：国は、立法・行財政施策により、教員としての〈資質〉能力ある人材を確保する。
- ②養成（大学）：大学は、〈資質〉ある学生を集め、教員に必要な能力を習得させ人格を陶冶する。
- ③採用（教育委員会）：教育委員会は、選考により、〈資質〉能力・人格にすぐれた者を教員に採用する。
- ④研修（教育委員会）：教育委員会は、研修を計画・実施して、教員がその職務を遂行する能力を高める。
- ⑤研究（教員）：教員は、研修を受けるほか、自ら研究に努め、教育者としての能力を高め続ける。
- ⑥修養（教員）：教員は、教え子の人格を陶冶しつつ、自ら修養に努め、己の人格をも磨き続ける。

廣瀬は、近年、国の施策に従い教育委員会と大学が連携した教員の②養成・③採用・④研修の一体的改革が推進されていると評価しつつ、④研修と混同される⑤研究はともかく、①人材確保と⑥修養はなおざりになっているとし、「教育の危機、その

多くはここに淵源する」と警鐘を鳴らしている。

私は、教育政策が本質から離れて無責任に左右する状況を重要な問題だと感じている。その状況に抗して、日本語本来の用法に立ち返って、「資質」、「研修」、「人格」、「修養」を本質的に正しくとらえなおして議論しようとする廣瀬のこの主張は、大きな意義を持っていると考える。

次に学校の不毛な「ルール」について、考えておきましょう（[西村書評](#)工藤勇一

『麴町中学校の型破り校長 非常識な教え』、SB 新書、2019 年 9 月）

著者は、2014 年に千代田区立麴町中学校長に就任し、日本中で行われている教育を問い直し、学校改革を断行した。氏は、子どもの自律を重視し、宿題については「すでに分かっている生徒には無駄であり、分からない生徒には重荷である」として、定期テストについては「ある時点での学力を切り取って評価することに意味はない」として、固定担任制については「学級担任が生徒に対して責任を持ち過ぎてしまい、生徒の自律を妨げる」として、それぞれ廃止した。また、制服の改定や、私服を一部導入するなど数多くの改革に取り組んでいる。親が「いまもっとも子どもを入れたい」中学校と言われている。

大人が手をかけすぎることによって、子どもの自律のチャンスが奪われ、「人のせいにする」子どもが育つとして、本書は、子どもがもともと持っている力を伸ばすために、親はどう接すればよいか、学び・しつけ・人間関係をテーマに、親が陥りがちな勘違いとジレンマをときほぐす。また、未来を生きるために必須の非認知能力や対人スキルも具体的にレクチャーする。

宿題については、次のように言う。そもそもの目的は「子どもの学力を高める」ことだが、実際は作業になってしまい、やらされ感でいっぱい、机に座らせることを目的にしてしまうと、言われたことしかやらない子どもになりかねない。学習習慣とは、「主体的に」勉強できる子どもになってもらうことであり、そのために大人がすべきは、長時間の「やらされ勉強」を強制することではなく、子どもの学習意欲を高め、かつ自分に合った学習スタイルを見つけてもらうことである。

「わからないものをわかるようにする」学びのために、次のように言う。麴町中学校では期末テストを廃止し、3階層のテストを実施している。この単元テストは点数に納得できなかつたら、自己申告で再チャレンジができる。再テスト制度こそが、子ども一人ひとりの学びのスタイルを身につけるための肝。一発勝負のテストだと、意識が「他人との点数の比較」に向いてしまうので、素直に喜べない子どもたちが多い。比較対象が自分になるとそれを喜べる。すると、子どもたちはわからないものをわかるようにしようと主体的に課題解決のサイクルを回し始める。

しつけについては、次のように言う。叱る基準・しつけの優先順位を決めていけば、叱る頻度が減り、大人も子どもも不要なストレスを抱えなくてすむ。子どもとの付き合い方もかわる。さらに「本当にダメなこと」がはっきりと子どもに伝わるようになるので、子育てが楽になる。言わなくてもいいことはできるだけ言わない心がけが重要である。

著者は、「ルールを守らせることに必死な大人」に警告を発する。土曜日に重い勉強道具でも自宅勉強のために全部持ち帰るよう指導し、子どもが共有部に隠すようになると教員が必死に探し出す。著者は「そのあまりのくだらなさにあきれてしまっ

た」と言う。学校だけで通用させている「常識」が、社会的には「あまりにくだらないこと」である危険性には十分注意したいものだと評者も考える。

同様の書評を続けます（[西村書評](#) 工藤勇一, 鴻上尚史『学校ってなんだ!—日本の教育はなぜ息苦しいのか』講談社現代新書、2021年8月）。

鴻上氏は、巻頭で「先生を信頼したかった」が、校則の理由を尋ねてもまともな返答がなく、期待を裏切られたと話す。本編では、校長の工藤氏と劇作家の鴻上氏が、ブラック校則、いじめ、心の教育、不登校、教師の長時間労働等について語り合う。そこでは、「服装・頭髪の乱れは心の乱れ」という迷信、「朝の挨拶運動」はただの時間外労働、自律性を奪う宿題、「絆」と「団結」が目標になってしまう不合理などの問題を指摘する。

工藤氏は、「自分の生きている『社会』をよりよいものに成長させていくためには、そこにいる一人一人が『社会の当事者』として成長できなければならない」とし、学校という場はそれが学べる大切な場所であると言う。そのために特に重要なことは『対話』だとし、互いの違いを理解しながらも、全員がOKなものを見つけ出すための『対話』のプロセスを学ぶことさえできれば、社会は確実に変えられると期待する。そして、学校の大切な役割として、第一に「すべての子どもたちが、社会でよりよく生きていけるような力を身につけていく場」を挙げる。第二に、「2030年、人類は滅ぶかどうかの岐路に立つ」と多くの科学者や専門家が指摘することから、SDGsの目標のもとに、「すべての子どもたちが、持続可能な社会を築いていくための方法を共に学び合う場」を挙げる。

現在、教員自体が、校則徹底や雑務に追われて、自由闊達に「対話」する風土が育っていないという状況がありはしないか。社会から隔離されたこのような「学校の因襲」を打ち破ってチームとして「対話」を始めることこそ、まずは必要だと評者は考える。

【以下長文】

本書では、校長の工藤氏と劇作家の鴻上氏が、ブラック校則、いじめ、心の教育、不登校、教師の長時間労働等について語り合う。そこでは、ブラック校則問題は一部にすぎない、「服装・頭髪の乱れは心の乱れ」という迷信、教育委員会と議会の力学、教育の最上位の目的、「朝の挨拶運動」はただの時間外労働、全員を当事者に変えるのが校長の仕事、自律とは自ら考える習慣をつけさせること、自律性を奪う宿題、定期テスト廃止でめざすこと、PTAが決める頭髪・服装のルール、スーパー教員がもたらした学級崩壊、日本独特の「みんな同じ」、五分前行動のくだらなさ、しつこいくらいに生徒とつきあう、密接な関係をつくらないと、間を理解できない、服装なんてどうでもいい、違うクラスの生徒を授業に参加させる、「絆」と「団結」が目標になってしまう、日本の教育は精神主義的、誰も本気で思っていないスローガン、社会に向けて自分の「実感」を伝える、感情をコントロールする技術、事実へのアプローチの仕方を学ぶ英国の授業、子どもたちに権限を与えずに教室で政治を扱う矛盾、タイムマネジメントを学ばせない日本、世の中の矛盾を考える授業、言語化して意識をコントロールする、エンパシーを獲得する、授業とは一対一、日本にユニコーン企業が少ない理由、高度成長期の教育モデルはもう通用しない、教育から見えて

きた日本社会と続く。巻頭で鴻上氏は、「先生を信頼したかった」が、校則の理由を尋ねてもまともな返答がなく、期待を裏切られたと話す。

工藤氏は言う。「『服装頭髪の乱れは心の乱れ』というフレーズは、長い間、日本中の学校でまことしやかに言われてきました。しかし、情報化社会になった今ではこのことがまったくの迷信であることなど、ほんとうは日本中の誰もが知っているはずのことです。欧米の学校ではそもそもそんな概念すらないので、これが学校教育の本質ではないなんてちょっと考えれば簡単にわかることだからです。にもかかわらず、多くの学校では今でも相変わらずルールを維持しています。「服装頭髪のことなど勉強には関係ない」、「そんなことを気にするんじゃない」、多くの教師たちが声を荒らげてこう言います。しかし現実には教師が厳しく指導すればするほど、生徒たちは服装頭髪のことをますます意識するようになってしまいます。さらに悪いことには、やればやるほど生徒と教師のあいだの「信頼関係」というもっとも大切なものを失っていきます。そして、教師自身が不幸になっていくのです」。

そして、次のように続ける。「人は信頼する人や尊敬する人からしか価値観を学びません。多くの場合、好きな人からしか学ばないと言ってもよいのかもしれませんが。ですから、信頼を失った教師が生徒たちにどんなに立派なことを述べたとしても、その言葉は生徒たち自身の価値観、生き方に響くことはほぼありません。それは教師にはとてつもなく苦痛です。その延長線上には対立関係しか生まれませんから。校則は教師が意識すればするほど生徒も意識するようになります。生徒たちに『勉強以外のことに目をとられるな』と言いたいのであれば、校則は逆に厳しく注意してはいけないのです」。

さらに、教育の「問題」は作られた幻想にすぎないとして、次のように言う。「多くの場合、教育の多くの『問題』は作られた幻想にすぎないのかもしれませんが。そして、そうした『問題』にたくさんの子どもたちが苦しみ、結果として作った大人たちさえ苦しんでいるのです。小一プロブレム、中一ギャップ、不登校、校則、発達障害・・・、ほんとうにそこに「問題」があるのでしょうか。ちょっと見方を変えれば、そこにはそもそも問題などないのかもしれませんが。というより、ほとんどの場合、明らかにそこには「問題」などないのです。じっと席に座ってられない小学一年生かなぜ問題なのでしょう。デンマークでは子どもがたとえ床に転がって授業を受けていても叱られることなどないと聞きます。教師は子どものいったいどこに注目すべきなのでしょう。座席にじっと座ることのできる忍耐力でしょうか。それとも学ぶ意欲なのでしょう。学校に行かないことはほんとうに問題なのでしょう。むしろ、そのことでみんなが不幸になることこそが問題だと私には思えます。学校は社会に山る準備期間として価値があるのですから、学校に行くこと自体が目的には成り得ないはずで

す。校則も同様です。公立の中学校では校内でアメやガムを食べていることが「重罪」のように扱われますが、外国では授業中に飲みものやお菓子を食べてもよい国もあります。問題は「問題だ」と言った時から問題になるのです。世の中のルールやモラルに照らして考えれば、ガムを食べていることが問題になるのではなく、包み紙が床に落ちているとか、ガムが吐き出されていたとか、そうしたことこそ問題なはずで

むしろ、そういう問題は世の中で起こっている問題と同じことですから、よりよい社会を作るためにはどうすべきかを学ぶチャンスです。生徒たち自身に当事者として対話させればよいのです」。

さらに工藤氏は、「自分の学校を当事者として受け止める」として、次のように言う。「自分のいる学校を否定することは、自分の生きている社会を否定すること。僕自身はそんな気がするのです。まずは自分の生きている社会を受け入れる、そのためには自分の学校のありのままを、すべての課題もひっくるめて当事者として受け入れる。たとえ苦しくてもこのことが大切だと思います。『なんで、うちの学校はダメなのか』『なんで、日本はダメなのか』などと言って、自分がその組織の構成員の一人であることをつい忘れてしまいます」。

そして工藤氏は言う。「当たり前のことですが、自分の生きている『社会』をよりよいものに成長させていくためには、そこにいる一人一人が『社会の当事者』として成長できなければならないということです。一見不可能なことのように感じるかもしれませんが、学校という場はそれが学べる、大切な場所であることを僕は自らの体験を通して確信することができたのです。そのために特に重要なことは『対話』です。互いの違いを理解しながらも、全員がOKなものを見つけ出すための『対話』。このプロセスをすべての子どもたちに学ばせることさえできれば、社会は確実に変えられます」。

巻末で工藤氏は、人は信頼する人からしか価値観を学ばない、教育の「問題」は作られた幻想にすぎないとし、自分の学校を否定するのではなく当事者として受け止め、全員が合意できることを見つけるための「対話」をつくりだすよう主張する。そして、学校の大切な役割として、第一に「すべての子どもたちが、社会でよりよく生きていけるような力を身につけていく場」を挙げている。そして、「2030年、人類は滅ぶかどうかの岐路に立つ」と多くの科学者や専門家が指摘することから、SDGs

の目標を受け、第二に、「すべての子どもたちが、持続可能な社会を築いていくための方法を共に学び合う場」を挙げる。

現在、子どもたちがこのような人類の課題に「当事者意識をもって取り組む」ようになるための教育が、社会から学校に求められている。だが、学校の教員自体が、校則徹底や雑務に追われて社会と断絶し、自由闊達に「対話」する風土が育っていないという状況が見受けられる。本書では、「従順な子をつくる教育は、もう終わりにしよう」と訴えているが、教員自体が社会からは隔離された「学校の因襲」に対して「従順」を強いられている状況を打ち破って「対話」を始めることこそ、まずは必要だと評者は考える。

次に、スウェーデンの若者政策について見ておきましょう（[西村書評](#) 両角達平『若者からはじまる民主主義—スウェーデンの若者政策』萌文社、2021 年7月）。

本書は、若者の選挙投票率が8割を超えるスウェーデンの教育政策や余暇政策を解説する。学校では、生徒組合、学校選挙などによって、民主主義を教えている。だが、それ以上に若者が「影響力」を行使できるのは、若者の7割が参画する若者協議会や政党青年部などの若者団体によるところが大きい。若者に関する政策、実践に若者団体が参画する機会が与えられ、その結果として若者の声が反映されて初めて「若者による影響力」が発揮されたとして、政策が評価される。「参画」はあくまでその過程にすぎない。それが民主主義の根幹をつくっていると著者は言う。

ユースセンターは、もともとは思春期にエネルギーが有り余っている若者たちのための「余暇政策」の一環として導入された。そこでは、専門職の余暇リーダーが配置され、就業や学力ではなく、若者個人の多様な余暇の充実が純粋に目指される。19

70年代のユースセンターでは、施設内での若者の飲酒などによる問題で活動の質の低下が目立ったが、それでもユースセンターに若者を留めておくことは、社会的な問題を防止する役割を持つとして存在が認められた。そこが若者の活動の基盤の一つとなり、80年代には若者が施設の運営に参画するようになって自治の機能を高めたとする。このことは、青少年施設としては重要な考え方と言えよう。わが国では、施設内で小さな非行があると、まずは「少なくとも施設内では」非行を排除することが求められるがちだ。しかし、支援者は非行対策だけに追い回されるのではなく、若者の自治や参画、団体活動の促進という大局的な戦略を進める必要がある。

【書評長】

著者は言う。若者は社会の問題ではなく「リソース(資源)」である。著者は、民主主義国家スウェーデンのロジックを「若者政策」を介して解き明かす。そして、若年層の投票率が高く維持されているスウェーデンの若者が社会に参画する姿をレポートしながら、若者の7割が参画する「若者団体」や、教育政策と学校、若者の余暇政策と実践などについて解説する。

スウェーデンの若者政策について、著者は次のように説明する。移行期にある若者は、身体的な成長や健康、学校での就学、余暇での活動、政治への参加、就業による経済的な自立、家庭の形成など、さまざまなライフイベントを経験する。それに対応するように、若者政策が構成されている。そして、スウェーデンの若者政策は「参画」という言葉より「影響力」という言葉が使われる。若者の「社会への影響力」は、若者に関するありとあらゆる決めごとや政策、実践に若者が参画する機会が与えられ、若者の声、考え方、視点に耳が傾けられ、その結果、政策や実践に反映され、社会が変わるときに初めて「影響力が発揮された」となる。「参画」はあくまで過程で

あり、若者の参画の結果として社会が変わるところまで、スウェーデンの若者政策は
見ている。

著者は、「あとがき」で次のように言う。スウェーデンで起きていることは非常に
シンプルである。あらゆる人の一人一人の人権を保障し、「あなた自身の社会」を実
現すること、つまり「民主主義をつくり出す」という理念に集約される。若者団体や
スタディサークルなどのアソシエーション活動こそが民主主義の根幹をつくと位置
付けるのがスウェーデンであり、学校やユースセンターが主軸ではない。これこそス
ウェーデンの民主主義のロジックである。

「非行の温床ともなり得るユースセンターがそれでも必要な理由」として、著者は
次のように述べている。若者の日常は常に非行と隣り合わせの環境である。スウェー
デンのユースセンターの歴史に照らせばユースセンターから若者の「非行」は切って
も切れない。もともとは思春期にエネルギーが有り余っている若者たちのために「何
か新しいことに打ち込める機会」を提供する「集いの場」として導入された。197
0年代のユースセンターでは、施設内での若者の飲酒などによる問題で活動の質の低
下が目立ったが、当時、ユースセンターに若者を留めておくことは、社会的な問題を
防止する役割を持つとみなされていた。この後、80年代には若者に施設の運営に参
画してもらうことで自治の機能を高め、非行予防という色は薄まった。

青少年施設に勤めていた評者から見ると、この「器の大きさ」はうらやましい限り
である。わが国では、施設内で若者の小さな非行があると、行政や世間から叩かれ、
まずは「施設内では非行を駆逐すること」を求められる。ユースワークがそこで拘泥
している状態では、若者の主体性を尊重した社会参加の促進にまでは進めないだろ
う。

第15回 まとめ

私は、生涯学習の推進による上下同質競争から水平異質共生への転換を提唱してまいります（西村美東士 「生活講座ーネットワークのつくり方」 [PDF](#) [TXT](#) 、山本慶裕 編『学びのスタイル』、玉川大学出版部、pp.232-252）。そこでは、次のように述べました。これを参考に、今日の社会に若者がどう主体的に生きられるのか、考えてみていただきたいと思います。

ぼくは狛江プータロー教室（狛プー）という青年教室の講師をしている。狛プーでは「1年に1回来ればメンバーだ」、「来たくないときには来ない方がよい（潔い撤退）」というネットワーク型の運営が行われている。あるメンバーが「狛プーはありのままの自分が両手を広げて歓迎される場だ」と言った。しかし、同じ彼が「狛プーはぼくにとって安らぎの場ではない。あるときにはつらい鍛練の場だ」とも言う。そのときのつらさは、奴隷のつらさではなく、それとは正反対の自己決定のネットワークのなかでの自由のつらさだ。従来の主人か奴隷かという「たて社会」（ヒエラルキー）の人間関係のなかで奴隷として適応しようと頑張ってきた私たちには、奴隷ではない者同士の「私は私、あなたはあなた」の狛プーのネットワーク型運営が寂しかったり辛かったりするときもある。しかし、狛プーがそのように職場や学校での奴隷たちにとってのオルタナティブ（あるものとは違うもう一つの）な積極的積極の自己決定によるネットワークだからこそ、狛プーは自由を愛するプータローのこころが交流する癒しのサンマ（時間・空間・仲間という3つのマ）になりえているといえるのである。

そして、上の本では、生涯学習で出会うべき真実とは、次のようなものではないか

と書きました。

魯迅は差別を受けつつ学んでいた日本で、次のようなフィクションを書いている（小説『藤野先生』）。

「わたしは仙台の医学専門学校へ行くことにした。東京を出発してからまもなく、ある駅に着いた。日暮里と書いてあった。なぜか知らないが、わたしはいまなおこの名を覚えている。そのつぎは水戸を覚えているが、ここは明の道民の朱舜水先生が客死されたところである。仙台は市であるが、さほど大きくはない。冬はとても寒かった。中国の学生はまだ誰もいなかった。」

じつは、日暮里駅は、魯迅がはじめて仙台へ行った翌年に開設されたのだ。また、当時、仙台医学専門学校と同じ構内にある第二高等学校には施霖という中国人学生がおり、魯迅はその施霖と同じ下宿にいたことがあって、いっしょにとった写真も残っているそうだ。この魯迅のフィクションについて、駒田信二は次のように述べている。

「事実ではないが真実なのである。真実を表現するために虚構を用いるのが小説である。虚構と虚偽とは別種のものであるが、虚構を用いることによって小説はまた虚偽におちいることもある。要は虚構が真実を表現しているかどうかである。「藤野先生」が魯迅にとって、動かしがたいほど切実な真実の表現であることはいうまでもなからう。つまり「藤野先生」は単なる回想記でもなく、自伝の一節でもなく、「自伝的な小説」なのである。（中略）同じように読むことによって、少くとも私は深い感動を得ることができるのである。真実に触れる思いが深まるのである。」

つまらない事実（ときには虚偽である）を詰め込むためにぼくたちは生きているのではない。だが、今までの学歴偏重の上下競争社会では、社会から与えられたカギカ

ツコ付きの「権威」（地位、肩書き）や、その権威を代弁するマスメディアが大量放出する「事実」という「権威」にぼくたちの内面はややもすると従おうとしてきた。しかし、他方で古くから人びとが愛してきたこの魯迅の著作などに見られる小説的眞実や、パソコン通信のなかでの「善と悪」の入り交じったコミュニケーション内容は、そういう「権威」に歯向かい、眞実への好奇心を奔放に発揮するフリーチャイルド（自由で反抗的な子ども心）として、学歴偏重社会の価値観に異議申立てをしている。すなわち、これらは生涯学習社会への転換を進めるためのカウンター・カルチャー（対抗文化）としての役割を果たしているのである。

このように心から感動できる眞実と出会うためには、ぼくたち自身が、ヒエラルキーが依拠する制度上の権威に惑わされずに、それを「ケツ」と言って笑い飛ばし、自立的な価値を有するもの同士で水平に交流しようとするネットワーク・マインド（対等な考えや態度）を身につけることが必要である。そういえば、パソコン通信で外側から与えられた地位や肩書きを振り回す人は、江戸時代の馬鹿殿様や、部下を従えてふんぞり返って大蔵省の廊下を歩く幼稚なエリート官僚たちと同様、物笑いのタネだ。これに対して、知的世界に遊ぼうとする人は頭が柔らかく（エッグヘッドという）、権威主義者をからかってジョークを飛ばすネットワーカーのはずである。そもそも、学問だって、世俗の権威を超越した世界になければならない。宴会の席順を争い合うような研究者がいたらお笑いぐさだ。

学生の就職戦線においても、この事実と眞実の峻別は重要である。採用試験などは、「人間万事塞翁が馬」の代表格であり、また、事実（合否）と眞実（実力）は必ずしも一致しないものだ。そういうとき、みずからの眞実を大切にする生き方こそ、客観的にはもっとも幸福を追求する生き方といえるのである。

個人化社会において、自己決定が「自己責任」とされてしまうなかで、自己決定を避けてくぐり抜ける若者が増えています。その傾向に同調する研究者も多いのですが、青少年教育論の視点からは、個人化の傾向を時代の必然ととらえ、むしろ自己決定、自己責任のための能力を育てることが必要だと私は考えます。

そのとき、自己決定によって「失敗」したとき、それを「挫折」ととらえるのではなく、「貴重な経験」として前向きにとらえ、自己肯定感を高めるように「肩を押す」ような支援が必要だと思うのです。

もう一つ、「暗黙知の見える化による支援」をあげておきたいと思います。こういう教材が示されずに、「見て盗め」とされるのは、従業員にとっても、企業にとっても、残念な話です。「効果的な人材育成」、ほとんどの企業で不十分であることは想像がつきます。

<http://mito3.jp/anmokusikasika/volvo.html>

最後に、私が開発した水平異質共生における出会い（エンカウンター＝遭遇）を促すワークショップの方法を紹介します（参照 西村美東士 HP [ICT ワーク・ゲーム集](#)）。

青少年教育論

第一印象ゲーム

			A	B	C
問	好きな季節				
1	1, 春	印象			
	2, 夏	正解			
	3, 秋	採点			
	4, 冬				
問	好きな料理				
2	1, 和食	印象			
	2, 洋食	正解			
	3, 中華	採点			
	4, エスニック				
問	やってみたい職業				
3	1, タレント	印象			
	2, 作家	正解			
	3, 実業家	採点			
	4, 総理大臣				
問	行きたい外国	印象			
4	(自由記述)	正解			
		採点			
問	好きな色	印象			
5	(自由記述)	正解			
		採点			
	合計				

実感を話す 愛のかたち

フォーカシング

▶ かたち	ハート	球
▶ 大きさ	両手に収まる	抱きかかえられるくらい
▶ 温度	人肌	体温
▶ 位置	胸のあたり	横(友達)
▶ 距離	50センチ	くっつくくらい近い
▶ 肌触り	ふわふわ	もこもこ
▶ 色	ベージュ	緑

理由を話す 価値観ゲーム

異なった価値観と出会い、共感するおもしろさー『価値観ゲーム』
 参考 坂口順治「実践・教育訓練ゲーム」日本生産性本部
 2021年12月13日改定 西村美穂士

	愛	健康	自己実現	富	奉仕	正義	名誉	得点	順位	
愛	●	×	×	×	×	○	○	= 2	5	あまり興味が無い
健康	○	●	×	×	○	○	○	= 4	3	健康を害してもその時はその時 いま楽しければ
自己実現	○	○	●	○	○	○	○	= 6	1	自分がやりたいことは実現したい
富	○	○	×	●	○	○	○	= 5	2	趣味の実現の次は富
奉仕	○	×	×	×	●	○	○	= 3	4	自分のために生きる 愛よりも人のために何かすることが大事
正義	×	×	×	×	×	●	○	= 1	6	
名誉	×	×	×	×	×	×	●	= 0	7	普通でいい

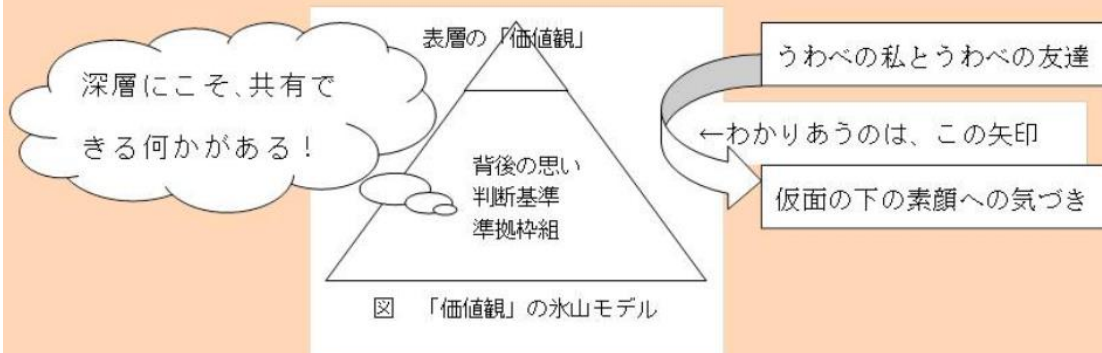
21

	愛	健康	自己実現	富	奉仕	正義	名誉	得点	順位	止揚
愛	●	×	×	○	○	×	○	= 3	4	両面価値の受容 アンビバレンツ
健康	○	●	○	○	○	○	○	= 6	1	健康でないと何もできない
自己実現	○	×	●	○	○	×	○	= 4	3	私的な愛より社会的な自己実現
富	×	×	×	●	○	×	○	= 2	5	
奉仕	×	×	×	×	●	×	○	= 1	6	余裕が無いと奉仕ができない
正義	○	×	○	○	○	●	○	= 5	2	親愛の情を持つ人でも不正は咎める ルールを守る
名誉	×	×	×	×	×	×	●	= 0	7	奉仕の気持ちを名誉のために曲げたくない

21

価値観ゲームまとめ

－ 表層にだまされるな、「判断基準」こそあなたらしさとその人らしさ －



内面を感じ取る パントマイム

幸せの枠組みを広げる

幸せの瞬間

4/26「青少年指導者のための社会学」

ペーパーレスカード記入結果

DVDを見ながら作業してる時	甘い物を食べてる時
EXILEのライブ中	期間限定のたい焼きを食べた時の一口目
いい夢見た朝、起きた瞬間	球技大会のフリースローで静まり返ってる中で決めたあとの歓声の声をきいた時
いつも混んでて座れない電車が今日は座れた時	見た映画が面白かった時
おいしいもの食べてる時	好きなことがやれる時
お金がたくさんある時	好きなことを好きなようにことごとくできる時間がやってきた時
お風呂から上がってホカってる時	授業おわって帰れる瞬間!
お味噌汁の具が、なめこだった時	出かけた時、偶然セールで安く物が買えた時
ケーキを食べた時	寝ていられる時
こたつで寝てる時	新しい喫茶店を見つけて、その店で初めてお茶を飲んで美味しかった時
ショートケーキ食べてて、最後の最後まで苺をとっておいて、最後の一口を苺と共に食べる時	掃除が終わった自分の部屋でゴロゴロする時
ショートケーキ食べてる時	暖かい布団で寝てる時
ずっと食べたいと思っていた食べ物やと食べれた時	男の人の強くて早いバイクを、上手くカットできた時
セールなどで安く物が買えた時	朝、アラームが鳴る前に目覚めた時
テストでいい点取れた時	朝、電車が空いてた時
テスト週間が終わった時	電車に乗ろうとして、同じ車内に友人と鉢合わせした時
テニスしてる時にラインぎりぎりに球をだして相手がとれなかった時	髪型が朝一発で決まった時
ドッチボールで人を当てた時	美味しい物を食べた時
ハートのボーイフルが出てきた時!	舞浜駅に着いてディズニーランド、シーまで歩いている時
ピクサンダーのノリがよかった時	面白かった本を読み終わった時
ライブが終わって飲み物を飲んでる時	面白かった本を読み終わった時
飲み物を飲んでる時	友人のツンデレのデレを目の当たりにした時
雨の日にいちごジュース飲む時	友達からごほんのお祝いきた時
映画館での、映画の始まる瞬間	友達とたわいもない話をしてる時
応援してる人が優勝した時	予定の整理をして今後の予定を把握してワクワクする時
家から駅まで信号いくつかあるのにノンストップで行けた時	欲しい物を買えた時
家に帰ってから愛犬の頭をなでている時	欲しかった物がセールになった時
家に着いて、ごほんができていた時	欲しかった本が思わなかった時に手に入った時
解けないなぞなぞが解けた時	冷えてる麦茶を一气飲みした時
寒いところから暖かいところに入った時	冷たい友達が優しい時
	冷蔵庫にマミーが入っている時

2012/6/3

2012「青少年指導者のための社会学」

4

書 名 令和4年度『青少年教育論』テキスト

著 者 若者文化研究所代表 西村美東士

発 行 2022年4月1日



Copyright © Nishimura Mitoshi All Rights Reserved.

Supported by vivo-design.

表紙デザインは、人々の地域での暮らしや仕事を表わしています